

茨城県教育財団文化財調査報告第42集

一般県道矢幡潮来線道路改良工
事地内埋蔵文化財調査報告書

塙　貝　塚

昭和62年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第42集

一般県道矢幡潮来線道路改良工
事地内埋蔵文化財調査報告書

はなわ
塙 貝 塚

昭和 62 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団



天山山脈全貌

序

茨城県行方郡潮来町の北部、大賀地区内を通る一般県道矢崎・潮来線の改良工事が、茨城県道路建設課によって計画されております。これは從来の路線の西側にバイパス道を新設するものであります、その予定地内に塙貝塚が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県(道路建設課)と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、昭和61年1月から同年3月まで塙貝塚の発掘調査を実施いたしました。この調査によって、貴重な遺構・遺物が検出され、潮来町の歴史を解明する上で多大の成果を上げることができました。

本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県(道路建設課)をはじめ、茨城県教育委員会、潮来町教育委員会等関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

財団法人 茨城県教育財団

理事長 川又友三郎

例　　言

- 1 本書は、茨城県（道路建設課）の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和60年度に発掘調査を実施した茨城県行方都潮来町に所在する墳貝塚の調査報告書である。
- 2 墳貝塚の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理　事　長	竹内 藤男 川又友三郎	～昭和61年3月 昭和61年4月～
副 理 事 長	川又友三郎 磯田 勇	～昭和61年3月 昭和61年4月～
常 務 理 事	萩原藤之助 滑川 貞雄	～昭和61年3月 昭和61年4月～
事 務 局 長	堀井 昭生	昭和60年4月～
調 査 課 長	青木 義夫	昭和59年4月～
企画管理班	班　長	北畠 健
	主任調査員	加藤 雅美
	〃	山本 静男
	係　長	田所多佳男
	主　事	大曾根 徹
	〃	山崎 初雄
	〃	大部 章
調査第班	班　長	安藤 幸重
	主任調査員	人見 晓朗
	〃	高村 勇
整 理 班 長	加藤 雅美	昭和61年度

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、高村 勇が執筆・編集を担当した。
- 4 石器の材質鑑定は、茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏に御指導をいただいた。
- 5 本書に使用した記号等については、第3章第1節2の記載方法の項を参照されたい。
- 6 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力をいただいた関係機関、関係各位に対し心から感謝の意を表したい。

目 次

序

例言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	10
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	10
第2節 竪穴住居跡	17
第3節 土坑	50
1 繩文時代の土坑	50
2 粘土貼り及びその可能性を有する土坑	53
3 その他の土坑	60
第4節 地下式坑	66
第5節 掘立柱建物跡	76
第6節 その他の遺構と遺物	84
1 墓壙	84
2 溝	86
3 櫛列跡	86
4 斜面部トレンチ	89
5 貝類	89
6 その他の出土遺物	94
第4章 まとめ	110
第1節 遺構について	110
1 住居跡	110
2 土坑	113

3 挖立柱建物跡・柵列	115
第2節 遺物について	118
1 土器類	118
2 土錐類	119
3 石器・石製品について	122
終章 むすび	125

挿 図 目 次

第 1 図 調査区呼称方法概念図	2	第 21 図 第 7 号住居跡出土土器 実測図	30
第 2 図 墓貝塚周辺遺跡分布図	8	第 22 図 第 7 号住居跡出土土器 拓影図	31
第 3 図 墓貝塚遺構配置図	15~16	第 23 図 第 8 号住居跡カマド 実測図	31
第 4 図 第 1 号住居跡実測図	17	第 24 図 第 8 号住居跡実測図	32
第 5 図 第 1 号住居跡出土土器 実測図	18	第 25 図 第 8 号住居跡出土土器 実測図	33
第 6 図 第 1 号住居跡出土土器 拓影図	18	第 26 図 第 8 号住居跡出土土器 拓影図	34
第 7 図 第 2 号住居跡実測図	19	第 27 図 第 9 号住居跡実測図	34
第 8 図 第 2 号住居跡出土土器 実測図	20	第 28 図 第 9 号住居跡出土土器 実測図	35
第 9 図 第 2 号住居跡出土土器 拓影図	20	第 29 図 第 9 号住居跡出土土器 拓影図	35
第 10 図 第 3 号住居跡実測図	21	第 30 図 第 10 号住居跡実測図	36
第 11 図 第 3 号住居跡出土土器 実測図	22	第 31 図 第 10 号住居跡出土土器 実測図	37
第 12 図 第 3 号住居跡出土土器 拓影図	22	第 32 図 第 10 号住居跡出土土器 拓影図	38
第 13 図 第 4 号住居跡実測図	23	第 33 図 第 11 号住居跡実測図	39
第 14 図 第 4 号住居跡出土土器 実測図	24	第 34 図 第 11 号住居跡出土土器 拓影図	40
第 15 図 第 4 号住居跡出土土器 拓影図	24	第 35 図 第 13 号住居跡実測図	41
第 16 図 第 5 号住居跡実測図	25	第 36 図 第 13 号住居跡出土土器 拓影図	41
第 17 図 第 6 号住居跡実測図	27	第 37 図 第 15 号住居跡実測図	42
第 18 図 第 6 号住居跡出土土器 実測図	28	第 38 図 第 15 号住居跡出土土器 実測図	43
第 19 図 第 6 号住居跡出土土器 拓影図	28		
第 20 図 第 7 号住居跡実測図	29		

第 39 図 第15号住居跡出土土器	拓影図	60
拓影図		43
第 40 図 第16号住居跡実測図	実測図	60
第 41 図 第16号住居跡出土土器	第 57 図 第53号土坑出土土器	
拓影図	実測図	61
第 42 図 第17号住居跡実測図	第 59 図 土坑実測図(1)	62
第 43 図 第17号住居跡出土土器	第 60 図 土坑実測図(2)	63
実測図	第 61 図 土坑実測図(3)	64
第 44 図 第17号住居跡出土土器	第 62 図 土坑実測図(4)	65
拓影図	第 63 図 第1・2号地下式坑	
第 45 図 第18号住居跡出土土器	実測図	66
実測図	第 64 図 第2号地下式坑出土土器	
第 46 図 第18号住居跡実測図	拓影図	68
第 47 図 第18号住居跡出土土器	第 65 図 土坑出土土器拓影図(1)	69
拓影図	第 66 国 土坑出土土器拓影図(2)	70
第 48 国 第44号土坑出土土器	第 67 国 第1号掘立柱建物跡	
実測図	実測図	77
第 49 国 第44号土坑出土土器	第 68 国 第2号掘立柱建物跡	
拓影図	実測図	78
第 50 国 第74号土坑出土土器	第 69 国 第3号掘立柱建物跡	
実測図	実測図	79
第 51 国 第74号土坑出土土器	第 70 国 第4号掘立柱建物跡	
拓影図	実測図	80
第 52 国 土坑実測図	第 71 国 第5号掘立柱建物跡	
(粘土貼り土坑-1)	実測図	81
第 53 国 土坑実測図	第 72 国 第6号掘立柱建物跡	
(粘土貼り土坑-2)	実測図	82
第 54 国 土坑実測図	第 73 国 第7号掘立柱建物跡	
(粘土貼り土坑-3)	実測図	83
第 55 国 土坑実測図	第 74 国 第7号掘立柱建物跡出土	
(粘土貼り土坑-4)	貨幣拓影図	83
第 56 国 第71号土坑出土土器	第 75 国 第8号掘立柱建物跡	

実測図	83	第101図 土器片錐の大きさ	120
第76図 第1号埋甕実測図	85	第102図 土器片錐平均重量	120
第77図 出土土器実測図	85		
第78図 第1号溝実測図	87		
第79図 第1号柵列実測図	88		
第80図 第2号柵列実測図	88		
第81図 第3号柵列実測図	88		
第82図 第4号柵列実測図	89		
第83図 トレンチ土層断面実測図	90		
第84図 遺構外出土土器実測図	91		
第85図 遺構外出出土土器 拓影図	95		
第86図 遺構外出出土土器 拓影図	96		
第87図 遺構外出出土土器拓影図	97		
第88図 遺構外出出土土器 拓影図	98		
第89図 石器実測図(1)	100		
第90図 石器実測図(2)	101		
第91図 石器実測図(3)	102		
第92図 土製品実測図	104		
第93図 土器片錐実測図	105		
第94図 土製品実測図	106		
第95図 住居跡主軸方向	112		
第96図 土坑(粘土貼り・墓壙) 規模	113		
第97図 土坑長径(軸)方向	114		
第98図 掘立柱建物跡・柵列 配置図	117		
第99図 球状・管状土錐の 重量分布	119		
第100図 土器片錐の重量分布	119		

写真図版目次

	貝類
P L 1	遺構確認状況、遺跡全景
P L 2	トレンチ発掘全景(北より), 第1号掘立柱建物跡
P L 3	第2・3号掘立柱建物跡
P L 4	第4・5号掘立柱建物跡
P L 5	第1~3号住居跡
P L 6	第3号住居跡遺物出土状況, 第4・5号住居跡
P L 7	第6~8号住居跡
P L 8	第8号住居跡カマド全景, 第 8号住居跡遺物出土状況, 第 10・11号住居跡
P L 9	第13・15号住居跡, 滑石片包 含層, 第17号住居跡遺物出土 状況
P L 10	第16~18号住居跡
P L 11	第1・13・72, 2~7号土坑
P L 12	第8・9・11~16号土坑
P L 13	第17~24号土坑
P L 14	第25~27・29~32号土坑
P L 15	第35・36, 39・62・63・73, 40・42・44, 45・46号土坑
P L 16	第47~50・52・53・55・56号 土坑
P L 17	第58・60・63, 65・69, 66~68・ 76号土坑
P L 18	第1号溝, 埋甕, 埋甕出土状 況, №1・2・4トレンチ, 調査風景
P L 19	遺跡下の井戸, 塙貝塚中心部貝層
P L 20	出土土器(1)
P L 21	出土土器(2)
P L 22	出土土器(3)
P L 23	土製品(1)
P L 24	土製品(2)
P L 25	土製品(3)
P L 26	土器片錐
P L 27	石器・石製品(1)
P L 28	石器・石製品(2), 古錢

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

当遺跡の東側を南北に走る県道矢幡・潮来線は、大賀地内で急な下り坂と急カーブが続き、見通しも悪く事故が多発し、さらに道路の両側が崖になっているため冬季には雨や雪が降ると路面が凍結し、通行止めになることもしばしばであった。そこで、茨城県では現在の道路の西側にバイパス道を新設し、道路整備を図ることになった。

工事に先立ち、昭和59年、茨城県潮来土木事務所は、潮来町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し、潮来町教育委員会は、工事予定地が周知の遺跡であり、発掘調査を行う必要がある旨を回答した。同年11月25日、茨城県道路建設課、茨城県潮来土木事務所、茨城県教育庁文化課の三者が現地踏査を行い、調査範囲を再度確認するとともに、調査機関についても協議がなされた。調査機関として茨城県教育財團が当たる方向で話し合われ、それを受け、茨城県教育庁文化課と茨城県教育財團調査課は同年12月2日現地踏査を行い、翌年1月から3月までの期間で発掘調査を実施することで一致した。茨城県教育庁文化課は茨城県道路建設課に対し、調査面積、調査範囲、及び調査機関等を回答し、それにより、茨城県教育財團は茨城県（道路建設課）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和61年1月1日から3月31日までの予定で発掘調査を実施することになった。

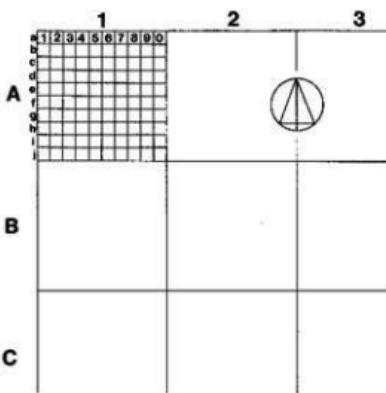
第2節 調査方法

1 調査区設定

発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため、調査区を設定した。通常、調査区設定は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画しているが、今回はこれを使用することができず、遺跡内に設けられていた道路測量用の輪杭を利用して設定した。何本かある杭のうち、遺跡北端にあったNa27（標高39.432m）の杭を基準点とし、磁北北を出し、その基準点を中心に40m方眼の大調査区（大グリッド）を設定した。更に、大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m方眼の小調査区（小グリッド）を設定した。つまり40m四方の大調査区内に、4 m四方の 小調査区を100個設定したわけである。

大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……、西から東へ「1」・「2」・「3」……とし、A1区・B2区と表記した。小調査区も同様に、北から「a」・「b」・「c」……とし、西から「1」・「2」・「3」……と表記した。各調査区の名称は大調査区、小調査区を合わせて「Ala₁」・

「B2b₂」のように表記した。



第1図 調査区呼称方法概念図

2 遺構確認

「壇貝塚」という遺跡名から、貝塚の存在が予想されたため合計7か所のテストピットを設定して掘り込み、貝塚及び遺構の検出を試みた。その結果、貝塚は全く認められず、土器片の出土も少量であった。しかし、住居跡や土坑とみられる落ち込みが確認され、表土の厚さは北側で30cm、南側で80cmであることが判明した。この結果をふまえ、担当者間で協議を行い、調査期間が短いこと、表土が比較的厚いこと、貝塚は認められず遺物も少量であることの3点を考慮し、重機により調査区域全面の表土除去を実施することにした。その後、遺構の確認調査を進め、多くの住居跡や土坑が検出された。

遺跡北側の崖部中段については、現況から中世以降の城館跡に関する武者走りと思われる段状の遺構の存在が予想されたので、4本のトレンチを設定し土層観察を行った。その結果、人為的な段状の構築ではなく崖の一部崩壊による自然地形であることが判明した。なお、トレンチ発掘で検出された遺物は、台地から流れ落ちたとみられるわずかな土器片だけであった。

3 遺構調査

住居跡の調査は、土層観察用ベルトを十文字に設けて掘り込む四分割法で実施し、それぞれの地区名は北東部より時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長軸方向で分割する二分割法で実施し、地区名は、住居跡に準じた。掘立柱建物跡については、柱痕跡及び柱穴掘方が一直線に連続するようなラインを設定し、このラインに沿って二分割する方法を原則とした。しかし、調査の都合上断面図だけの記録で終わったものも含まれている。溝や地下式坑については、適宜土層観察用ベルトを設けた。

土層は、色調・含有物・緒まり具合・粘性等を観察し、分類した。色調の決定にあたっては、「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用した。遺物の取り上げについては、原則として、出土位置・遺物番号・レベル等を図面あるいは台帳に記録した。遺構の観察は、埋土の堆積状況・床・壁・柱穴・カマド等について注意した。

遺構の実測については、平面図は水糸を1m方眼に地張りして計測し、土層・遺構断面図は水糸を最適な高さに水平に設定し、計測した。

遺構番号は、調査した順に番号を付したが、調査中に欠番となったものもあり、必ずしも連続した番号にはなっていない。

第3節 調査経過

埠貝塚の調査は、昭和61年1月1日から3月31日までの3か月間実施した。しかし、調査期間が短かく、貝塚の存在も予想されたため、1月からすぐに調査が開始できるように準備を進めた。以下、発掘調査の概要について記述する。

1月上旬 発掘調査を始めるための諸準備を行う。事務所・倉庫の整理、進入路の整備、テストピットの設定等を実施しながら、発掘調査の円滑な推進と安全を願い、1月9日、関係者列席のもと銀入式を挙行した。

1月中旬 まず、遺跡北側の崖部の調査を先行し、4本のトレンチを設定し掘り込みを実施した。その結果、崖部には遺構のないことが判明した。一方、平坦部においては重機を導入して表土除去を行った。

1月下旬 重機による表土除去を進めながら、遺跡南側より遺構確認作業に入り、24日には表土除去が終了したため、同日より遺構調査を開始した。遺構の分布状況をみると、遺跡中央部に住居跡が集中しており、南側には方形の土坑群が多数検出された。この土坑の調査を先行し、末日までに約30基の調査を終了した。

2月上旬 前月に引き続き土坑の調査を行い、約70基ある土坑の大部分が終了した。同時に住居跡の調査を開始した。しかし、遺構確認面が住居跡の床面になっていることが多く、プランがつかめず、かつ重複がはげしいため、調査は難航した。

2月中旬 寒さで土壤が凍結し、作業を断念しなければならない日もでてきた。住居跡の調査は、難航しながらも第8号住居跡まで進展したが連日の寒さで土層観察用ベルトも凍結し、十分な観察をするためには昼頃まで待たなければならず、調査計画もやや遅れがちであった。

2月下旬 各住居跡の調査を中心に作業が進められ、さらに、新たに検出された土坑、及び地下式坑の調査にも着手した。遺構確認の段階で、掘立柱建物跡が2棟検出されていたが、その周辺を再確認すると、多数の掘方が検出され、急に慌ただしくなった。追い討ちをかけるように、27～28日朝にかけて雪が降り、潮来地方としては珍しく20cmの積雪となつた。

3月上旬 住居跡の調査を継続しながら、掘立柱建物跡の調査を開始した。この時点では住居跡は18軒であったが、そのうちの2軒は住居跡ではないことが判明し、最終的に16軒となつた。掘立柱建物跡は、第5号まで調査が進んだ。

3月中旬 各遺構の調査もかなり進み、調査終了後の遺跡の航空写真を撮影するため、10日頃より遺構内外の清掃を始めた。13日の午後航空写真撮影を行い、14日からは、調査終了に

伴う出土遺物や調査器材等の搬出準備を開始した。この間、15日には現地説明会を行い調査成果を発表したが、前日からの雨が残り見学者は少数であった。現地での作業も終了し、20日に現場事務所を閉鎖した。

3月下旬 24日から戻務処理を行うかたわら、調査資料のとりまとめを行った。26日にはすべての作業が終了し、この日をもって埴貝塚における一切の現地調査を完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

塙貝塚は、行方郡潮来町大字大賀557番地ほかに所在し、国鉄鹿島線潮来駅の北方約7kmの地点に位置している。遺跡の所在する潮来町は、茨城県の南東部に位置し、東に北浦、南に常陸利根川・浪速川があり、西方には牛堀町を間において霞ヶ浦がひかえており、昔から水郷地帯として知られている。町村合併以前は、旧潮来町、津知村、延方村、大生原村の1町3村に分かれていたが、昭和30年2月、町村合併により現在の潮来町が成立した。町の総面積は約49.5km²で、東西約8km、南北約12kmのやや南北に長い南に向かって末広がりの町域である。人口は、昭和60年度現在23,468人である。

当町は町村合併以後「水郷潮来」として、主に観光面で発展してきた町である。しかし昭和30年代後半から、鹿島臨海工業地帯の開発が進むにつれ、鹿島町への通勤者の増加、それに伴い住宅団地の造成や道路の整備、そして国鉄鹿島線の開通、さらには工場の誘致等がなされ、工業化への進展がはかられている。

潮来町の地形をみると、北部の台地と南部の低地（水田面）にほぼ分かれている。台地は北浦村や麻生町方面から伸びてくる行方台地で、潮来町はその最南端に位置している。台地の標高は35m前後で、北浦側や南東部の水田面から谷津が樹枝状に入り込んでいる。南部に広がる水田は昔からのものではなく、昭和34年から始まった干拓事業によって耕地化されたもので、それまでは湖や湿地帯であった土地である。この事業によって町の面積の3分の1近くを占める広大な干拓地が完成したのである。市街地は台地と低地の接点部に集中して形成されている。この市街地をかすめて東西に走るのが国道51号線である。国道51号線から干拓地を抜け、神栖町方面に水郷有料道路がのびている。また、北浦の湖岸に沿って県道大賀・延方線が走っている。さらに旧市街地から台地上を北に走り北浦湖岸に抜ける県道が矢橋・潮来線である。

塙貝塚は、県道矢橋・潮来線が北浦に向けて下り始める左側の台地上に位置している。この台地は標高39mで、北端部に立つと北浦を一望のもとに見渡すことができ、対岸には麻生町宇崎地区が半島状につき出しているのが遠望できる。北浦湖岸から遺跡までは0.8kmほどで、昔は遺跡下の谷津まで湖水がのびていたものと思われる。この谷津は北浦から入り込んでいるもので遺跡の位置する台地は舌状に張り出している。遺跡は平坦な台地に広範囲に広がっているものと思われるが、今回の調査範囲はその周辺部にあたり、南側の台地から北側の崖部にかけての幅25m、長さ80mの部分である。調査面積は2,659m²で、現況は畠及び山林である。

第2節 歴史的環境

潮来町には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く所在している。当町周辺は北浦をはじめ、常陸利根川、浪速浦など水の利に恵まれ、古代から、舟を利用した水上交通の要所となってきた。ここでは、主な遺跡について時代を追って述べることにする。

当町には先土器時代の遺跡は現在までのところ確認されていない。縄文時代になると、貝塚が県内各地に形成されるようになり、当町でもこの時期の貝塚が數か所確認されている。しかし、各貝塚とも発掘調査はほとんどなされておらず、以後述べる各時代の遺跡も正式な調査はなされていない。唯一調査が実施された貝塚として、狭間貝塚（5）がある。この貝塚は西村正衛により、昭和43年6月に調査され出土土器から縄文時代早期の遺跡であることが判明した。検出された貝類は、ハマグリとマガキが主で、他に各種の魚骨やイノシシ・シカ等の骨も検出された。中期の遺跡としては、今回調査した横山貝塚（28）がある。しかし、今回の調査地域は貝塚の中心地ではなかったため、貝層等は検出されなかった。壇貝塚の中心地は今回の調査地域から西へ約40mの地点で、台地から谷津に向かう斜面部に東西10m、南北20mの範囲で貝の堆積がみられる。貝層の厚さは20~50cmぐらいである。貝種としては、大形のハマグリやシオフキ、アカニシ等が観察される。後期の遺跡としては、横山貝塚（17）があり、主に加曾利B式の土器片が出土している。この貝塚は地点貝塚であり、昭和49年3月に一部を発掘したという記録がある。それによると、動物の骨、貝製腕輪、カマドなどが検出されたようである。

弥生時代の遺跡は、現在のところ確認されていないが、今回調査した壇貝塚から弥生時代後期の壺が出土しており、今後周辺地域で確認される可能性が強い。

古墳時代になると、関東でも屈指の古墳群といわれる大生原古墳群（22）を始めとして、数多くの古墳が築造されている。大生原古墳群のある一帯は、建借間命の一族である多氏が定住していたと言われる地で、120基以上の大小の古墳が残されている。この中の孫舞塚古墳は数度にわたって調査され、造り出し部に箱式石棺が検出されている。大生東部古墳群（21）は、総数60基の古墳からなっており、その中で前方後円墳は2基といわれている。他に、福荷山古墳群（1）、原古墳群（12）、中台古墳群（16）等が知られている。この時期の集落跡の調査例はないが、各古墳群の周辺には土器器の散布地が認められており、付近に集落のあったことが推定できる。

7世紀中頃になると、当時の行方郡内に2か所の駅が置かれていたといわれている。曾尼駅（玉造町）と板來駅である。これらの駅は、国府（石岡市）から鹿島神宮に至る間の途中駅であり、中でも板來駅からは舟を利用して対岸の鹿島神宮に渡っていったらしく、水・陸両交通の要所であったことがうかがわれる。

奈良・平安時代以降になると遺跡も少なくなり、中世の城館跡が主になってくる。大殿様屋敷



第2図 堀貝塚周辺遺跡分布図

跡(24), 風凰城跡(27)などがある。

近世になると、潮来は港町として重要な位置を占めるようになった。これは、水戸藩をはじめ仙台など奥州諸藩と江戸を結ぶ物資の中継地となつたためである。このように潮来の地は、古代から水を媒介として発展してきており、その長い歴史が現在の「水郷潮来」の背景を形作っているのである。

表1 潮来町遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	時代				図中番号	遺跡名	時代			
		縄文	弥生	古墳	秦・平洋			縄文	弥生	古墳	秦・平洋
1	福荷山古墳群		○			17	横山貝塚	○			
2	潮来陣屋			○		18	水原古墳群			○	
3	立金古墳群		○			19	山ノ森古墳群			○	
4	新立古墳		○			20	蓋谷古墳群			○	
5	狭間貝塚	○				21	大生東部古墳群			○	
6	塔之上貝塚	○				22	大生原古墳群			○	
7	こんにゃく塚古墳		○			23	新城跡			○	
8	後明古墳		○			24	大殿様巣敷跡			○	
9	中辻古墳		○			25	松輪道路			○	
10	天皇原古墳		○			26	屋敷遺跡			○	
11	小泉古墳		○			27	風凰城跡			○	
12	原古墳群		○			28	塙貝塚	当遺跡			
13	貝塚古墳群		○			29	津山古墳群			○	
14	塙古墳群		○			30	鏡間塙古墳			○	
15	貝塚A・B貝塚	○				31	中郷貝塚	○			
16	中台古墳群		○			32	井戸跡				

注

- (1) 「茨城県史料」 考古資料編 先土器・縄文時代 茨城県 1979年
- (2) 「茨城県史料」 考古資料編 古墳時代 茨城県 1974年
- (3) 「県内貝塚における動物遺存体の研究」 学術調査報告3 茨城県歴史館 1981年
- (4) 「ふるさと潮来」 第5号 潮来町郷土史研究会 1980年

参考文献

「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1977年

「石器時代における利根川下流域の研究」 -貝塚を中心として- 西村正衛 1984年

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

当遺跡は、縄文時代の貝塚として周知されている遺跡であったが、調査の結果、貝塚の中心部からはなれた周辺部であったことが判明した。したがって、縄文時代の遺物は多く出土しているものの、遺構としては土坑が5基検出できたにとどまり、検出された遺構のほとんどは、古墳時代以降のものであった。その内訳は次のとおりである。

住居跡	16軒
弥生時代	1軒
古墳時代中期	3軒
古墳時代後期	5軒
奈良時代	5軒
時期不明	2軒 (明確にできないため時期不明としたが、構造等からは古墳時代後期の住居跡と推定することが可能である。)
掘立柱建物跡	8棟 (時期は不明であるが、平安時代～鎌倉時代と推定される。)
土坑	65基
縄文時代	5基
粘土貼り	10基
地下式坑	2基
その他	48基 (内、掘立柱建物跡の掘方と推定されるものが5基含まれる。)
埋甕	1基
樋列	4条 (時期は、掘立柱建物跡と同時期と思われる。)
溝	1条

これらの遺構は、遺跡の全面に分布しているが、ある程度の規則性が認められる。住居跡はエリア中央部に集中し、粘土貼りの土坑はエリア南東部の比較的低い地域に密集している。掘立柱建物跡は、エリア北側に多く検出されている。

出土遺物は、遺物収納箱に35箱分である。内容は、縄文式土器片と土師器片が大部分で、他に縄文時代の石器、古墳時代の石製品等も出土している。

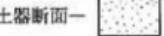
2 遺構・遺物の記載方法

本書では、遺構・遺物の記載に際して、次のような方法をとった。

(1) 使用記号

遺構 住居跡……SI 土坑……SK 振立柱建物跡……SB 满……SD
柵列……SA 埋甕……M ピット……P

(2) 遺構・遺物の実測図中の表示

炉・カマドー  柱痕跡  粘土  繊維土器断面 

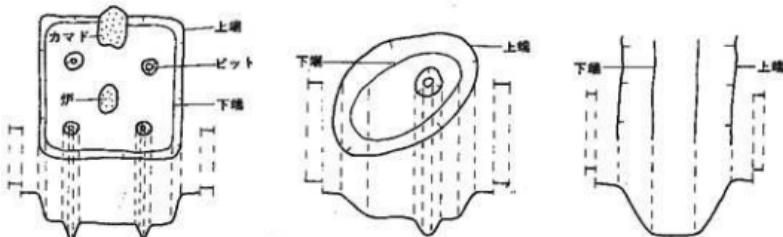
(3) 土層分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調について
は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社)を使用し、次のように分類・番号化した。なお、土層中の含有物については煩雑化を避けるため、本文中で説明した。

番号	土色名	色相	明度/彩度
1	黄褐色	2.5Y	5/3
	にぶい黄褐色	10YR	4/3 5/4 5/6
	明黄褐色	10YR	6/6
2	褐 色	7.5YR	4/3 4/4 4/6 5/4
	にぶい褐色	10YR	4/4 4/6
3	暗褐色	7.5YR	2/3 3/3 3/4
	極暗褐色	10Y	3/3 3/4
4	黒褐色	7.5YR	2/2 3/2
		10YR	2/2 2/3 3/2
5	暗赤褐色	2.5YR	2/2 3/6
	極暗赤褐色	5 YR	2/3 2/4 3/3 3/4 3/6
6	赤褐色	2.5YR	4/8
	にぶい赤褐色	5 YR	4/3 4/4 4/6
7	暗赤色	7.5R	3/4
8	灰色	7.5YR	4/2
9	オリーブ褐色	2.5Y	3/3 4/3
	暗オリーブ褐色		
10	明褐色	7.5YR	5/6

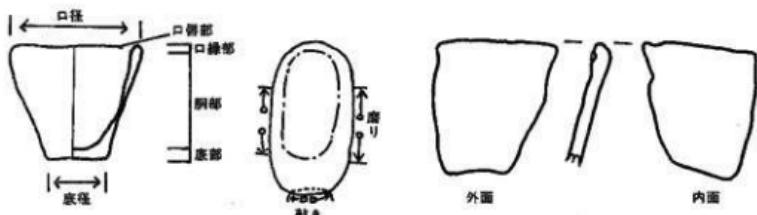
(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各遺構は、原則として縮尺20分の1の原図を、カマドは10分の1の原図をそれぞれトレースして版組し、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- 「掘立柱建物跡」の一部、及び柵列については、縮尺100分の1の原図をトレースし、掲載した。
- 水系のレベルは、同一レベルの場合に限り一か所の記載で表し、それ以外は個々に記載した。単位はmである。



(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 土器の実測図は、中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、右側に断面を図示した。表裏両面を掲載した場合は、断面を中央に配し、外側を左側、内側を右側とした。
- 遺物は、原則として3分の1に縮小して掲載した。しかし、遺物の大きさ等により、それ以外の縮尺を使用した場合もある。



(6) 表の見方について

住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		壁面	床面	覆土	備考(出土遺物)
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)				

- 位置は、グリッド名で表示し、2か所以上のグリッドにまたがる場合は、遺構の占める割合の大きいグリッド名を表示した。

- 主軸方向は、磁北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。
- 平面形は、掘り込み上端面の形状を記した。
- 壁面は、床面からの立ち上がり角度が81°~90°を垂直、80°以下を外傾とした。
- 覆土は、自然堆積をN、人為的堆積をAと表示した。
- 推定値には、()を付した。以下、土坑等の一覧表でも同様である。
- 備考には、住居跡の切り合い関係と出土した土器片の数を記した。

[土坑一覧表]

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	規 模	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
:	:	:	:	長径×短径(m) 深さ(cm)	:	:	:	:

- 長径方向は、住居跡の主軸方向に準じた。
- 平面形の、円形・楕円形の分類については、基本的に長径と短径の差が長径の10%以下を円形、10%以上を楕円形とし、最終的には執筆者が形状を判断した。
- 深さは、造構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値を表示した。
- 壁面は、住居跡の壁面に準じた。
- 底面は、平坦・凹凸・皿状の3種に分類した。
- 覆土は、自然堆積をN、人為的堆積をAと表示した。
- 地下式坑は、番号と位置だけを一覧表に表示し、その他は文章で記述した。
- 備考は、特記事項及び出土遺物の点数を記した。

[掘立柱建物跡-一覧表]

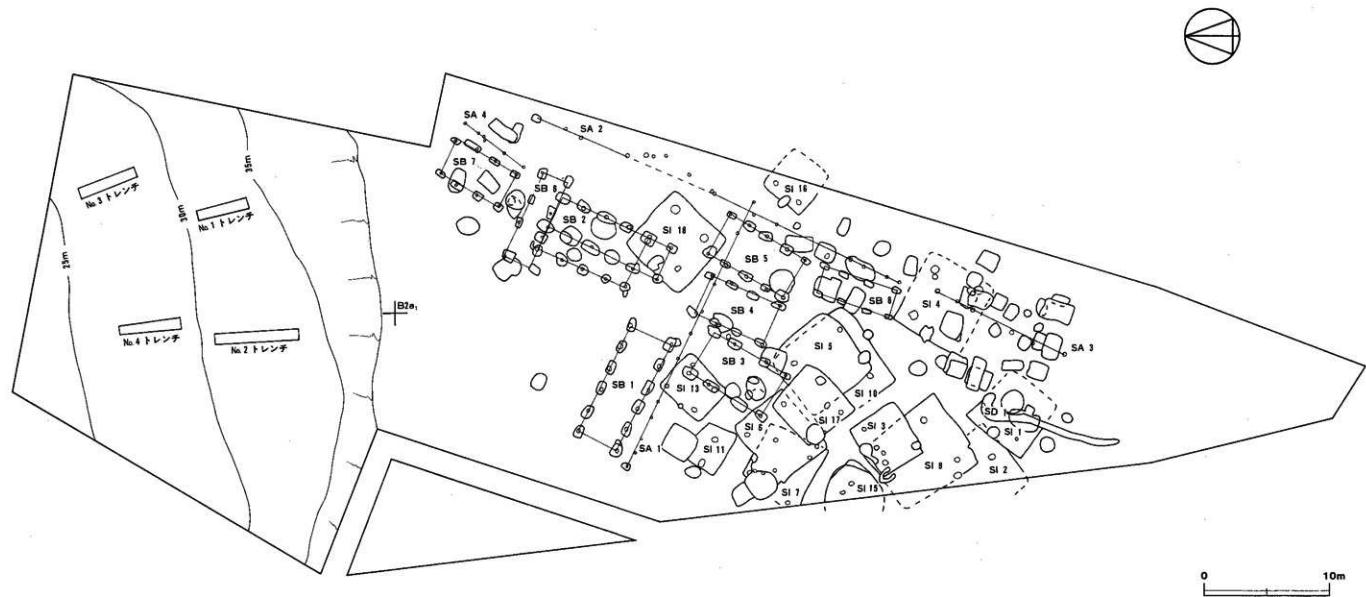
番号	桁×梁(間)	桁行長×妻通長(m)	長方形度	床面積(m ²)	主軸方向	備 考
:	:	:	:	:	:	:

- 桁×梁は、掘方と掘方の間を1間と数え表示した。
- 桁行長×妻通長は、桁行側及び妻通側の柱痕跡の間を計測し、mで表示した。
- 長方形度は、桁行長÷妻通長の数値で、大きくなるほど、細長い長方形になることを示す。
- 床面積は、妻通長と桁行長をそれぞれ長方形の縦・横として計算し、小数点第2位までを表示した。
- 主軸方向は、桁行方向を主軸と考え、磁北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかで表示した。
- 備考は、特記事項を記した。

[出土土器観察表]

図中番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
		A B C				

- 番号は、図版中の番号である。
- 法量は、A一口径、B一器高、C一底径とし、単位はcmである。なお、復元した遺物については推定値を記載し、() を付した。
- 色調については、土層分類時に使用した土色帳を使用した。焼成については、硬く焼き締まっているものは良好、焼きがあまく器面がざらざらで剥落しやすいものは不良とし、その中間のものは普通とした。
- 備考は、残存率と実測番号を記した。



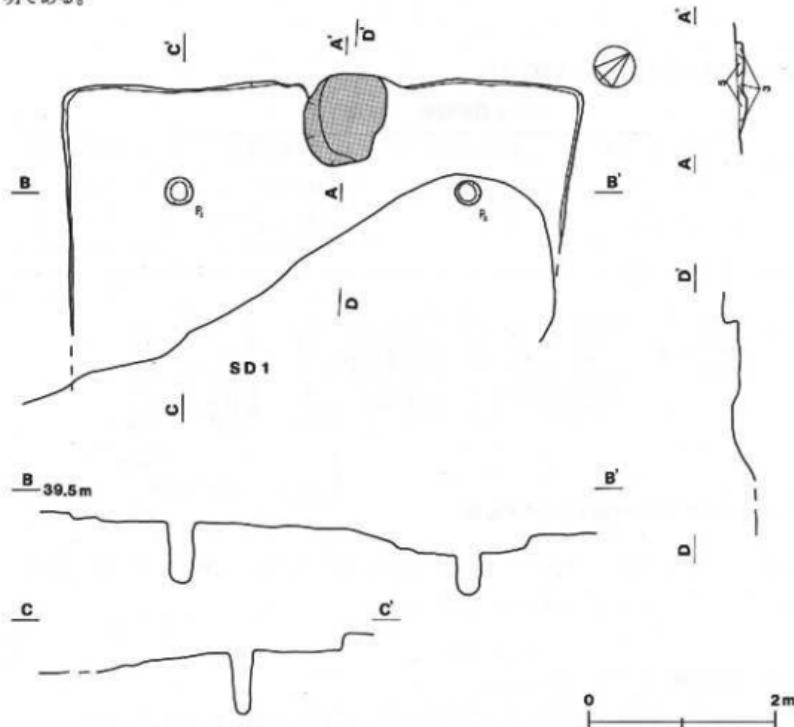
第3図 塚貝塚遺構配置図

第2節 壺穴住居跡

当遺跡で検出された住居跡の床はローム上面と同レベルのものが多く、表土を除去すると壁も消失してしまう状況であった。また、多くの遺構が重複しており、形状や規模を明確にすることが困難であった。

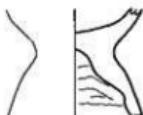
第1号住居跡（第4図 PL 5）

本跡はC1b₃区を中心に確認された住居跡で、北西で第2号住居跡、床中央部で第1号溝、第7・9号土坑とそれぞれ重複している。溝及び2基の土坑は、本跡の床を切って掘り込まれ、第2号住居跡については、本跡のカマドが第2号住居跡を切って構築されている。なお、本跡の中央から南東部にかけては、表土除去の段階で消失しているため、平面形・規模等の詳細については不明である。



第4図 第1号住居跡実測図

調査した部分から判断すると、平面形は方形を呈し、主軸方向はN-49°-Wと推定される。一辺の長さは、北西壁側で5.59mである。壁はロームと黒褐色土で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残存部で18cmである。床はロームであるが、南東側2分の1位は消失している。カマド前面から北西コーナー部にかけての床は、硬く踏み固められている。ピットはP₁・P₂の2か所検出され径25, 30cm, 深さ66, 67cmで、ともに主柱穴と考えられる。壁溝は検出されない。カマドの残存状況は悪く、火床の掘り込みだけが確認された。この掘り込みは、長径109cm, 短径82cmの梢円形を呈し、深さは10cmである。内部には、焼土粒子及び炭化粒子を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。



覆土は自然堆積と思われるが、明確ではない。

遺物は、181点出土している。大部分は繩文式土器片で、わずかに土師器片が混入し、ほとんど覆土中から出土している。



第5図 第1号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第5図）

団中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	高 壕 土師器	B (5.5)	壺部の底部から脚部の上部にかけての部分である。	壺部内面はヘラミガキ整形。脚部内面には輪積痕が残る。	にぶい赤褐色 スコリア・雲母 普通	10% P 1 Pl.21



第6図 第1号住居跡出土土器拓影図

第6図の1は口縁部で連続刺突文が横位に施されている。2・3は懸垂文が施され、地文は繩文である。4は縱位の平行沈線文だけが施されている。

第2号住居跡（第7図 PL 5）

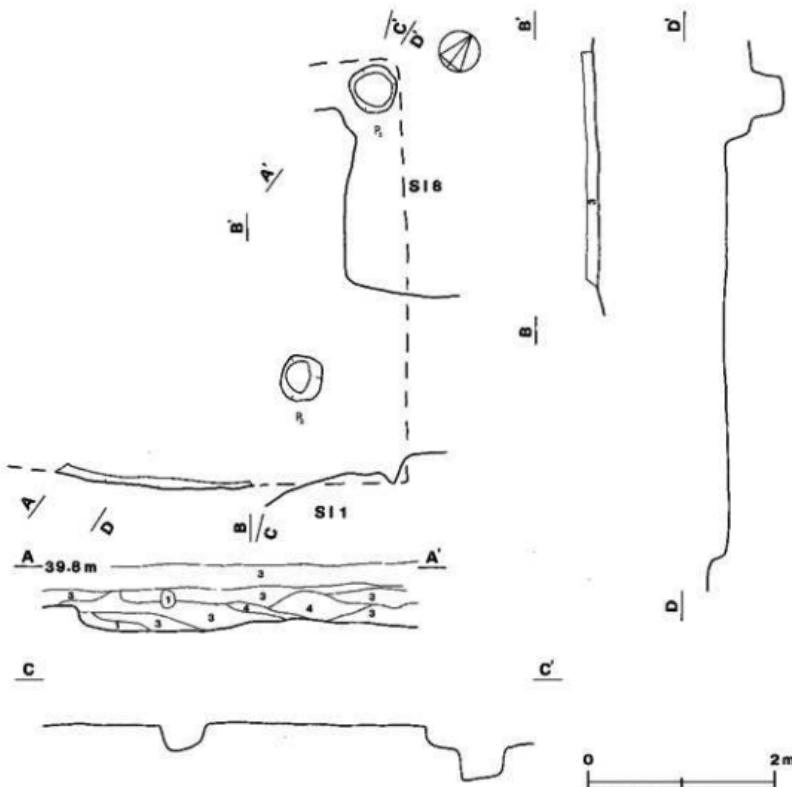
本跡はC1b区を中心に確認された住居跡で、南東で第1号住居跡、北で第8号住居跡とそれぞれ重複している。さらに、西側は調査エリア外であるため、平面形・規模等は明確でない。第1・

8号住居跡はそれぞれ本跡の床を切って掘り込まれている。

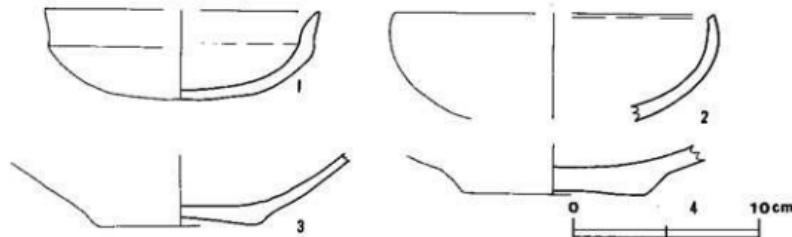
調査された部分から推定すると、平面形は方形を呈するものと思われる。壁は、南壁の一部だけ検出され、約70°の角度で立ち上がり、壁高は20cmである。床はロームで、全体的に軟弱であるが、P₂の周辺は硬く締まっている。ピットは2か所検出され、P₁は径50cm・深さ69cm、P₂は径47cm・深さ33cmである。2か所とも主柱穴と思われる。壁溝やカマド等は検出されない。

覆土は自然堆積で、3～4層に分けられる。上層には炭化粒子を多量に含む暗褐色土が堆積し、中～下層にはロームブロックを多量に含む暗褐色土・黄褐色土が堆積している。

遺物は、縄文式土器片・土師器片等合わせて580点出土している。他に白玉が2点・石鐵が1点それぞれ床面から出土している。



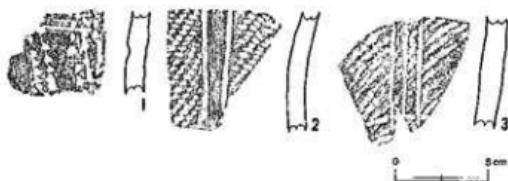
第7図 第2号住居跡実測図



第8図 第2号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第8図） ※土器の口縁部は内面、外面ともヨコナデであり、説明は「口縁部ヨコナデ」と表記した。

図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	壺 土師器	A (14.9) B 4.8	体部は内湾ぎみに立ち上がり、大きく開く。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、体部との境には明瞭な稜をもつ。底部は曲率の大きい丸底である。	口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ。	にぶい橙色 砂粒・雲母・スコリア 普通	40% P 4
2	壺 土師器	A (17.2) B (5.2)	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部も内湾する。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ。内面は荒れてザラザラしている。	橙色 砂粒 普通	25% P 5
3	(甕) 土師器	B (3.8) C 8.8	わずかな上げ底を呈する底部。	内外面ともヘラケズリ。底面はヨコ方向のヘラケズリ。	にぶい橙色 砂粒・雲母 普通	5% P 2
4	(甕) 土師器	B (2.0) C 10.0	平底の底部。	内外面及び底面ともヘラケズリ。	にぶい橙色 スコリア・雲母 普通	5% P 3



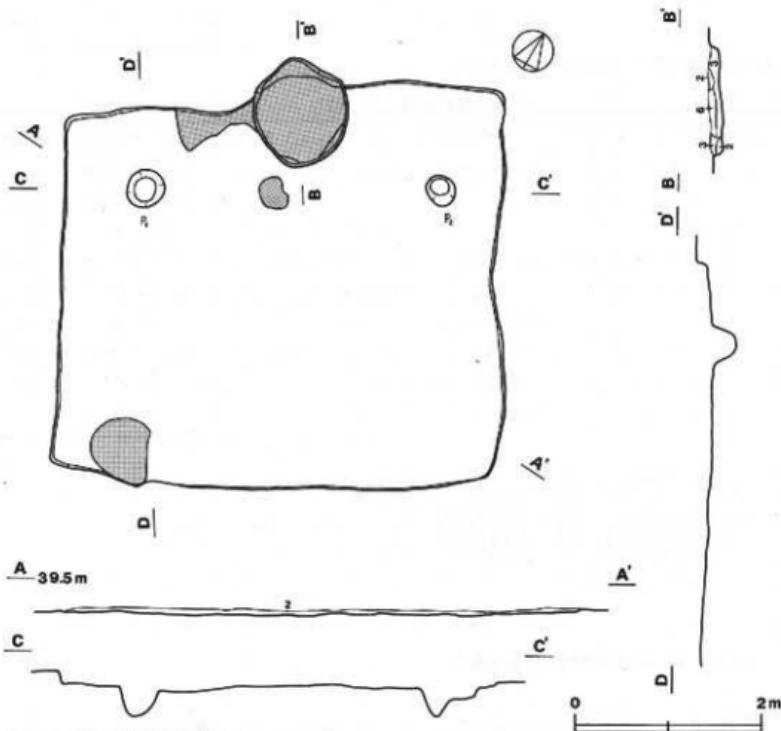
第9図 第2号住居跡出土土器拓影図

第9図の1は三角形の連続刺突文が継位に施されている。2・3は懸垂文が施され、2は内側を磨消している。

第3号住居跡（第10図 PL 5）

本跡はB1j_a区を中心に確認された住居跡で、第8号住居跡と重複しており、北西に隣接して第9・15号住居跡が存在している。第8号住居跡との新旧関係については、本跡のプランが明確に検出できたことから、本跡の方が新しいと思われる。

平面形は方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wである。規模は、長軸4.75m・短軸4.33mで、主軸方向が短い。壁はロームで、外傾して立ち上がり、壁高は0~5cmである。床は、北東側2分の1ぐらは硬く締まった面が残っていたが、南西側の床と思われる面は確認できず、ロームブロック及び焼土粒子が混入した黒褐色土を呈していた。ピットは2か所検出されている。P₁は、径40cm、深さ47cmであるが、壁面は軟らかく、明確なピットではない。P₂は、径35cm・深さ41cmで、ピット内の覆土をみると、床から5cm下部に焼土の層が検出された。この焼土は本跡に伴うものではなく、重複している第8号住居跡の覆土と考えられる。カマドは、北壁中央部に構築さ

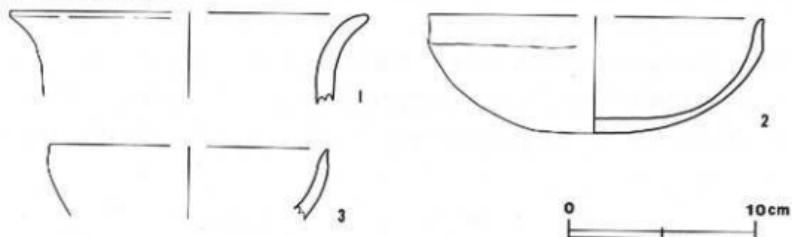


第10図 第3号住居跡実測図

れていたが、火床の掘り込みが認められただけで、大部分は消失している。掘り込みは、長径115cm・短径99cmの梢円形で、床を13cm掘り下げるにあり、焼土粒子を多く含むにぶい赤褐色土が堆積している。また、カマド前面と南コーナー部の床に、焼土の堆積が認められたが、重複しているため、本跡に伴うものかどうかは明確でない。

覆土は自然堆積で、ローム粒子・焼土粒子を含む褐色土が堆積している。

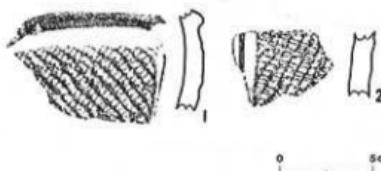
遺物は土師器片を主に384点出土している。床が明確でないこともあるが、遺物の大半は覆土中からの出土である。



第11図 第3号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第11図）

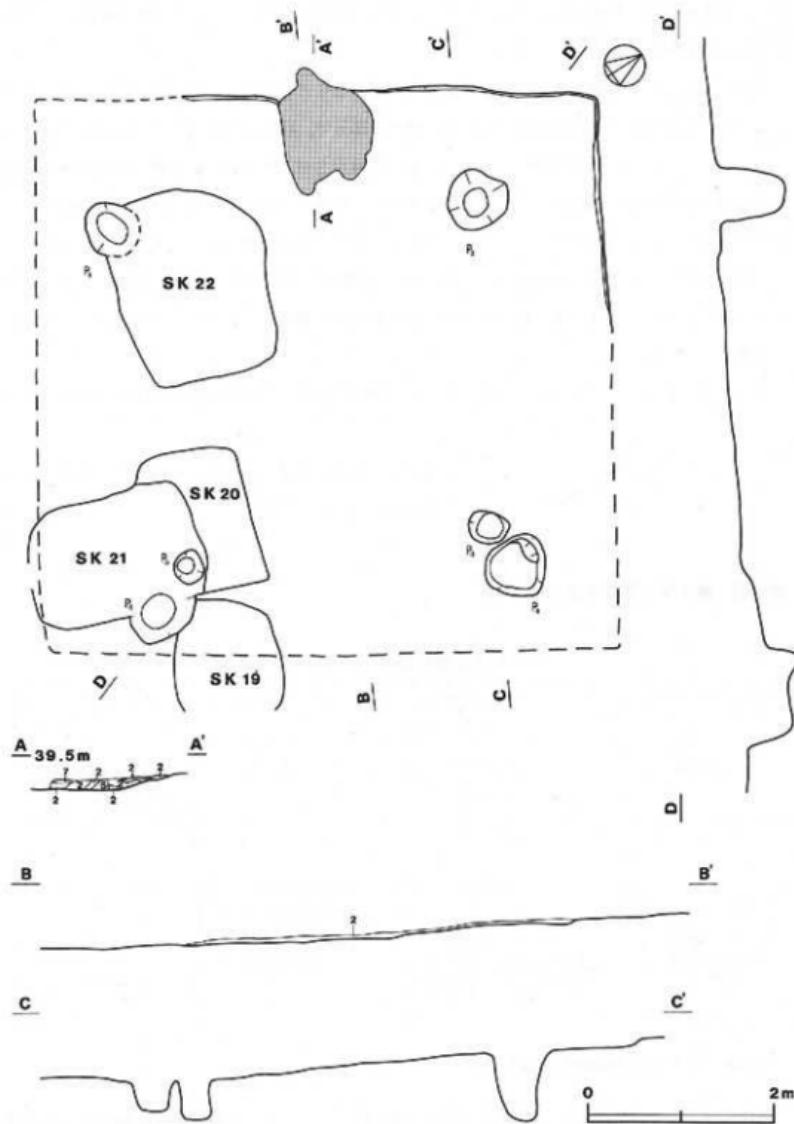
図面番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	甕 土師器	A(19.4)	外反して立ち上がる口縁部片で ある。	内外面ともヨコナ ヂ。器面はザラザラ している。	にぶい橙色 砂粒・留母	3% P 8
		B(4.6)				
2	壺 土師器	A(18.0)	体部は内湾しながら立ち上 がり、口縁部との境に稜をもつ。 口縁部は外反ぎみに直立する。	口縁部ヨコナヂ、内 面ヘラミガキ、外 面ヘラケズリ。	にぶい橙色 砂粒	60% P 6
		B(6.3)				
3	壺 土師器	A(15.0)	内湾ぎみに立ち上がる口縁部か ら体部にかけての破片である。 口唇部は尖っている。	口縁部ヨコナヂ、他 はヘラケズリ。	にぶい橙色 砂粒	PL21 P 7
		B(3.9)				



第12図 第3号住居跡出土土器拓影図

第12図の1・2とも太い沈線が横位あるいは縦位に施され、地文は繩文である。

第4号住居跡（第13図 PL. 6）



第13図 第4号住居跡実測図

本跡はC2a₁区を中心に確認された住居跡であり、第19・20・21・22・69号土坑と重複している。また、遺構確認面が本跡の床面であったこともあり、南東側2分の1の床及び壁は消失しており、平面形・規模等の詳細は不明である。

調査した部分から推定すると、平面形は方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-57°-Wである。壁は北西側の一部だけが残っており、壁高は10cmで、約60°の角度で立ち上がっている。床はロームで、それほど硬くはない。ピットは6か所検出され、P₁・P₂・P₄・P₆は、径・深さがそれぞれ60~65cm・40~80cmで、その配置と規模から主柱穴と思われる。P₃・P₅は径が30cm内外と細くなることから、補助的なピットと推定される。カマドは北壁中央部に構築されていたが、カマド本体は残っておらず、火床の掘り込みと壁外に30cmほど張り出した煙道が認められただけである。掘り込み内部には、焼土粒子を多量に含む褐色土が堆積していたが、火床のロームはそれほど焼けてはいない。

覆土はほとんど残っていないかったが、わずかに焼土粒子及び砂粒を少量含む暗褐色土が認められた。



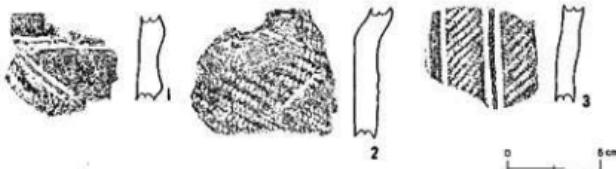
遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて86点で、全て床面からの出土である。



第14図 第4号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第14図）

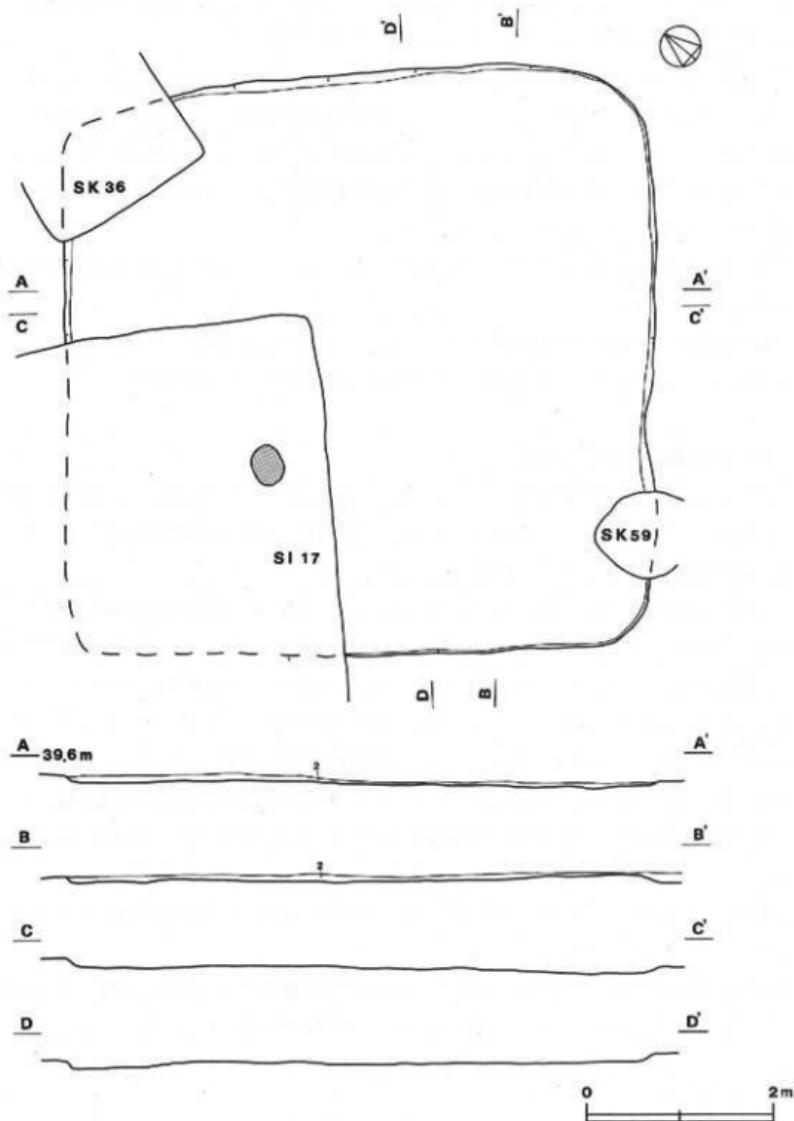
図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	壺蓋 須恵器	A(13.0) B(2.0)	天井はゆるやかに内湾しながら 口縁部に下がる。口縁部内側に 低いかえりをもつ。	天井部は回転ヘラケ ズリ、他はヨコナデ。	灰白色 砂粒 普通	3% P 9



第15図 第4号住居跡出土土器拓影図

第15図の1は平行沈線によって幾何学的な文様を構成している。2は屈曲する脣部片で、縄文だけが施されている。3は平行沈線を縦位に施し、内部は磨消している。地文は縄文である。

第5号住居跡 (第16図 PL. 6)



第16図 第5号住居跡実測図

本跡は B1i₉区を中心に確認された住居跡で、第10・17号住居跡、第36・59号土坑と重複している。新旧関係をみると、第10号住居跡の床は本跡によって切られており、第17号住居跡は本跡の床を切って掘り込まれている。2基の土坑は、すべて本跡より新しい。

平面形は方形で、主軸方向は N-34°-W である。規模は、長軸6.35m・短軸6.24m とほぼ同一である。壁はロームで、外傾して立ち上がるが、明確に検出できたのは、西壁の一部、北壁の一部、及び南壁である。床は住居跡中央部は硬く踏み固められているが、周辺部は軟弱である。ピットは検出されていない。炉はやや北西に寄った位置に検出され、長径44cm・短径37cm の椭円形に床を掘り込んだ地床炉である。

覆土は、1～5cm の厚さでわずかに残っており、ロームブロックと焼土粒子を中心含む褐色土である。

遺物は、縄文式土器片及び土師器片合わせて340点と土器片錐2点が出土している。遺物の大部分は床面から出土しているが、重複が激しいため本跡に伴う遺物かどうかは明確でない。

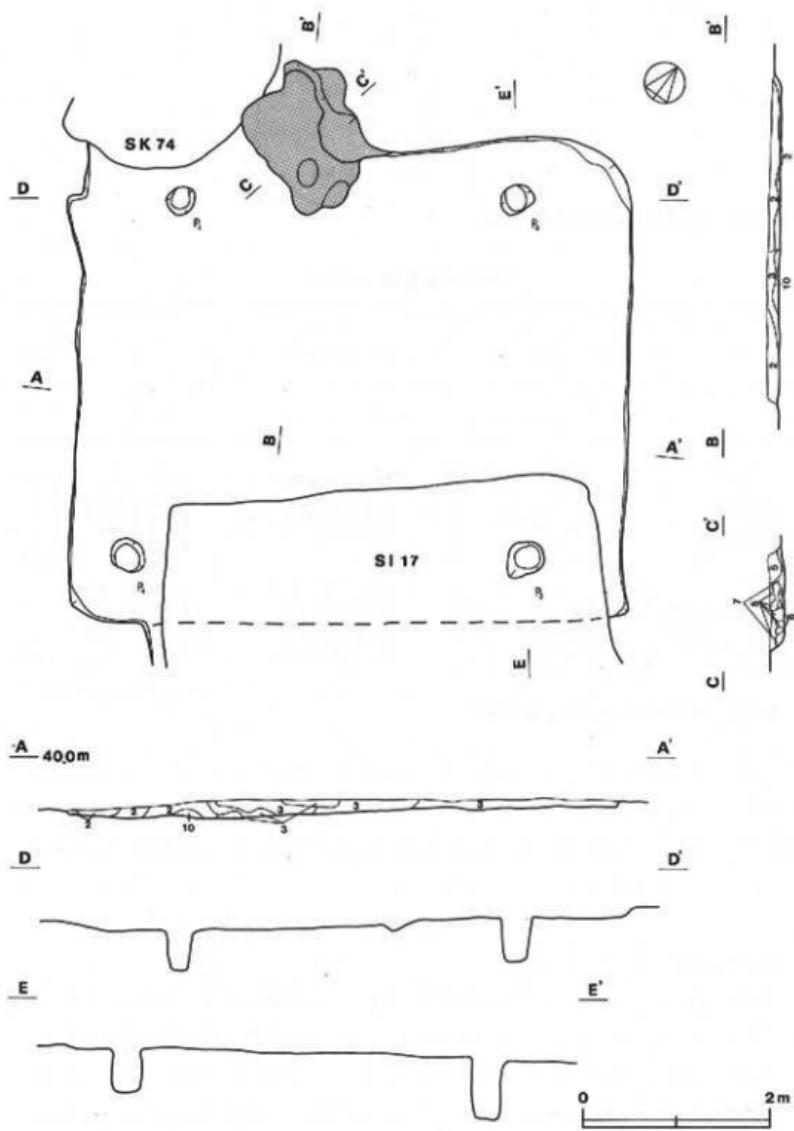
第6号住居跡（第17図 PL 7）

本跡は B1h₉区を中心に確認された住居跡である。本跡の西側2分の1に第7号住居跡が重複し、南壁は第17号住居跡によって切られ、さらにカマド西側の北壁は第74号土坑と切り合っている。出土遺物からみると、土坑の方が古いことがわかる。

平面形は長方形を呈し、主軸方向は N-36°-W である。規模は、長軸5.94m・短軸5.15m で、主軸方向が短い。壁はロームで、外傾して立ち上がるものと思われるが、浅いため断定はできない。壁高は残存部で 5～10cm である。床はロームで、平坦であり、特に硬い部分はみられない。ピットは4か所で、それぞれ各コーナーに寄った位置に検出されている。P₁～P₄とも、径30～40cm・深さ45～65cm で、主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に構築されているが、袖等は残存せず、火床と煙道の掘り込みが確認できただけである。煙道は、壁から約100cm外に張り出すように掘り込まれているが、火床は床を 6cm 程掘り下げたにすぎず、煙道・火床ともあまり焼けていない。

覆土は、ほぼ2層に分けられ、自然堆積である。上層は焼土粒子を含む暗褐色土、下層はロームブロックを含む褐色土である。

遺物は、縄文式土器片と土師器片が合わせて664点、土器片錐2点が床面あるいは覆土中から出土しているが、覆土が浅いためどちらから出土したか明確に区別することはできなかった。



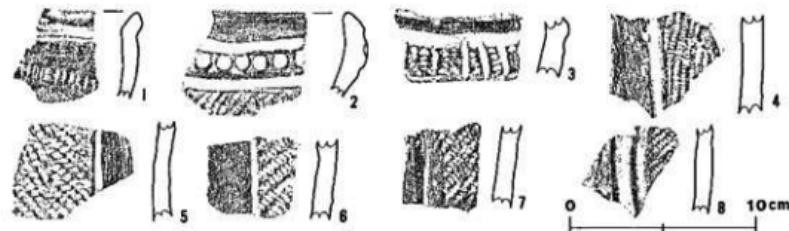
第17図 第6号住居跡実測図



第18図 第6号住居跡出土土器実測図

出土土器觀察表（第18図）

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	甕 上部器	A (21.2) B (9.3)	口縁部は強く外反し、胴部との境に稜をもつ。胴部は内湾込みに底部に続くものと思われる。	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	赤色 砂粒 普通	5% P10



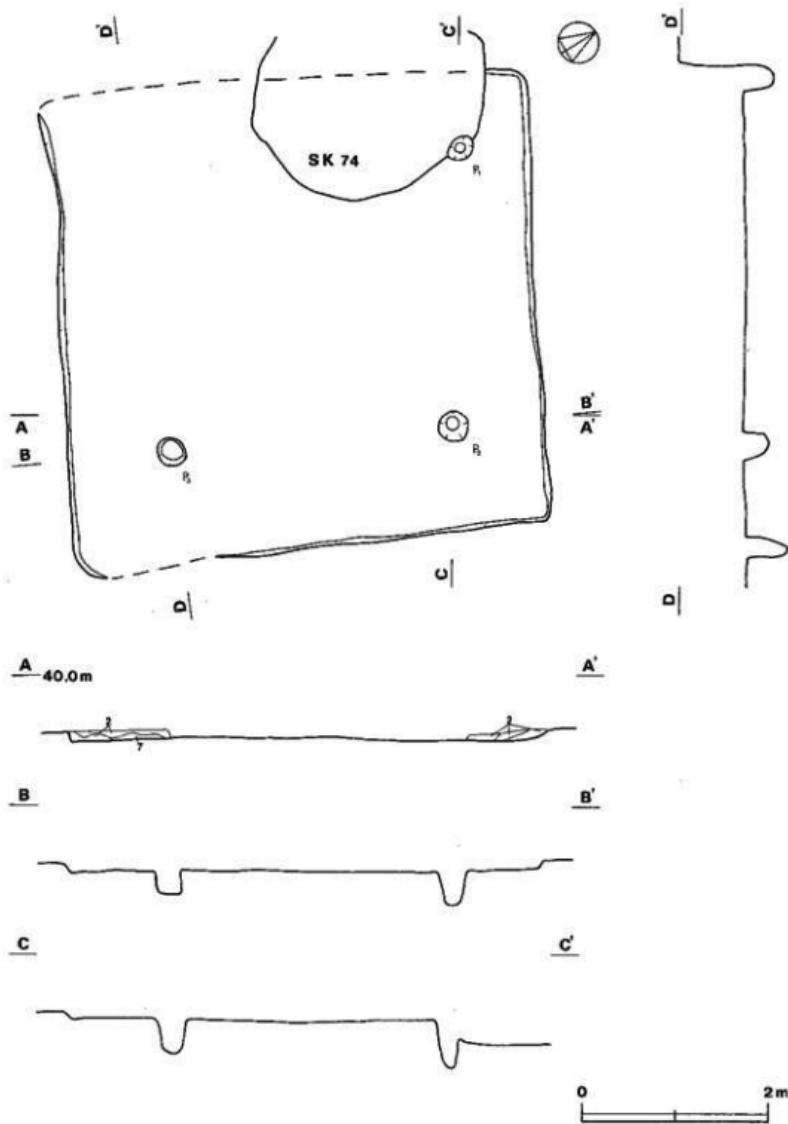
第19図 第6号住居跡出土土器拓影図

第19図の1は屈曲する口縁部で、横位の平行沈線文・爪形刺突文が施されている。2は2本の沈線を横位に施し、沈線間に連続した円形刺突文を充填している。3は横位の太い沈線を施した後、3本の短沈線を縦位に施文した土器片で、地文は繩文である。4～8は懸垂文が施された胴部片で、地文は全て繩文である。

第7号住居跡（第20図 P L 7）

本跡はB1h区を中心に確認された住居跡で、第6・17号住居跡、第74・76号土坑と重複している。土坑は2基とも繩文期のもので、本跡よりも古いが、住居跡間の新旧関係は明確でない。

本跡の平面形は、残存壁から推定すると方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-60°-Wである。規模は、長軸5.14m・短軸4.9mで、主軸方向がやや短い。壁は、西壁の大部分と東壁の一部が重複等で消失しているが、残存壁はロームで、外傾して立ち上がっている。壁高は、最深部

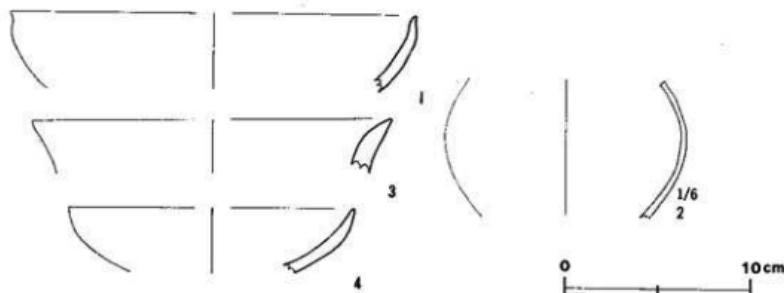


第20図 第7号住居跡実測図

で10cmである。床は、第6号住居跡と重複する部分はハードロームブロックの混入した黒褐色土であり、他は締まりのないロームである。ピットは3か所検出されている。P₁は、径30cm・深さ69cmである。P₂・P₃は、それぞれ径35cm・深さ40~49cmである。カマドは、消失している西壁の中央部に構築されていたと思われるが、重複のため確認できなかった。

覆土の堆積状況は、調査の関係で一部分しか観察できなかつたが、自然堆積と思われ、褐色土、暗褐色土の順で堆積しており、それぞれに焼土粒子を含んでいる。

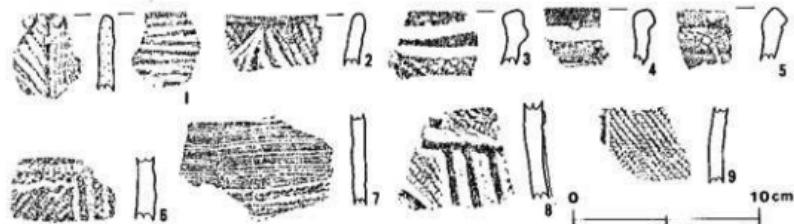
遺物は、縄文式土器片、土師器片等が合わせて266点床面及び覆土中から出土している。



第21図 第7号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第21図）

図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	坏 土師器	A(21.8)	口縁部片で、胴部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	橙色 砂粒	5%
		B(4.1)	刺部片で、強く内湾している。	内外面ともヘラミガキ。	普通 普母	P13
2	壺 土師器	B(19.8)	壺の口縁部と思われる。口縁部は外傾して立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	橙色 砂粒・普母	35%
		A(19.4)			普通 スコリア	P11
3	壺 土師器	B(2.9)			にぶい橙色 砂粒・普母	2%
		A(15.4)	口縁部片で、ゆるく内湾しながら立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	赤色 砂粒・普母	P12
		B(3.5)			普通	PL20
						P14



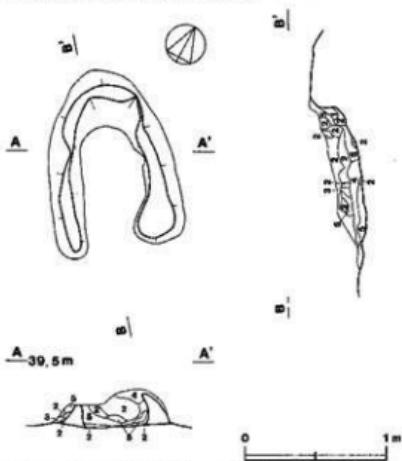
第22図 第7号住居跡出土土器拓影図

第22図の1は条痕文を地文とし縦位に微隆起線を貼り付けた口縁部で、胎土に纖維を含んでいる。2は口縁部から弧状に沈線が施されており、地文は縄文である。3・4は太い沈線を横位に施し、口縁部と胴部を区画しており、地文は縄文である。5～7は連続刺突文及び沈線文で文様帯が構成されている。5・7は地文がなく、6・9は縄文である。8は隆・沈線を幾何学的に配して文様帯を構成している。

第8号住居跡（第23・24図 PL 7・8）

本跡はC1a₂区を中心に確認された住居跡である。本跡は、第2・3号住居跡と重複し、西側の一部はエリア外にのびている。新旧関係は、第2号住居跡→本跡→第3号住居跡の順に新しくなると思われる。当遺跡の住居跡の中では、最良の遺存状態で検出された遺構である。

平面形は方形を呈し、主軸方向はN-37°Wである。規模は、長軸7.03m・短軸6.65mで、主



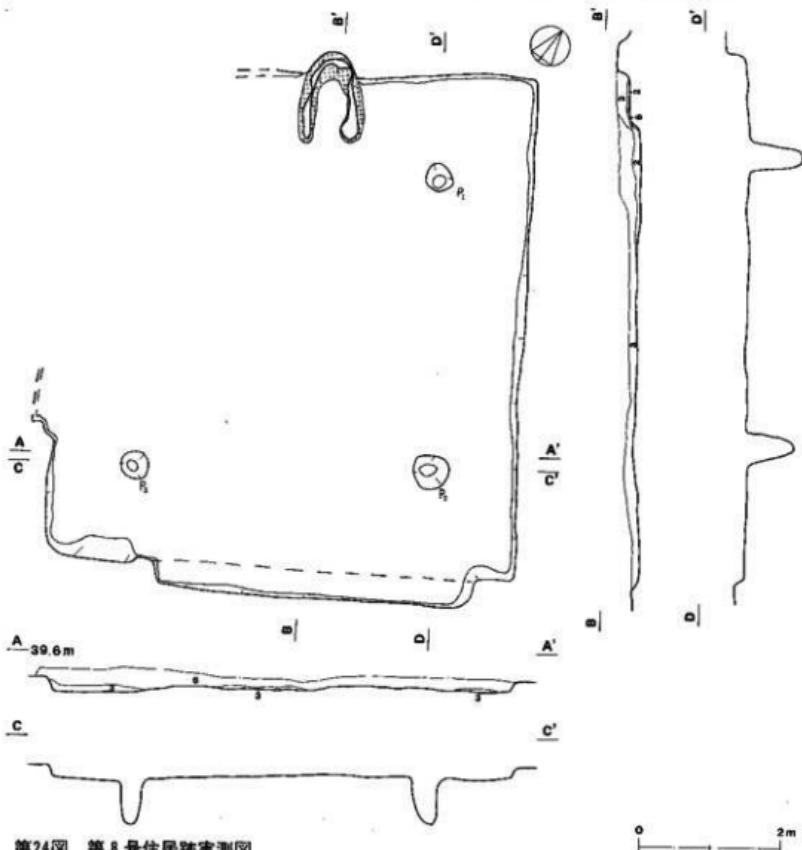
第23図 第8号住居跡カマド実測図

軸方向が約40cmほど長い。壁は、北壁のカマド西側と西壁の大部分、及び南壁の大部分が検出できなかったが、他の部分では良好な壁が検出され、垂直に立ち上がっている。壁高は、西壁で20cm・北壁で30cmである。床はロームで、平坦であり、カマド前面から中央部にかけて硬く踏み固められている。ピットは、3か所検出された。P₁は径42cm・深さ116cm、P₂は55cmと84cm、P₃は39cmと84cmで、それぞれ規模と位置から支柱穴と思われる。カマドは、北西壁中央部に構築されており、長さ130cm、袖幅92cmの規模である。火床は、床を5cm掘り下げ、そ

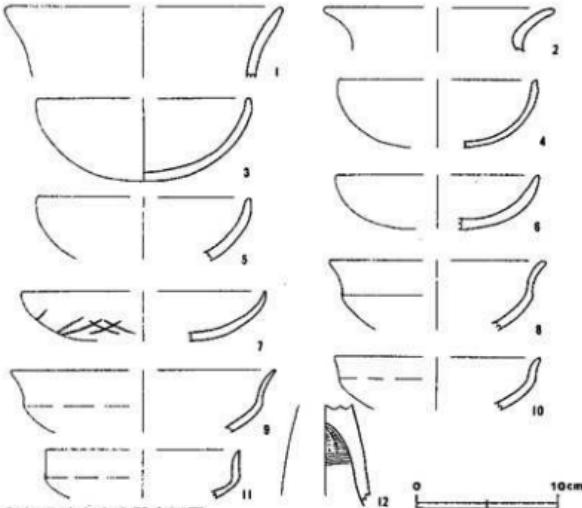
のままなだらかな傾斜で煙道に続く。煙道は、壁から35cm張り出している。火床のローム面、及び袖の内面は火熱を受け、硬い焼土となっていた。なお、カマドの主軸方向は、住居跡の主軸方向と一致する。

覆土は自然堆積で、大きく3層に分けられる。上位から、ローム粒子を多量に含む褐色土、ローム粒子多量・炭化粒子少量を含む暗褐色土、ローム粒子多量・炭化粒子中量を含む暗褐色土の順で堆積している。

遺物は、縄文式土器片、土師器片等が合わせて2,952点出土している。他に、土製円板、土器片鍤なども覆土中より出土している。本跡の位置する地点は、多くの遺構が重複していた場所で、周辺の土が何度も掘り返された結果、多量の土器片が覆土に混入したものと思われる。



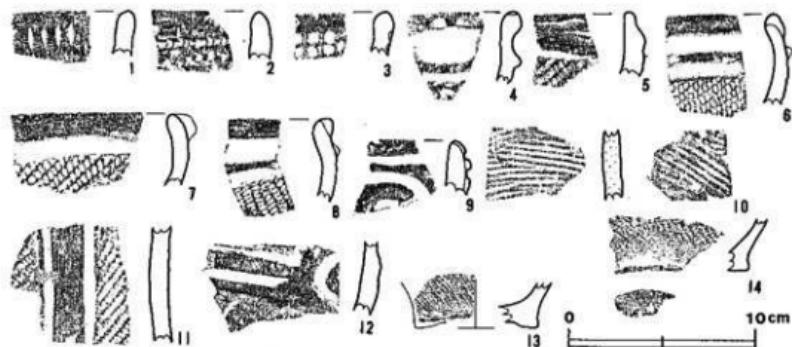
第24図 第8号住居跡実測図



第25図 第8号住居跡出土土器実測図

出土土器観測表 (第25図)

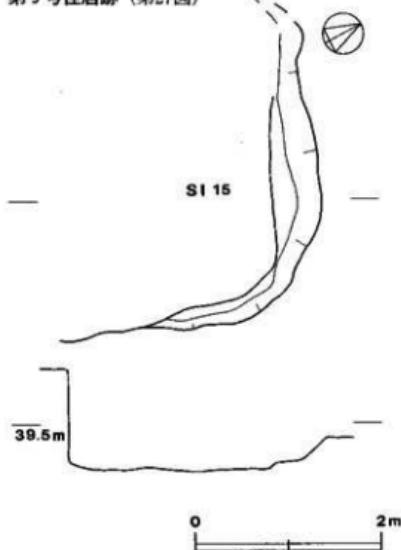
器名	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎・焼成	備考
1	甕 土師器	A (20.0) B (5.1)	口縁部で、わずかに外反して立ち上がる。	外面横方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラミガキ。	にぼい赤褐色 砂粒 普通	3% P25
2	甕 土師器	A (16.6) B (3.2)	口縁部で、外反ぎみに強く外傾して立ち上がる。	外面へラナデ、内面へラケズリ。	灰褐色 砂粒 普通	3% P26
3	甕 土師器	A (15.2) B (6.0)	底部から口縁部にかけて、球状を呈し、口縁端部でわずかに内傾する。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ後一部へラナデ、内面横方向のナデ。	にぼい赤褐色 砂粒 普通	60% P16
4	甕 土師器	A (14.2) B (4.9)	底部から口縁部にかけて球状を呈し、口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ、内面へラミガキ。	明赤褐色 砂粒 普通	15% P17
5	甕 土師器	A (15.2) B (4.5)	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はゆるく内湾する。	内外面ともザラザラしている。	赤褐色 砂粒 普通	15% P19
6	甕 土師器	A (14.5) B (4.0)	体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖っている。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ、内面へラミガキ。内外面とも荒れてザラザラしている。	にぼい褐色 砂粒 普通	15% P23
7	甕 土師器	A (17.4) B (3.6)	体部から口縁部にかけて内湾しており、外上方に大きく開いている。体部下半部にへラ状工具による切り込み痕がある。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ、内面へラミガキ。	にぼい褐色 砂粒 普通	5% P26
8	甕 土師器	A (15.4) B (5.0)	体部は内湾し、口縁部との境に後をもつ。口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ。内面へラミガキ。	赤褐色 砂粒 普通	15% P15
9	甕 土師器	A (19.0) B (4.5)	体形は内湾し、口縁部との境に明確な後をもつ。口縁部は外反している。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ。内面へラケズリ後ナデ。	赤褐色 砂粒 普通	3% P21
10	甕 土師器	A (14.6) B (3.8)	体部はゆるく内湾し、口縁部との境に後をもつ。口縁部はゆるく外反している。	口縁部ヨコナデ。外面へラケズリ、内面へラミガキ。内外面とも荒れてザラザラしている。	赤褐色 砂粒・雲母 普通	8% P24
11	甕 土師器	A (14.0) B (3.5)	体部は内湾ぎみに外傾し、口縁部に至る。口縁部は直立し、口唇部が尖る。	口縁部及び内面ヨコナデ、外面へラケズリ。	明赤褐色 砂粒 普通	3% P22
12	(高甕) 土師器	B (7.2)	高甕の脚部で、内湾ぎみに広がりその後「八」の字状に大きく開く。	外面横方向のヘラケズリ後ナデ、内面へラケズリ。	褐色 砂粒 普通	20% P18



第26図 第8号住居跡出土土器拓影図

第26図の1・2は爪形の連続刺突文、3・4は円形の連続刺突文が施されている。5～9は沈線を横位あるいは弧状に配した口縁部片で、地文は9を除き繩文である。10は表裏に条直文が施され、胎土に纖維を含んでいる。11・12は平行沈線文が横位あるいは縦位に施され、内側は磨消されている。13・14は底部から胴部にかけての土器片で、撫糸文が施されている。

第9号住居跡（第27図）



第27図 第9号住居跡実測図

本跡はClj区を中心に確認された住居跡で、遺構の大部分が第15号住居跡に切られており、わずかに、壁と床の一部が調査できたにすぎない。したがって、平面形や規模等は不明である。

調査された部分から推定すると、平面形は隅丸方形あるいは小判形になる可能性が強い。壁はロームで、45°の傾斜で立ち上がっている。壁高は、24cmである。床は縫まりのないロームで、平坦であったと思われる。ピット及び炉跡について不明である。

覆土の状況は、観察できなかった。

遺物は、繩文式土器片、土師器片等合わせて196点出土している。他に床に近い覆土中から、弥生式壺の甕が1点出土し

ている。



第28図 第9号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表 (第28図)

図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	菱 彌生式土器	A (14.6) B 16.0 C (7.2)	底部は平底で、胴部は内湾して立ち上がる。胴部最大径は中位よりやや上部にある。口縁部は外反している。頭部無文帯を挟んで胴部及び口縁部には撚糸文が施されている。	無文帯部はケズリ。	黒褐色 砂 粒 普 通	50% P 27 PL21

第29図の1は角棒状工具による刺突文が施され、口唇部には刻み目がつけられている。2・3は胴部で、撚糸文が施されている。4は撚糸文が施された口縁部片で、口縁部には丸棒状工具による圧痕文が連続して施されている。5は底部～胴部にかけての破片で、胴部下端に繩文が施されている。

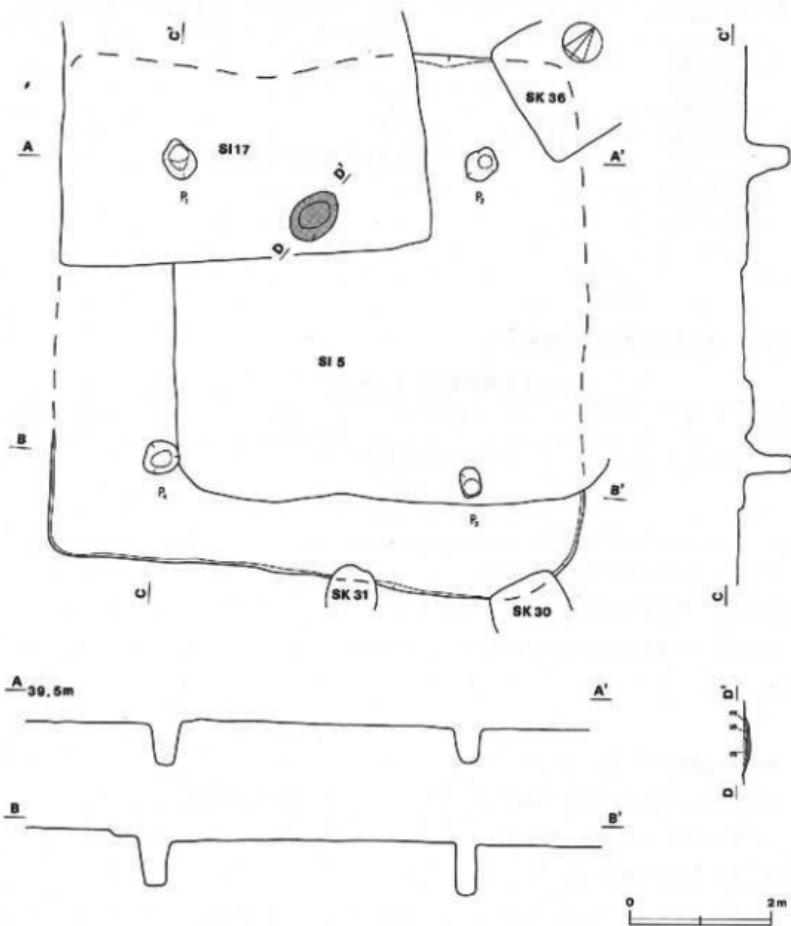
第10号住居跡 (第30図 PL 8)

本跡は BI₁・BI₂区を中心に確認された住居跡で、ロームへの掘り込みはほとんどなく、ビットの配置と炉跡から住居跡と判断された遺構である。本跡は、第5・17号住居跡と重複しており、本跡の床は2軒の住居跡に切られている。

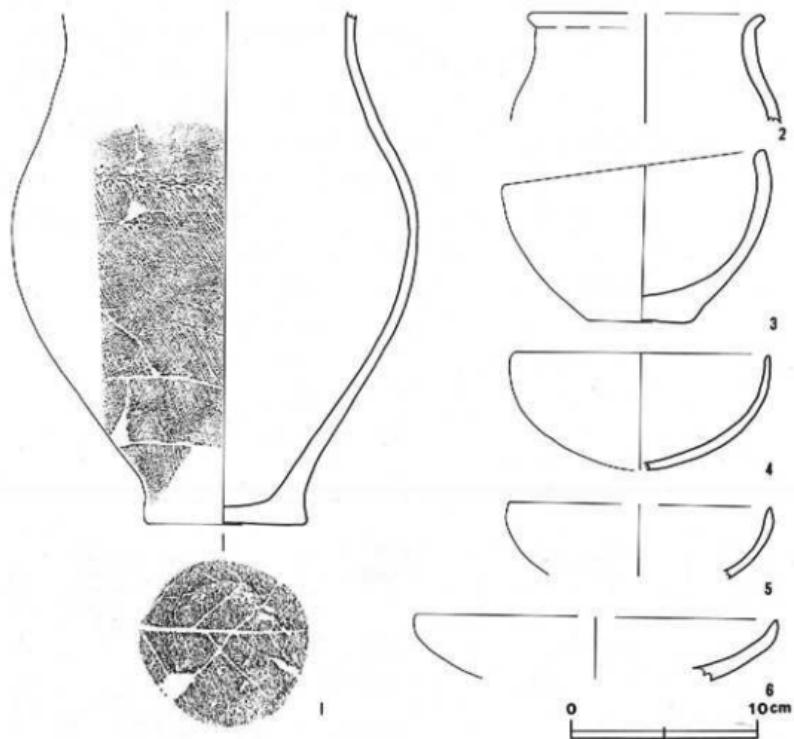
平面形は方形を呈していたと思われるが、断定はできない。主軸方向は、形状から判断してN-33°-Wと思われる。規模は不明である。壁もほとんど残っていないため不明である。床はロームで平坦であり、炉の周囲だけ踏み固められている。ビットは、4か所検出されている。P₁・P₂・P₄は、径45~50cmで、P₃はやや細く39cmである。しかし、深さはP₃が76cmで、他のビットは53~70cmである。炉は、床中央よりやや北西に寄って検出された。平面形は、長径83cm・短径57cmの梢円形を呈しており、床を8cmぐらい掘りくぼめた地床炉で、その全面に焼土の堆積がみられる。

覆土は観察できなかった。

遺物は、縄文・弥生式土器片、土師器片合わせて626点がおもに覆土中から出土している。



第30図 第10号住居跡実測図

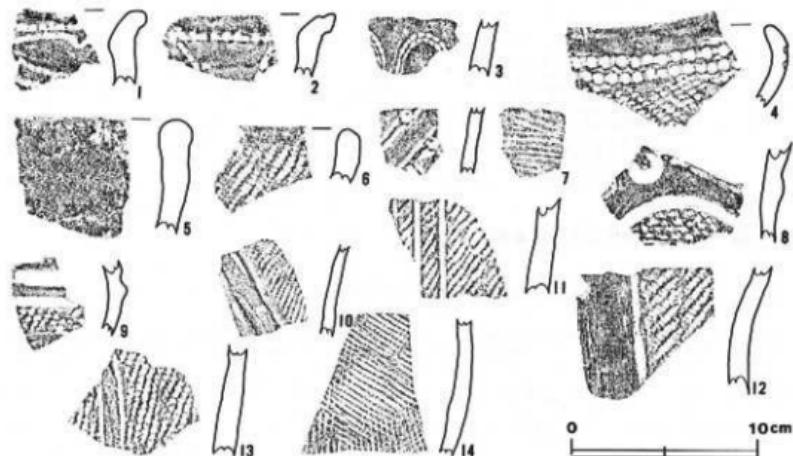


第31図 第10号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表 (第31図)

図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	壺 弥生式土器	B (27.7)	底部は平底で、木葉痕が残る。	肩部より上方はミガキ。	にぶい赤褐色	55%
		C (8.9)	胴部は外傾して立ち上がり、その後内湾して頸部に至る。頸部最大径を中位にもち、肩部以下に撻糸文が施されている。		砂粒	P28
2	壺 土師器	A (12.8)	口縁部片で、内傾して立ち上がり、口縁端部で外上方に開く。	口縁部ヨコナデ。	明赤褐色	5%
		B (5.9)			砂粒	P30
					普通	PL21

3	鉢	A 14.1 B 9.5 7.2 C 5.7	底部は平底で体部は内湾して立ち上がり、口縁部は内傾する。 成形が悪く器高差が大きい。	口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	橙色 砂粒 普通	97% P35 PL21
4	壺	A (13.6)	底部から口縁部にかけて球状を呈し、口縁部は磨滅し欠損部が多い。	口縁部ヨコナデ、外側ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナデ。	赤褐色 砂粒 普通	85% P29 PL21
5	壺	A (14.2)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部はヨコナデ、外側ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	橙色 砂粒 普通	5% P32
6	壺	A (19.6) B (3.4)	体部は弱く内湾しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口唇部は尖る。	口縁部及び内面ヨコナデ、外側ヘラケズリ。	褐灰色 砂粒 普通	3% P31



第32図 第10号住居跡出土土器拓影図

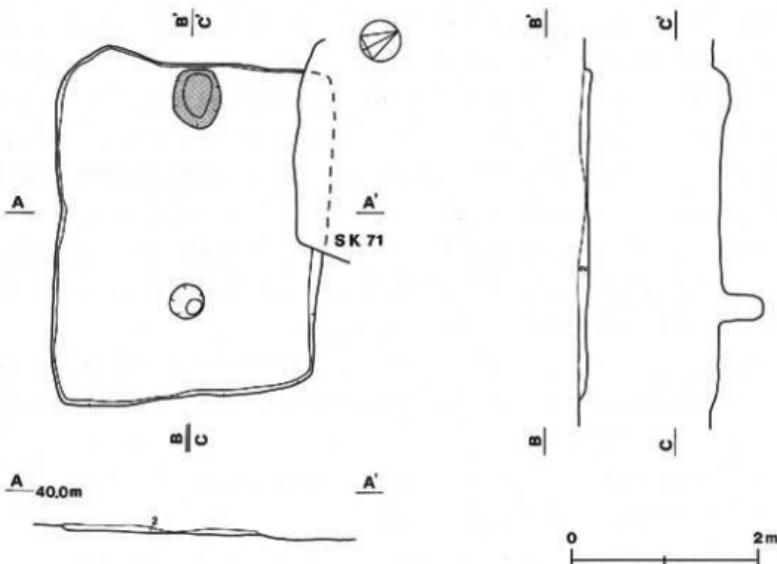
第32図の1～3は角棒状工具による連続刺突文で幾何学的な文様を構成している。4は円形刺突文を横位に施した口縁部片である。5・6はともに口縁部片で、5は無文、6は網文が施されている。7は条痕文系の土器片で、微隆起線を斜位に貼り付けた後とろどろに円形刺突文が配されている。8・9は太い沈線で文様帯を区画し、内側を磨消している。10は細い隆沈線を斜

位に施し、内側は磨消している。11は沈線を3本垂下させた胴部片で、地文は縦文である。12・13は懸垂文が施されている。14は須恵器片である。

第11号住居跡（第33図 P L 8）

本跡はB1g_a区を中心に確認された住居跡で、北東1mには第13号住居跡が位置している。本跡の北には、第71号土坑が床を切って掘り込まれている。

平面形は長方形で、主軸方向はN-60°-Wである。規模は、長軸3.6m・短軸2.84mで、主軸方向が長い。壁はロームで、外傾して立ち上っている。壁高は、東壁で10cm、南壁で8cmを測る。床は、ソフトロームの中にハードロームブロックが混入した状態で、全体に硬く締まっている。ピットは、東壁に寄って1か所検出され、径35cm・深さ57cmで、やや内側に傾斜して掘り込まれている。北西壁中央下の床面に焼土が堆積しており、この部分を調査したところ、長径64cm・短径50cm、深さ8cmの梢円形を呈する浅い掘り込みであることが判明した。掘り込み内部には、焼土粒子及び焼土ブロックが堆積しており、底面は火熱を受けて硬く締まっていた。また、周辺からカマドを構築する際に用いられたと思われる砂質粘土が検出されたことから、この掘り込みはカマドの火床と判断した。しかし、煙道の掘り込みや袖等は、住居跡の掘り込みが浅いこともあり、



第33図 第11号住居跡実測図

検出されなかった。

覆土は1層で、多量の青灰色粘土ブロック及びハードロームブロックを含む褐色土である。青灰色の粘土は、本跡の近くに検出され粘土貼りを有する土坑に使用された粘土が混入したものと考えられる。

遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて108点が覆土中から出土している。



第34図の1・2とも太目の沈線で曲線文を描いている。

1は地文がなく、2は一部に縄文を施している。

第34図 第11号住居跡出土土器拓影図

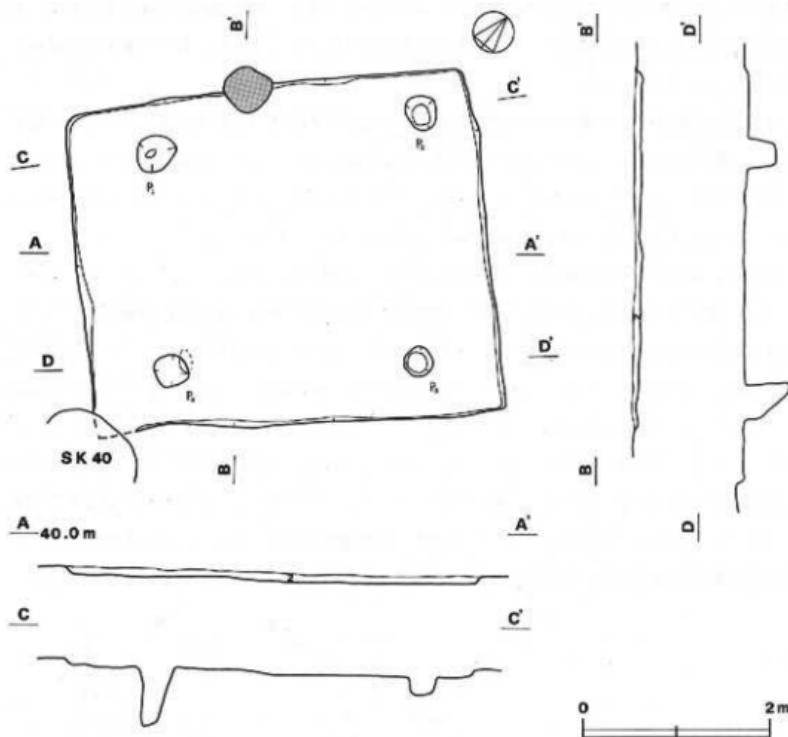
第13号住居跡（第35図 PL 9）

本跡はB1f₂区を中心に確認された住居跡で、第3号掘立柱建物跡及び第40号土坑と重複し、いずれも本跡より新しい。

平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wである。規模は、長軸4.41m・短軸3.69mで、主軸方向が短い。壁は、本跡の掘り込みが浅いこともあり、明確なものではないが、南コーナー部を除き検出されている。壁高は、南西壁で10cmを測り、他は3~8cmで、外傾して立ち上がるものと思われる。床はロームで平坦であるが、南東部は掘立柱建物跡と重複している関係で、明確には検出できなかった。ピットは、各コーナー部に寄って4か所検出されている。しかし、確実に柱穴と考えられるのはP₁だけで、径38cm・深さ71cmである。P₂~P₄は、壁や底面が暗褐色土で、不確実なピットである。P₄は、遺構外の南側を向いて掘り込まれており、本跡に伴うピットとするには不自然である。カマドは北西壁中央に構築されていたと思われ、床から壁外にかけて、径50cmの円形の掘り込みが認められる。掘り込み内部には全面に焼土が堆積しており、カマドの火床と考えられる。袖等は残っていない。

覆土は、ハードロームブロック及びローム粒子を多く含有した褐色土で、非常に硬く締まっている。掘立柱建物を建てる際に、周辺部をつき固めた痕跡がみられることから、本跡の覆土が硬いのは、その影響と考えられる。

遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて89点と、土器片鑑1点が出土している。覆土が浅いこともあり、床面から出土したものが大部分である。



第35図 第13号住居跡実測図



第36図 第13号住居跡出土土器拓影図

第36図の1は刺突文を横位に施している。2は縄文を施した後、沈線を縦位に垂下させている。3は懸垂文が施されている。4は条線が縦位に施文されている。

第15号住居跡（第37図 PL 9）

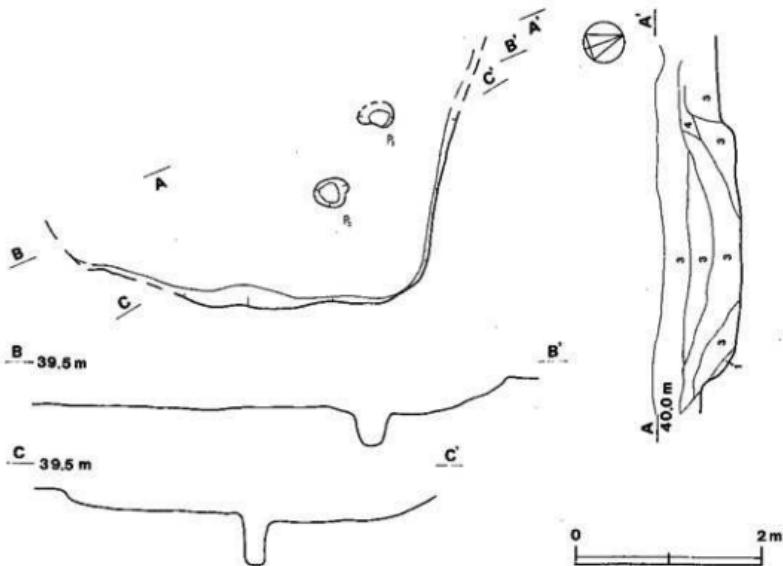
本跡には B1j₂区を中心に確認された住居跡で、当初、土坑として調査を開始したが、後に住居跡と判明した造構である。本跡の大部分はエリア外にのびており、調査した部分は全体の5分の

1程度で、かつ第8・9号住居跡と重複しているため、平面形・規模等の詳細は不明である。土層や出土遺物から新旧関係をみると、第9号住居跡を本跡が切っており、本跡は第8号住居跡に切られていることがわかる。

平面形は、確認できた東コーナー部から推定すると、方形あるいは長方形を呈するものと思われる。主軸方向も推定であるが、N-60°-Wぐらいを指すものと考えられる。壁はロームで、75°の角度で外傾し、壁高は30cmである。床はロームで、ほぼ平坦である。ピットは、2か所検出されている。 P_1 は、径40cm・深さ38cm、 P_2 は、径38cm・深さ51cmである。

覆土は、焼土粒子や炭化粒子を少量含んだ褐色土が1層認められた。

本跡で注目すべき点は、白玉の未製品、及びその原石である滑石の小破片が多量に出土した点である。出土地点は本跡の南端部、第8号住居跡に切られている地点を中心にして、その周辺の床、あるいは覆土中からである。出土した滑石の総重量は801.2gで、そのうち滑石の小破片が760gを占めている。残りの40g強が未製品である。未製品は501点で、貫通孔のあるものと、ないものがみられる。完成品の破片は、わずか21点である。このように滑石の破片が多量に出土したのは本跡だけであり、他の住居跡とは性格を異にするものと考えられる。すなわち、単なる住居跡ではなく、白玉を主に製作していた工房跡であった可能性が強い。このことは、本跡から出土した土器片数が19点と、他の住居跡と比較して極端に少ないことからも、それがうかがえる。いず

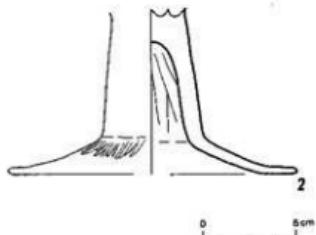


第37図 第15号住居跡実測図

れにしても、本跡の大部分がエリア外であるため、その詳細を明らかにすることことができなかったのが残念である。



第39図 第15号住居跡出土土器拓影図



第38図 第15号住居跡出土土器実測図

第39図の1～3は同一個体と思われ、細い沈線を縦位に施している。地文は繩文である。

出土土器観察表（第38図）

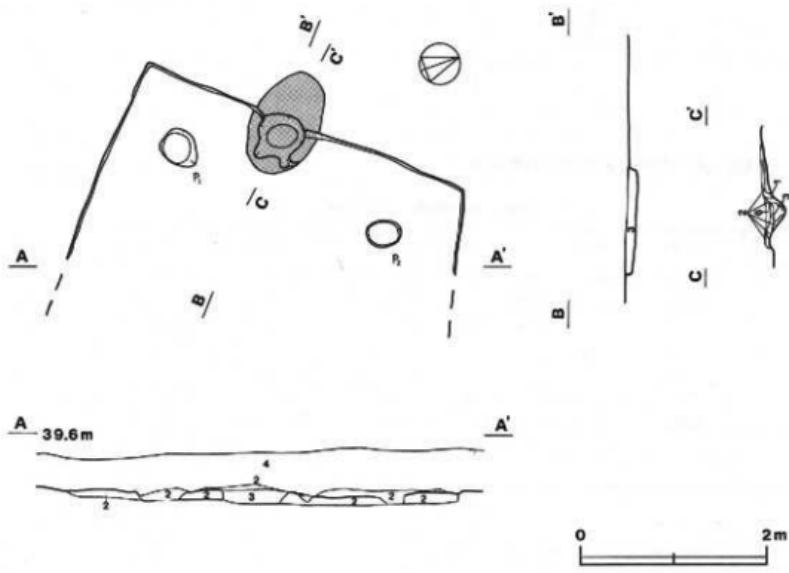
図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・陶土・焼成	備考
1	高環 土師器	A(18.2) B(6.2)	坏部のみである。体部下端に明瞭な棱をもち、直線的に外上方に傾いて口縁部に至る。	口縁部ヨコナデ、外 面ヘラケズリ、内面 ヘラミガキ。内外面 とも荒れてザラザラ している。	橙 砂 普 通	25% P41 PL21
2	高環 土師器	B(7.9) 側部径 (15.6)	脚部のみである。坏部から直線的に側部にのび、側部はやや外反しながら大きく外下方に開く。	外面縦方向のヘラミ ガキ、内面荒いヘラ ケズリ、裾端部ヨコ ナデ。	橙 砂 良 好	15% P33 PL21

第16号住居跡（第40図 P L10）

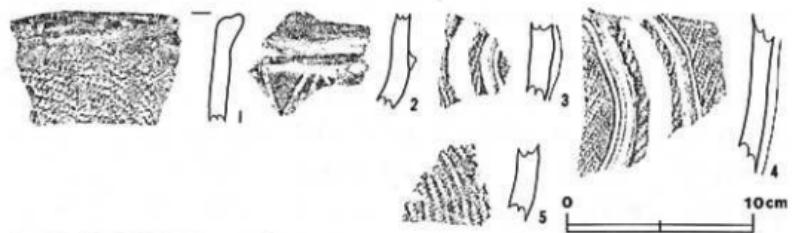
本跡はB2i区を中心に確認された住居跡である。本跡は遺跡の東端に位置している関係で、3分の2近くがエリア外となり、さらに、遺構確認の段階で床が露呈してしまい、壁のほとんどが消失してしまったため、規模等の詳細は不明である。

調査した部分から推定すると、平面形は方形あるいは長方形を呈し、主軸方向はN-50°Wと思われる。規模は、北西壁の長さが3.70mで、他は不明である。壁は、残存部がほとんどなく、壁高は検出できたところで2cmである。床は、土層断面の観察によって確認されたもので、ハードロームブロックの層が断続的に認められている。住居跡内部には、本来の床はほとんど残っていない。ピットは2か所検出されているが、底面以外は軟らかな暗褐色土で、確実なものではない。

カマドは北西壁中央部に構築されていたが袖等は消失しており、規模は不明である。確認できたのはカマドの痕跡だけで、長径115cm・短径74cmの梢円形の範囲に焼土の堆積がみられた。調査の結果、火床と考えられる掘り込みは、長径51cm・短径45cmの梢円形を呈し、床を20cm掘り下げてあることが判明した。また、焼土の堆積部分が、壁外に50cm張り出していることから、煙道も外に張り出す形で付設されていたものと思われる。袖が構築されていたと考えられる部分から、5×4cmの長方形を呈する砂岩が検出された。この石はロームを掘り込んで垂直に立てられていたとみられ、おそらく袖を強化する目的で使われたものであろう。エリアとの境界の土層断面を観察してみると、覆土は自然堆積で、黒褐色の表土が厚く堆積し、下位に焼土粒子、ハードロームブロックを含む褐色土がみられる。



第40図 第16号住居跡実測図



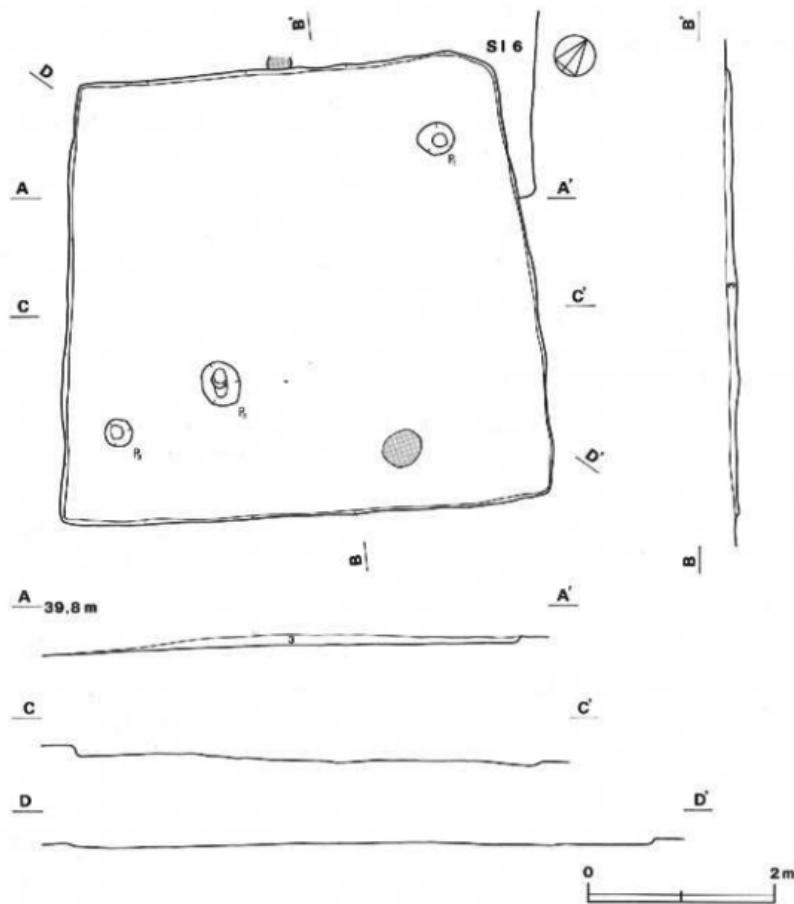
第41図 第16号住居跡出土土器拓影図

遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて109点が覆土中から出土している。

第41図の1は縄文がまばらに施された口縁部片である。2は浅い沈線を横位に施し、その下部は刺突文によって幾何学的な文様が描かれている。3・4は同一個体と思われ、太さの異なる2種の沈線を弧状に配している。地文は縄文である。5は縄文が施された胴部片である。

第17号住居跡（第42図 PL 9）

本跡は BI₁区を中心に確認された住居跡である。この地点は多くの遺構が重複しているところ



第42図 第17号住居跡実測図

で、住居跡が本跡を含めて5軒、土坑1基、掘立柱建物跡1棟が検出されている。これらの遺構の中で、本跡は最も新しいと考えられるが、残存状態が悪く、壁や床のほとんどは消失している。

平面形は長方形で、主軸方向はN-41°-Wである。規模は、長軸5.00m・短軸4.80mと推定される。壁はほとんど検出できぬため不明である。床はロームで、平坦であり、周辺部は軟らかである。しかし、P₁～P₂の間は極めて硬く踏み固められている。南東コーナー部の近くに、炉と思われる遺構が検出されているが、本跡に伴うものではなく、第5号住居跡の炉であろうと考えられる。ピットは3か所検出されているが、P₁・P₂の2か所が主柱穴であると思われる。それぞれの規模は、径42～51cm・深さ48～76cmである。北壁中央部に焼土が貼り付いていたが、これはカマドが構築されていた痕跡を示すものと思われる。

覆土は暗褐色土が1層だけ認められ、ハードロームブロック及び焼土粒子を含有している。

遺物は、土師器片を中心に544点出土し、他に完形の壺2点、土玉1点が出土している。遺物は全て床面から出土したものである。

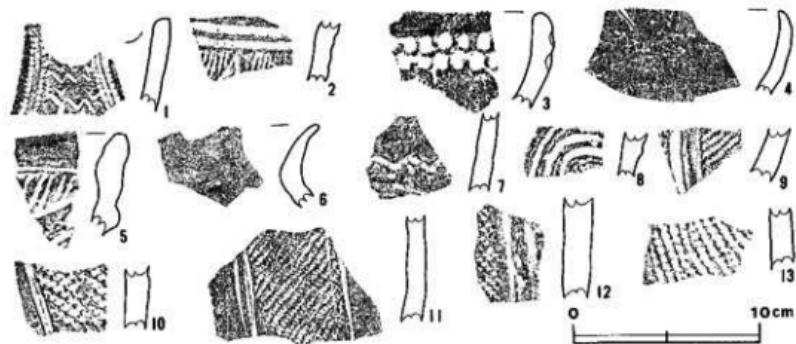


第43図 第17号住居跡出土土器実測図

出土土器観察表（第43図）

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1 土師器	壺	A 15.2	底部から球状に立ち上がり、口縁部で内傾する。	口縁部ヨコナデ、外 面ヘラケズリ、内面 ヘラミガキ。	橙色	100%
	土師器	B 6.6			砂粒	P34
2 土師器	高壺	B(7.0)	高壺の脚部片である。壺部から 直線的に下がり、その後外下方 に大きく開く。	外面縱方向のヘラケ ズリ、内面縱方向の 荒いヘラケズリ。	橙色	10%
	土師器	B(1.7)			砂粒	P37
3 土師器	壺	C(6.2)	底部片で、糸切り痕が残る。 平底。	内外面ともヘラケズ リ。	橙色	3%
	土師器				砂粒	P36
					普通	

第44図の1は波状を呈する口縁部片で、刺突文と蛇行沈線文が施されている。2は平行沈線を横位に施し、下部に条線文を縦位に施している。3は円形刺突文が横位に施されている。4・6は無文、5は沈線文が施されている口縁部片である。7・8は連続刺突文が波状あるいは弧状に施されている。9は隆・沈線が弧状に施され、地文は縄文である。10～12は懸垂文が施されている。13は縄文だけが施されている。

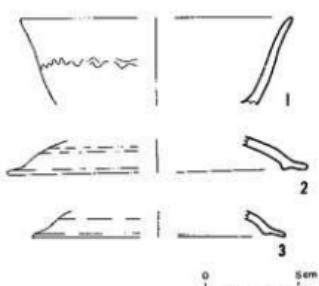


第44図 第17号住居跡出土土器拓影図

第18号住居跡 (第46図 P L10)

本跡はB2f₂区を中心に確認された住居跡で、北側は第2号掘立柱建物跡に、南側は第5号掘立柱建物跡によってそれぞれ切られている。本跡も第16号住居跡と同じく、造構確認の段階で床が露呈してしまい、壁の確認はできなかった。

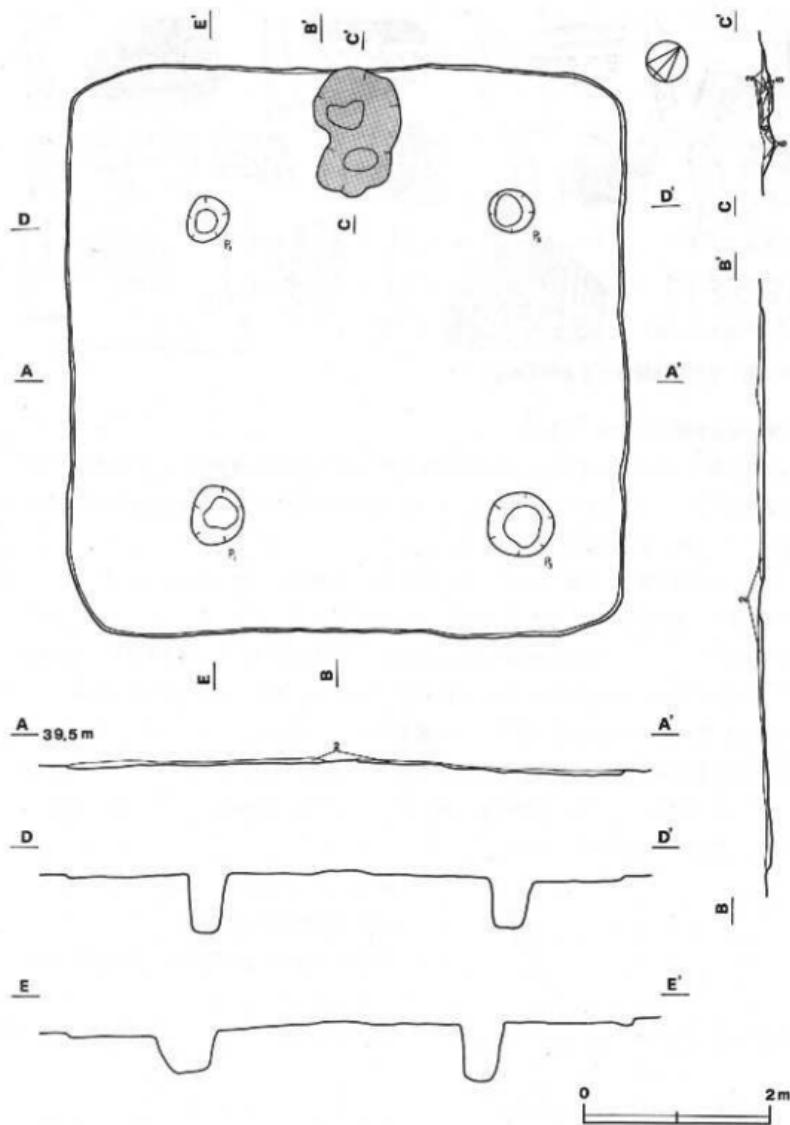
平面形は隅丸方形で、主軸方向はN-45°-Wである。規模は、一辺6.0mである。壁は前述の通りで明確ではないが、外傾して立ち上がっていたものと思われる。床はロームで、平坦であり、全体に軟らかい。ピットは4か所検出され、規模及び位置等から主柱穴と考えられる。P₁・P₂はやや細く、径50cm・深さ51~62cmである。P₃・P₄はやや太く、径63~72cm・深さ44~45cmである。カマドは、北西壁中央部に構築されていたが、確認できたのは痕跡だけである。焼土が、長径140cm・短径93cmの範囲に堆積しており、この部分が火床と思われる。火床は、床を10cmぐらい掘り込んでおり、特に北西壁よりとその手前50cmの部分はさらに5~10cmほど深くなっている。これはそれぞれ、燃焼部と焚口部と考えられる。



第45図 第18号住居跡出土土器実測図

覆土はほとんど残っていなかったが、焼土粒子を少量含む褐色土が確認できた。

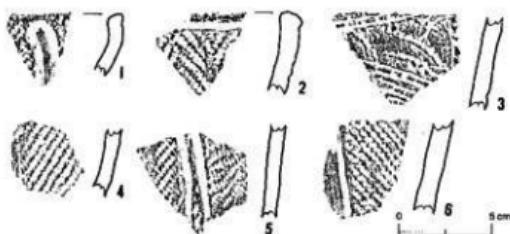
遺物は、土玉、須恵器片を含めて218点が床面から出土している。



第46図 第18号住居跡実測図

出土土器観察表（第45図）

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	壺 土師器	A(14.6)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。体部中位に不規則な波状沈線が横位に走る。	外面ナデ、内面ヨコナデ。内外面とも磨滅している。	にぶい橙色 砂粒 普通	15% P40
		B(4.7)				
2	壺蓋 須恵器	A(16.2)	口縁部片で、内側にかえりをもつ。	天井部回転ヘラケズリ。水挽き成形。	灰白色 砂粒 普通	10% P38
		B(1.8)				
3	壺蓋 須恵器	A(13.6)	口縁部片で、内側に低いかえりをもつ。	水挽き成形。	にぶい黄橙色 砂粒・雲母 普通	3% P39
		B(1.4)				



第45図 第18号住居跡出土土器拓影図

第47図の1・2は口縁部片で、網文を施した後、沈線を弧状あるいは横位に施している。3は沈線で幾何学的な文様を描き、内部に刺突文を充填している。4～6は懸垂文が施されている。

住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		壁面	床面	覆土	備 考 (出土遺物)
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)				
1	C1b ₆	(N-49°-W)	(方形)	5.59×?	18	垂直	平坦	N	S1-2と重複 181点
2	C1b ₇		(方形)		20	外傾	平坦	N	S1-1・8と重複 580点
3	B1j ₆	N-30°-W	方形	4.75×4.33	0 5	外傾	平坦	N	S1-8と重複 384点
4	C2a ₁	(N-57°-W)	(方形)		0 10	外傾	平坦		86点
5	B1i ₆	N-34°-W	方形	6.35×6.24	5 10	外傾	平坦	N	S1-10・17と重複 340点
6	B1h ₆	N-36°-W	長方形	5.94×5.15	5 10	外傾	平坦	N	S1-7・17と重複 664点

7	B1b ₇	N-60°-W	方形	5.14×4.90	0 10	外傾	平坦	N	S1-6・17と重複 266点
8	C1a ₇	N-37°-W	方形	7.03×6.65	15 30	外傾	平坦	N	S1-2・3と重複 2952点
9	B1j ₇				24				S1-15と重複 196点
10	B1i ₈	(N-33°-W)	(方形)		0 5	外傾	平坦		S1-5・17と重複 626点
11	B1g ₈	N-60°-W	長方形	3.60×2.84	10	外傾	平坦	A	108点
13	B1f ₉	N-45°-W	長方形	4.41×3.69	3 10	外傾	平坦	N	89点
15	B1j ₉	(N-60°-W)			8	外傾	平坦	N	S1-8・9と重複 19点滑石片多量
16	B2i ₈	(N-50°-W)	(方形)	3.70×?	0	外傾	平坦	N	109点
17	B1i ₈	N-41°-W	方形	5.00×4.80	2		平坦		S1-5・6・7・10と 重複 544点
18	B2f ₈	N-45°-W	隅丸 方形	6.00×6.00	0		平坦		218点

第3節 土坑

当遺跡では、総数65基の土坑が検出されている。その分類については、遺跡の概要の項で述べたとおりである。これらの土坑については、一覧表で表示し、ここでは主な土坑について記載することにする。なお、地下式坑については4節で説明する。

1 縄文時代の土坑

第42・44・49・74・76号土坑は、その形状や出土遺物等から縄文時代の土坑と考えられる。

第44号土坑（第60図 P L 15）

本跡はB2e₈区を中心に確認された土坑で、当遺跡では比較的北側に位置し、第2号掘立柱建物跡と重複している。本跡の西側1mには、第49号土坑が存在している。

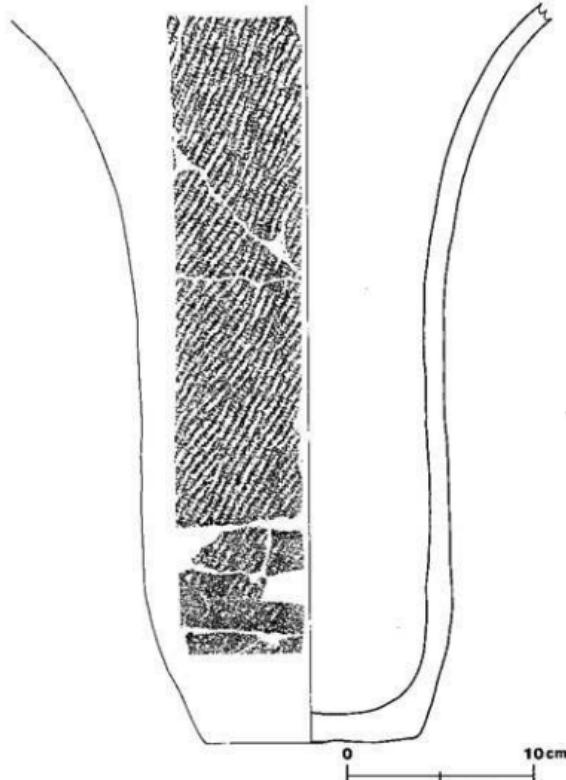
平面形は、長径2.18m・短径1.92mの楕円形を呈し、長径方向はN-32°-Eである。壁は75°の角度で立ち上がり、東壁の一部を除きロームである。東壁は、第2号掘立柱建物跡のP_{1s}により切られている。底面はロームで平坦であり、全体的に軟弱である。確認面からの深さは、24cmである。

覆土は自然堆積で、暗褐色土・褐色土の2層から成り、それぞれにハードロームブロック・焼

土粒子を少量含有している。下位の褐色土層は、やや粘性をおびている。

遺物は、縄文式土器片を主に、10点出土している。底面中央部からは口縁部を北西に向け横転した状態で、深鉢形土器が出土した。

また、この土器の南50cmの位置から磨製石斧も出土している。これらの遺物が底面に張り付いて出土していることから、本跡を縄文時代中期の土坑と判断した。



第48図 第44号土坑出土土器実測図

出土土器観察表（第48図）

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	深鉢形土器 縄文式土器	B (39.7) C 11.5	口縁部は大きく外反し、胴部は円筒状を呈し底部近くでややすぼまる。底部は平底である。 全体に縄文が施文されている。		赤褐色 砂粒 普通	60% P44 PL20



第49図 第44号土坑出土土器拓影図

第49図の1は脛部片と思われ、上半は無文、下半は縄文が施されている。2は縄文を施した後、直線的な沈線が横位及び縦位に施されている。3は縄文がまばらに施されている。

第74号土坑（第62図）

本跡はB1h区を中心に確認された土坑である。B1h区は遺跡の西端に近く、第6・7号住居跡、第77号土坑と重複しているが、すべて本跡より新しい遺構である。

平面形は、径2.32mの円形を呈している。壁はロームで、北側は垂直、東側は70°の角度で外傾して立ち上がっている。南側と西側は、75°の角度で内傾して立ち上がっている。壁高は現状で51cmであるが、本来はもっと深かったものと考えられる。また、各壁とも底面から内傾して立ち上がった後、垂直あるいは外傾して立ち上がり、開口部に続いていると推定される。底面は平坦であるが、ゆるやかに南東方向に傾斜している。底面の中央からやや西寄りの地点と、東側の壁下にピットが検出されている。中央部のピットは、径29cm・深さ33cm、東側のピットは、径25cm・深さ22cmである。

覆土は擾乱を受けているため明確ではないが、4層に分けられる。上位の2層は、ロームブロック及びローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し、下位の2層は、焼土粒子を含む褐色土が堆積している。

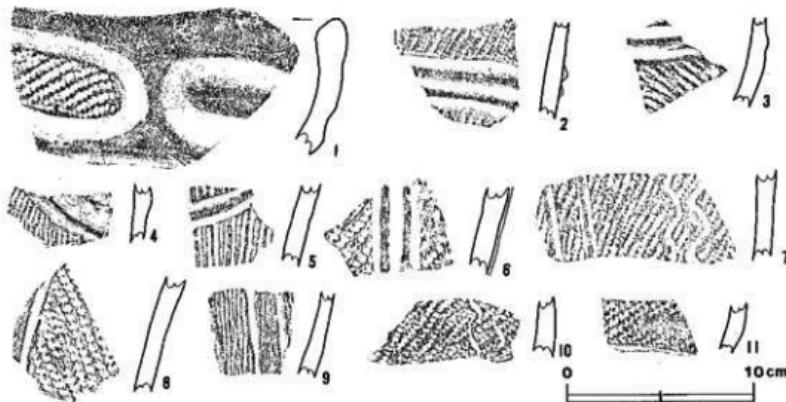


遺物は、縄文土器片を主に15点出土している。

第50図 第74号土坑出土土器実測図

出土土器観察表（第50図）

図中 番号	器種	法量cm	图形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	环 土器	A(12.1) B(4.2)	体部は内湾して立ち上がり。口 縁部は、わずかに外反している。 口唇部は、尖っている。体部下位に 断面「V」字状の切り込みが5か 所残っており、うち2か所は内 面まで貫通している。 底石として利用された可能性が ある。	口縁部ヨコナデ。体 部内外面ヘラミガ キ。	にぶい橙色 砂粒 普通	20% P46 PL22



第51図 第74号土坑出土土器拓影図

第51図の1は極めて太い沈線で楕円形の区画を描き、内部は縄文と磨り消しが交互に施されている。2～5は2本の平行沈線を横位あるいは弧状に施している。6・8・9は懸垂文が施されている。7と10・11は同一個体と思われ、直線及び蛇行する沈線が施されている。地文は縄文である。

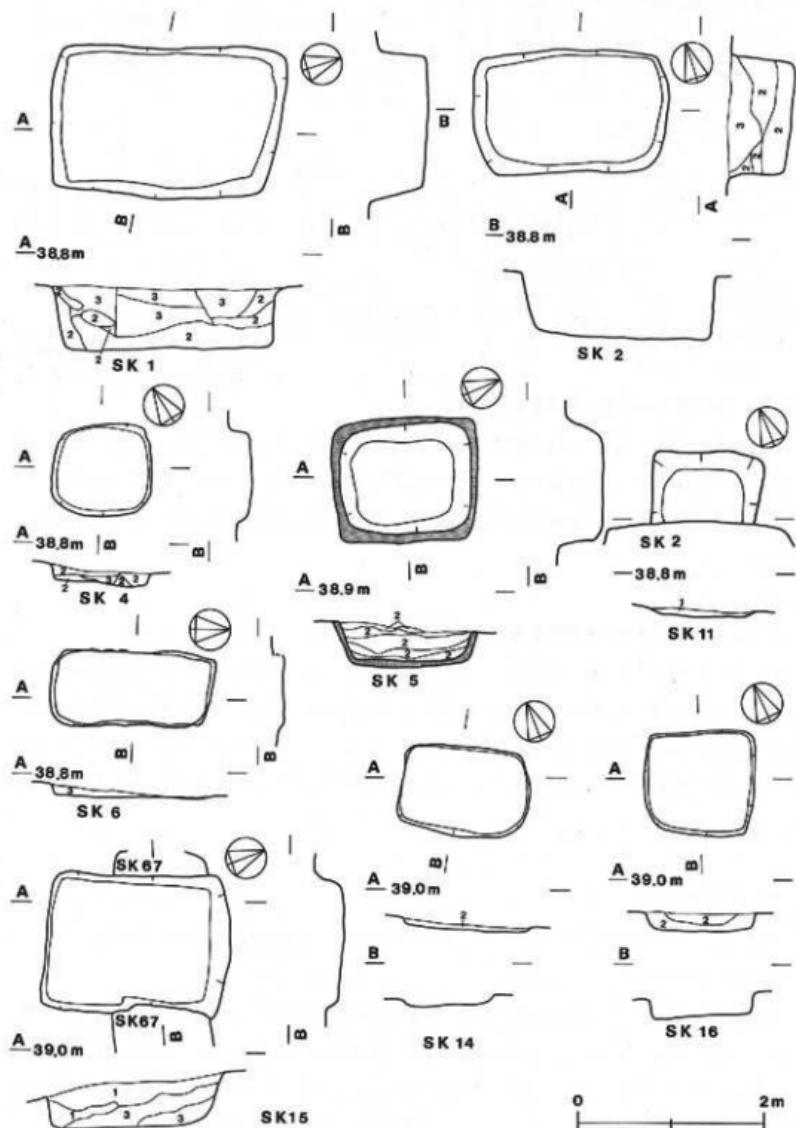
2 粘土貼り及びその可能性を有する土坑

粘土貼りを有する土坑は、10基検出されている。これらは、土坑内面の壁及び底面に粘土を貼り付けたもので、粘土の厚さは5～10cm程度である。しかし、粘土の残存状況の悪い土坑もみられ、これらは壁や底面の一部にブロック状にしか残っていない。ここでは、5基の土坑について記載する。なお、規模等については、掘り方の計測値を記載し、壁や底面の状況は、貼られている粘土の状況について説明した。

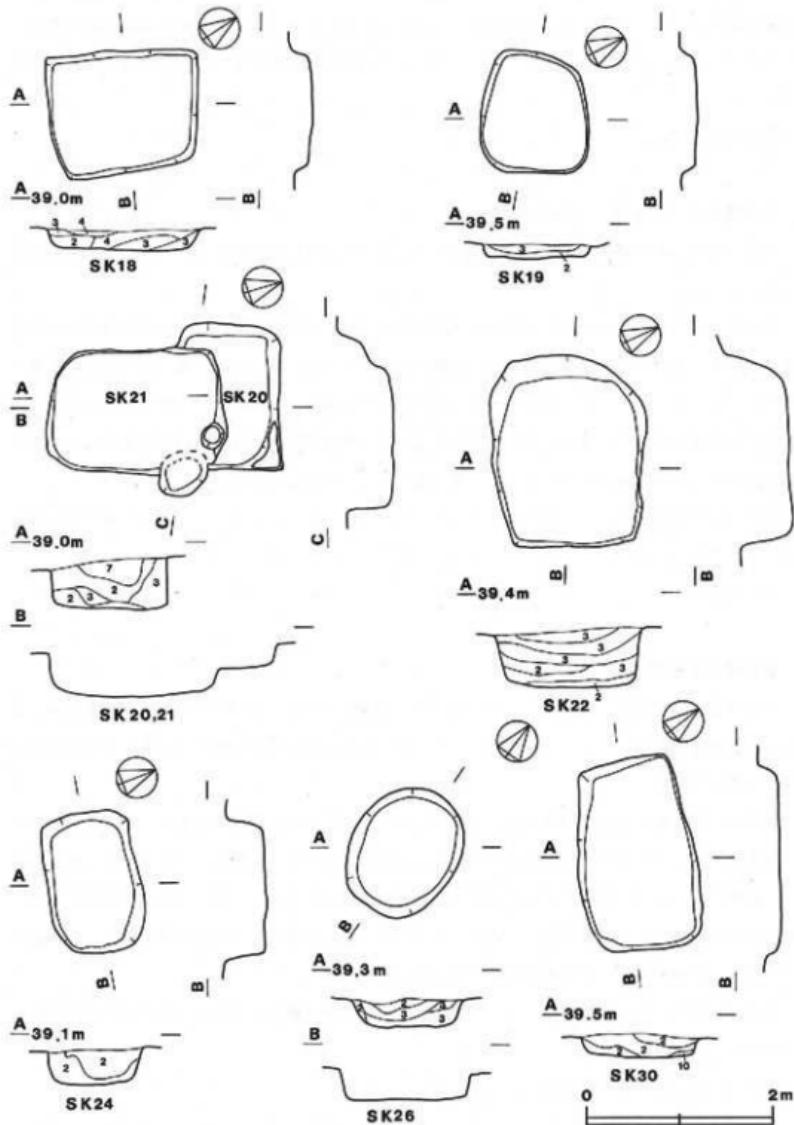
第5号土坑（第52図 P L 11）

本跡はC1c区を中心に確認された土坑である。東1mには、第2・11号土坑が存在しており、いずれも粘土貼りを有する土坑である。

平面形は、長軸1.55m・短軸1.34mのやや南北に長い長方形である。長軸方向は、N-20°-Eである。壁は外傾して立ち上がっているが、北及び西壁はやや急角度(80°)である。底面は平坦で、綺まりがない。壁・底面とも極めて丁寧に掘り込まれている。貼られている粘土は青灰色で、砂粒等の混入が少ない良質のものである。この粘土が、内側全面に貼り付けられており、厚さは5～9cmで、コーナー部が最も厚く14cmである。粘土の貼り付け方も非常に丁寧である。



第52図 土坑実測図（粘土貼り土坑—1）



第53図 土坑実測図（粘土貼り土坑—2）

覆土は5層に分けられ、上位2層はローム粒子・ハードロームブロックを含む褐色土、中位は青灰色粘土のブロックを多量に含む褐色土である。粘土ブロックは、本跡の天井部に貼ってあつたものが落下し、混入したと考えられる。下位の2層は砂粒・粘土小ブロックを含む褐色土である。

遺物は出土しない。

第16号土坑（第52図 P L 12）

本跡は C1c₁・C2c₁区に確認された土坑で、北に接して第21号土坑が、南0.5mには14号土坑が存在している。

平面形は、一辺の長さが1.14～1.18mの方形で、コーナー部はほぼ直角に掘り込まれているが、西側コーナーだけは丸みをおびている。長軸方向は、N-25°-Eである。壁はロームで、4壁とも垂直に立ち上がっている。底面は小さな凹凸がみられるが、全体的には平坦である。西側コーナー付近は攪乱を受け、本来の底面は消失している。壁及び底面には青灰色の粘土がブロック状に検出され、本跡が粘土貼りを有する土坑であったことが推定される。

覆土は自然堆積と思われ、褐色土が2層認められた。ともに、粘土ブロック・ハードロームブロックを含有している。

遺物は出土しない。

第58号土坑（第54図 P L 17）

本跡は B2c₁区を中心に確認され、第57号土坑と重複している。新旧関係は明確ではないが、本跡の底面が残ることから、本跡の方が新しいと思われる。本跡の西2mには、第7号掘立柱建物跡が存在している。

平面形は、長軸2.43m・短軸0.88mの南北に長い長方形である。長軸方向は、N-32°-Eである。壁は垂直に立ち上がっていたと思われるが、壁高が深い所でも12cmしかなく、はっきりしない。底面はロームで、平坦である。粘土は、壁面には残存していないが、底面は厚さ2～3cmに粘土が貼られていた。本跡に貼られている粘土は他の土坑と違い、黒灰色の砂粒を多く含む粘土で、青灰色の粘土と比較すると明らかに質の悪いものである。

覆土は1層だけで、粘土ブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土である。土質はやや粘性があり、軟らかい。

遺物は、縄文式土器片が9点覆土中から出土している。

第65号土坑（第55図 P L17）

本跡は C1b₃区に確認され、第69号土坑と重複している。本跡に貼られている粘土が、第69号土坑によって切られていることが観察できた。

平面形は、一辺の長さが1.62～1.70m の方形を呈しており、長軸方向は、N—20°—Eである。壁は、70°の角度で外傾して立ち上がっているが、北壁と東壁は第69号土坑によって切られているため、一部しか残存していない。壁高は45cmである。掘り方の底面はロームで、平坦である。底面のレベルは第69号土坑の底面と同一であり、底面での区別はつかない。粘土は青灰色の良質なもので、内側全面に貼られている。厚さはほぼ均一で、壁・底面とも8cm前後である。

覆土は4層に分けられる。上位2層はともに褐色土で、多量のローム粒子の他に、粘土ブロック・焼土粒子を含んでいる。下位2層はそれぞれ暗褐色土・褐色土で、粘土ブロック・ローム粒子を含んでいる。各層に含まれる粘土ブロックは、壁に貼られた粘土が良好な状態で残っていることから、天井を覆っていた粘土が崩落したものと思われる。

遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて13点で全て覆土中から出土している。

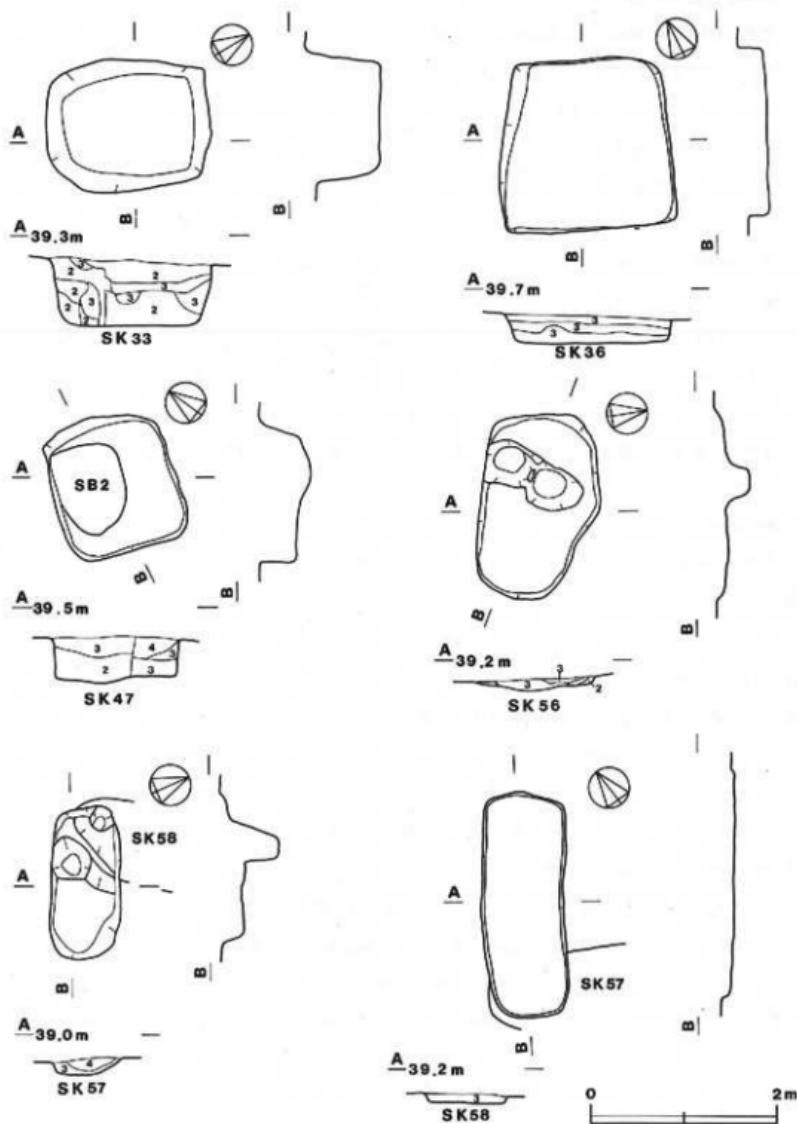
第71号土坑（第55図）

本跡は B1f₃区を中心に確認され、粘土貼りを有する土坑では最大のものである。本跡は南側に検出された第11号住居跡を切って掘り込まれている。

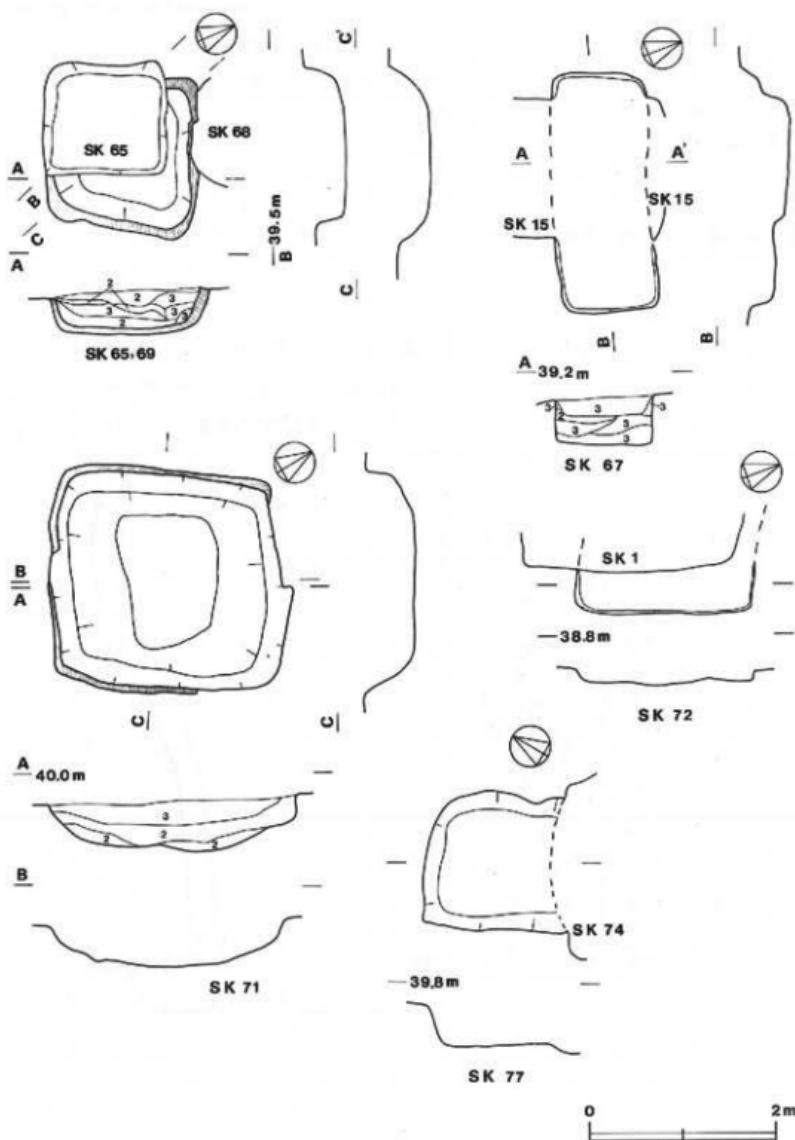
平面形は、一辺の長さが2.4～2.6m の方形を呈している。長軸方向は、N—33°—Eである。壁は、北壁及び西壁は垂直に立ち上がり、東壁と南壁は底面からゆるやかなカーブを描きながら50°前後の角度で立ち上がっている。壁高は、中央部で55cmである。底面は全体としては平坦であるが、南壁下部付近はやや凹凸がみられる。土坑内面に貼ってある粘土は青灰色を呈する良質なもので、砂粒等の混入物も少ない。北壁の一部には粘土が残っていないが、底面から粘土ブロックが検出されていることから、貼ってあった粘土が剥離したものと推定される。内面に貼り付けられた粘土は、調査終了後数週間で乾燥し、ヒビ割れが生じて次第に剥離していく。このことから、土坑が掘られ、粘土を貼り付けた後、直ちに開口部を粘土等で密閉したことが推定される。その後、長い年月の間に密閉部が崩落して土坑内に堆積し、現在まで粘土が残ったものであろう。本跡に限らず、粘土貼り土坑は開口部を密閉したものと思われる。

覆土は、3層に分けられる。上位の層はハードロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土で、中位はハードロームブロック・粘土ブロックを含む褐色土、下位はハードロームブロックを含む褐色土である。各層にハードロームブロックを含むことから人為的堆積ともとれるが、前述のように密閉部が次々に崩落し堆積していくものと思われる。

遺物は、縄文式土器片、土師器片合わせて86点が覆土中から出土している。

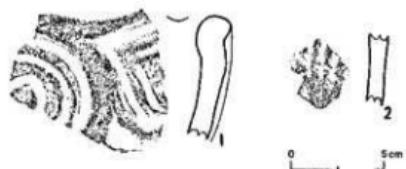


第54図 土坑実測図（粘土貼り土坑—3）



第55図 土坑実測図（粘土貼り土坑—4）

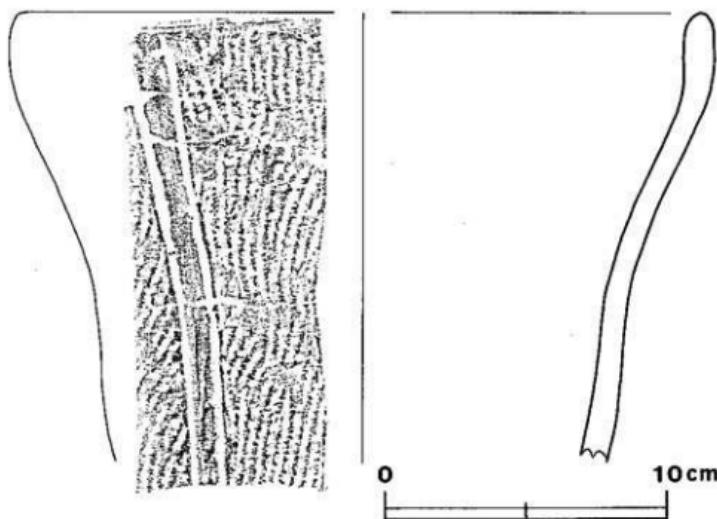
第56図の1は太目の沈線を弧状に施している。2は断面三角形の工具による刺突文が縦位に施されている。



第56図 第71号土坑出土土器拓影図

3 その他の土坑

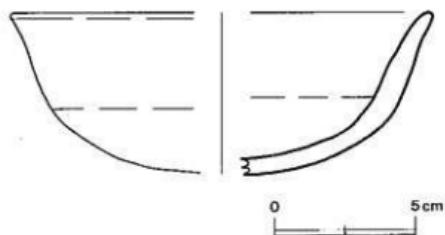
総数65基のうち、縄文時代の土坑5基、粘土貼りを有する土坑10基、地下式坑2基を除いた48基をその他の土坑とした。この中には掘立柱建物跡の掘方と思われるものや、粘土貼りを有する土坑と同時期・同性格と考えられるものも含まれている。各土坑の規模等については、土坑一覧表にまとめてあるので参照されたい。



第57図 第53号土坑出土土器実測図

出土土器観察表（第57図）

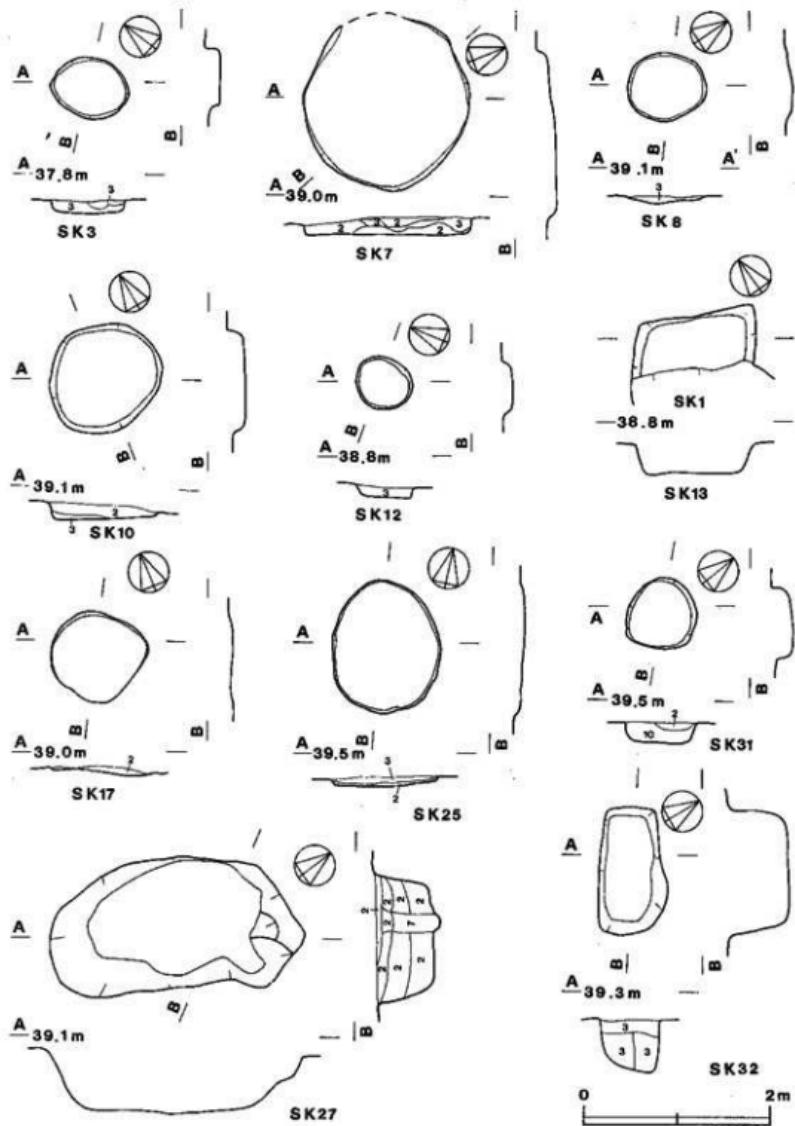
図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	深鉢形土器 縄文式土器	A (24.4) B (16.0)	キャリバー形を呈する深鉢で、 口縁端部はやや内傾する。 2本の平行沈線を1単位とする 文様が口縁部より垂下してい る。沈線間は削り消され、地文 は縄文である。		にぶい褐色 砂粒・石英 普通	10% P45 PL21



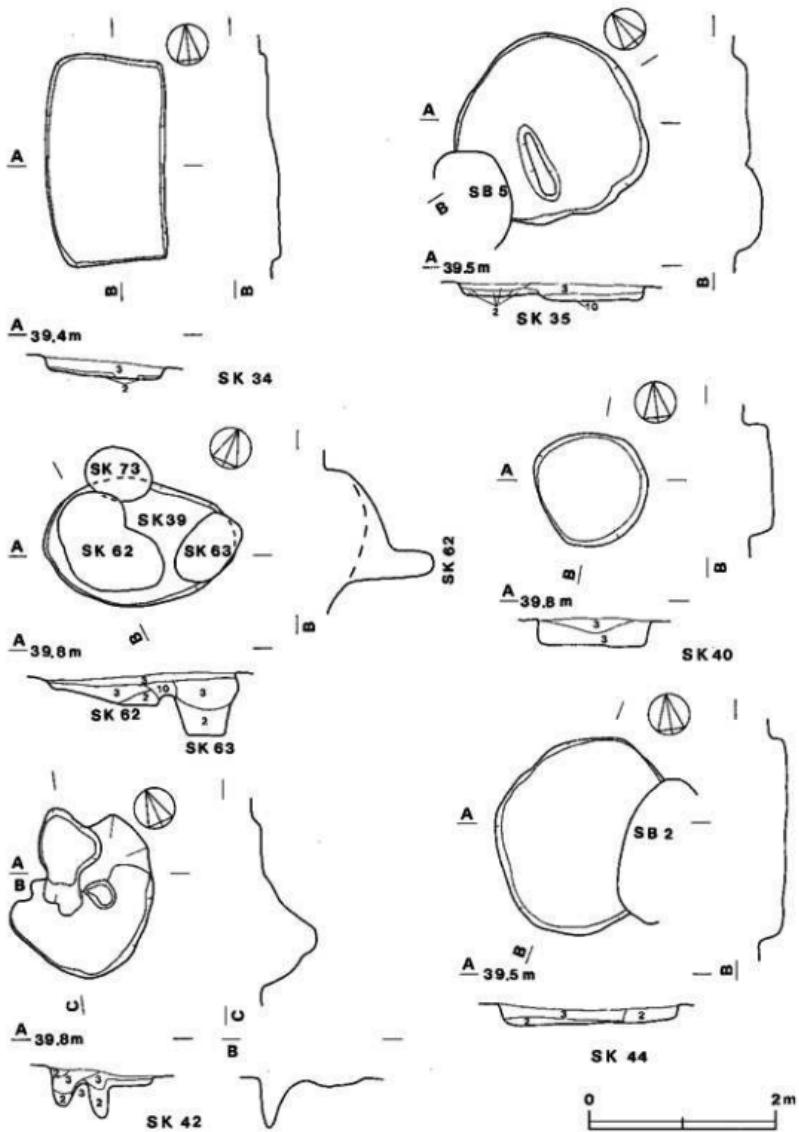
第58図 第32号土坑出土土器実測図

出土土器観察表（第58図）

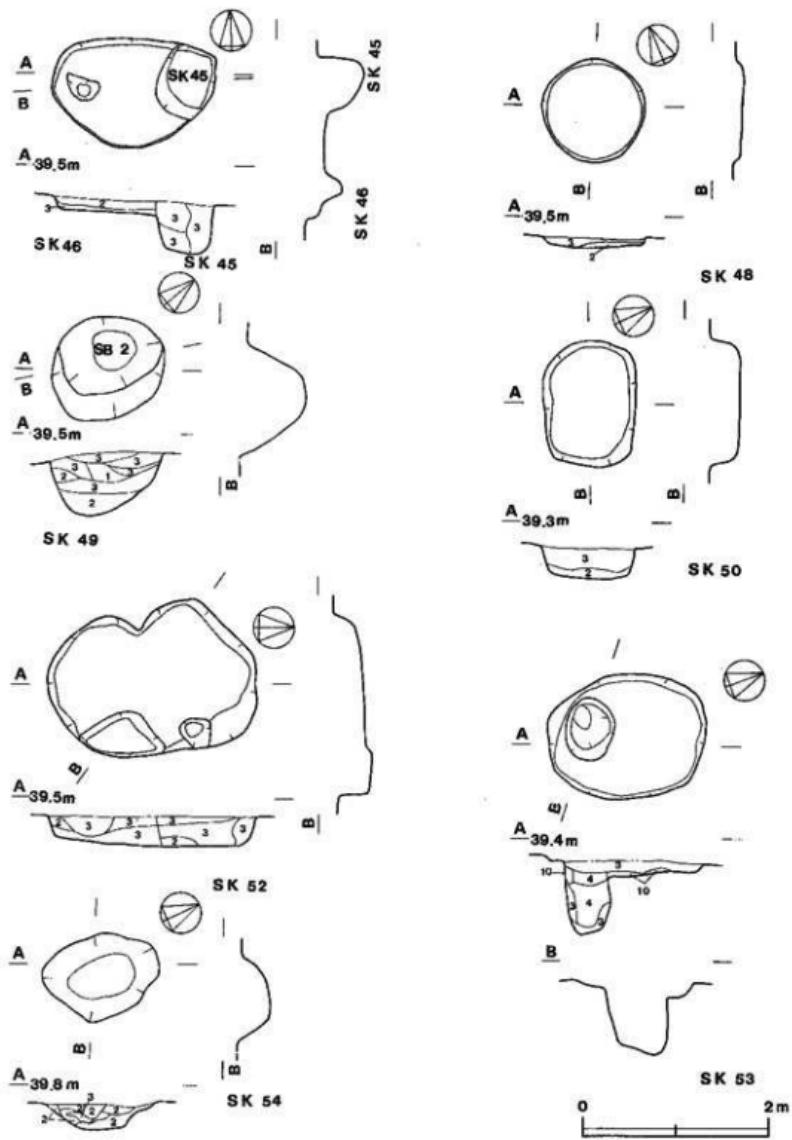
図中 番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	壺 土師器	A (15.0) B (5.7)	体部は内湾して立ち上がり、口 縁端部でわずかに外反する。体 部中位に弱い棱をもつ。	口縁部ヨコナデ、外 面ヘラケズリ、内面 ヘラミガキ。	赤色 砂粒 普通	25% P42



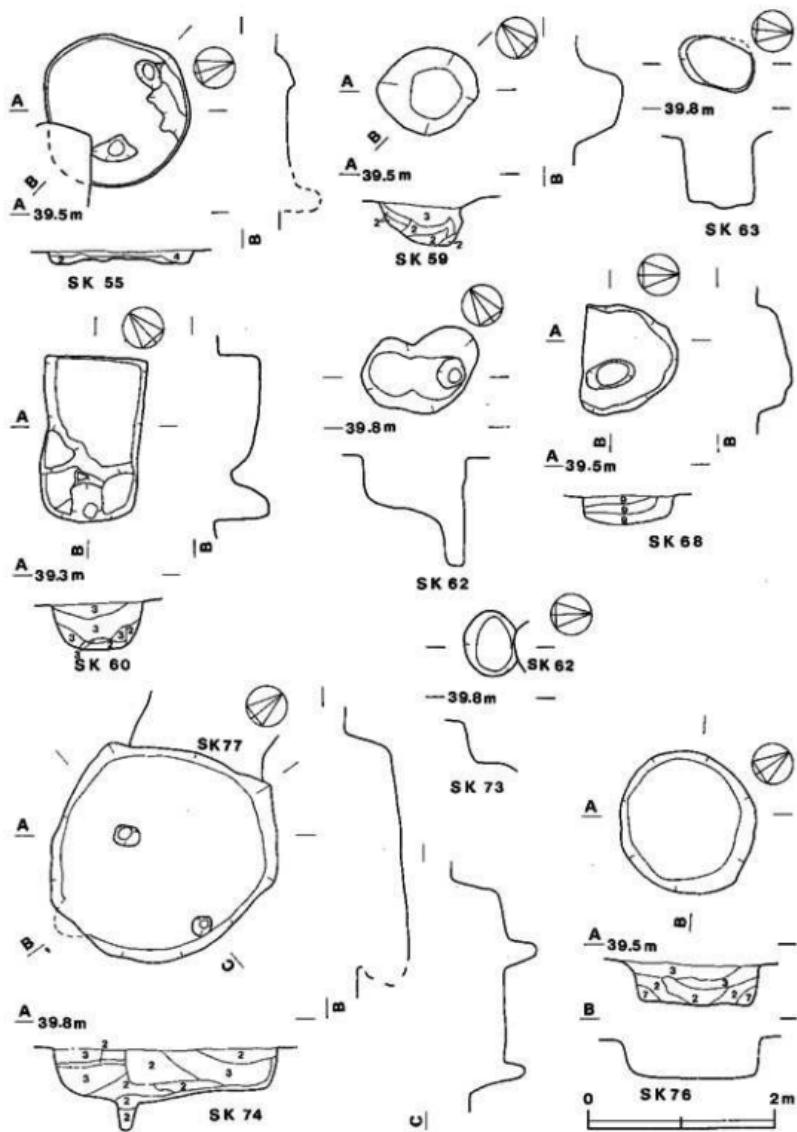
第59図 土坑実測図（1）



第60図 土坑実測図（2）



第61図 土坑実測図(3)

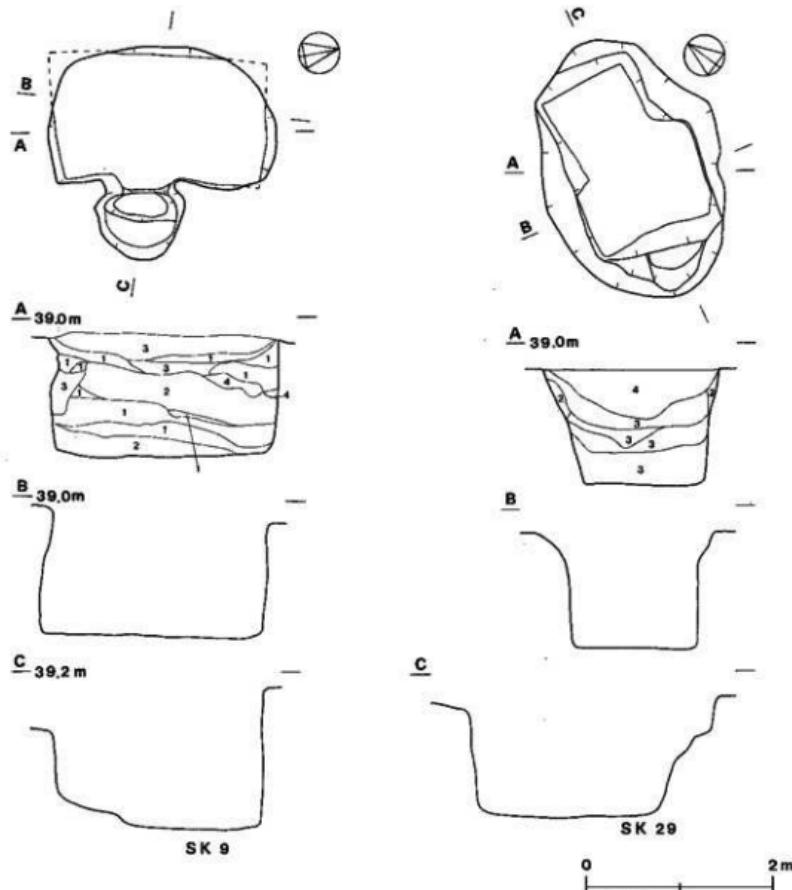


第62図 土坑実測図（4）

第4節 地下式坑

当遺跡で検出された地下式坑は、2基である。調査に際しては、他の土坑と同様に行ったため、同一記号を使用し、番号も通し番号になっている。ここでは、SK9を第1号地下式坑、SK29を第2号地下式坑として記載する。

第1号地下式坑 (SK9・第63図 PL12)



第63図 第1・2号地下式坑実測図

本坑は C1c₂ 区に確認され、第 1 号住居跡を切って掘り込まれている。主軸方向は N-76°-W で、主軸長は 2.3m であり、豊坑の位置は東側にある。

豊坑は確認面から 0.89m の深さまで掘り込まれており、底面は西に傾斜している。平面形は、長径 0.86m・短径 0.72m の稍円形を呈し、長軸は主軸と直交している。主室は、豊坑の西側に長方形のロームの小壁を隔ててさらに 20cmほど掘り込まれている。平面形は、長軸 2.27m・短軸 1.35m の長方形を呈し、長軸は主軸と直交している。底面は、豊坑・主室とも砂質ロームで、硬く締まっている。

壁は、豊坑では 85°の傾斜で立ち上がり、主室では垂直あるいはオーバーハングして立ち上がっている。特に主室奥壁（西壁）は、底面から 70cmほどは内湾きみに立ち上がり、その地点からさらに 70cm 上部まではオーバーハングして立ち上がっていることから、この付近で天井へ移行していたものと考えられる。壁面の一部に掘り込み時の工具痕が残っていたが、工具の形状や規模等は明確にできなかった。

覆土は自然堆積であるが、豊坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、大きく 7 層に分けられ、下位にぶい黄褐色土・褐色土が堆積し、その上におよそ 20cm の厚さでローム層がのっている。このローム層は天井部が崩壊し、落下してきたものと考えられる。ローム層の上位に、褐色土・暗褐色土が交互に堆積しているが、それぞれロームブロックを多量に含んでいることから、天井崩壊後も残った壁等が除々に落下し、堆積していったことがうかがえる。

遺物は、土師器片、礫等合わせて 192 点が覆土中から出土している。

第 2 号地下式坑（SK29・第 63 回 PL14）

本坑は B2i₂ 区に確認され、西 1m には第 5・10 号住居跡が存在している。主軸方向は N-32°-E で、主軸長は 2.9m であり、豊坑の位置は北東側である。

豊坑は確認面から 1.2m の深さまで掘り込まれており、平面形は一辺 1.17m の正方形を呈している。底面は極めて平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、豊坑の南西に不整長方形状に掘られており、底面の長軸は 1.37m、短軸は 1.06m である。長軸は、主軸と直交している。豊坑・主室とも壁はロームで、硬く締まっている。

壁は、豊坑では約 80°の角度で外傾して立ち上がり、主室では東・西両壁がほぼ垂直に立ち上がり、主室の南壁（奥壁）は、約 70°の角度で立ち上がっているが、底面から 60cm の部分まで本来の壁が残り、それより上部は第 8 号掘立柱建物跡の掘方と重複しているため明確ではない。

覆土は自然堆積で、5 層に分けられる。下位の 3 層はハードロームブロックを多量に含む暗褐色土・極暗褐色土で、硬く締まっている。上位の 2 層は黒褐色土・暗褐色土で、それぞれ焼土粒

子・炭化粒子を含んでいる。下位の層に含まれるハードロームブロックは、主室の天井が崩壊し、落としたものと思われる。

遺物は、土師器片を主に124点が覆土中から出土している。



第64図の1は4本の沈線が横位に施されている。2・3は懸垂文が施されている。

第64図 第2号地下式坑出土土器拓影図

土坑出土遺物（第65・66図）

第1号土坑（1～3）

1・2は太い沈線で幾何学的な文様を描き、内部には縄文を充填している。3は懸垂文が施されている。

第2号土坑（4・5）

4は懸垂文が施されている。5は縄文だけが施されている。

第7号土坑（6・7）

6は3本の沈線を横位に施し、下部に刺突文を加えている。7はアナグラ属の貝殻腹縁文が施されている。

第9号土坑（8～14）

8は太い降・沈線で区画し、内部に縄文を充填している。9は隆帯を横位に貼り、上部に沈線、下部に縄文を充填している。10は縄文だけが施された口縁部片である。11・13は3本の平行沈線が施されている。12・14は懸垂文が施されている。

第15号土坑（15）

15は横位の沈線で文様帶を区画し、上部は磨り消し、下部は縄文を充填している。

第18号土坑（16・17）

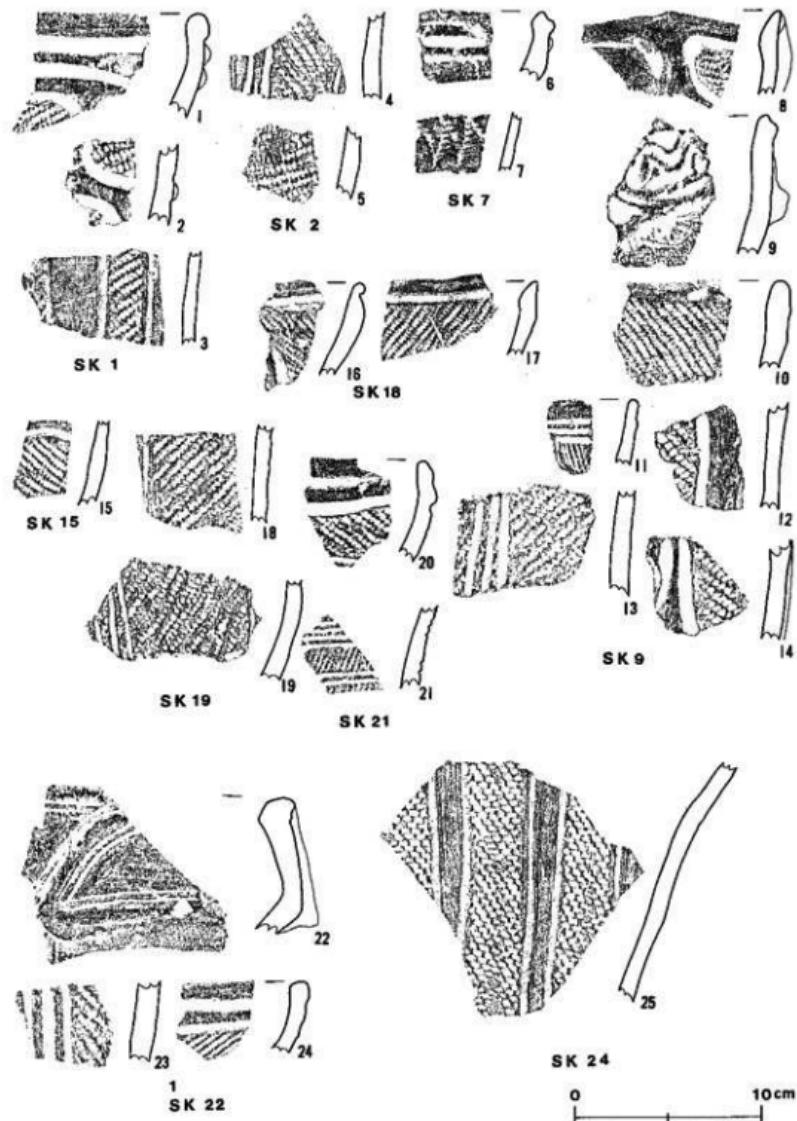
16・17とも口唇部直下に沈線を施し、下部は縄文が施されている。

第21号土坑（18～21）

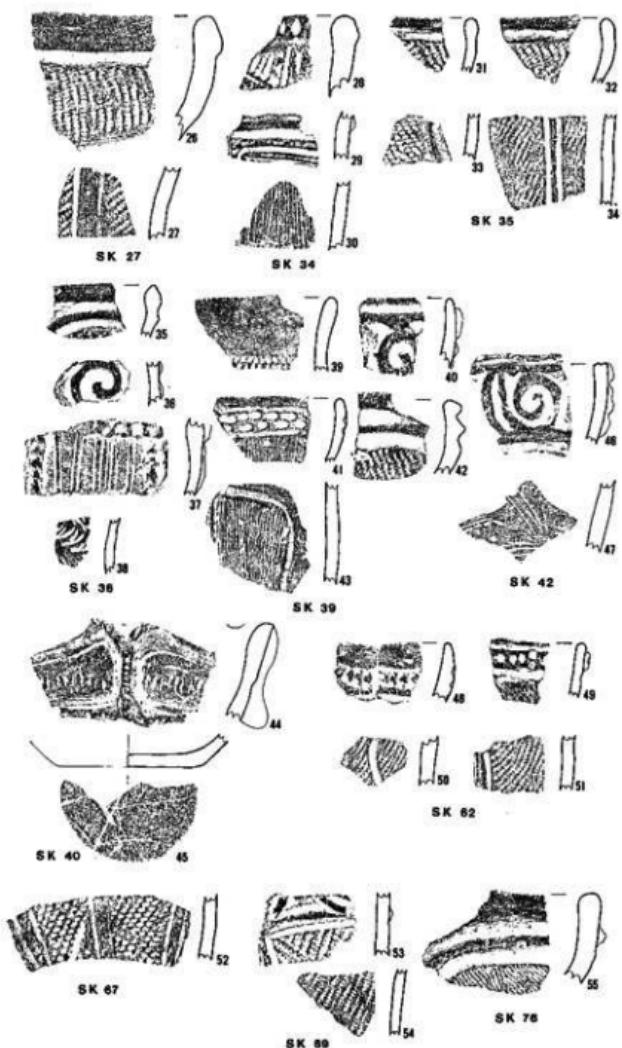
18・20は縄文を施した後、縦位の沈線を施している。19は沈線で文様帶を区画し、内部に縄文を充填している。21は数本の平行沈線を横位に施している。

第22号土坑（22～24）

22は結節沈線文で三角形の文様を構成している。23は懸垂文が施されている。24は口縁部に平行沈線を施し、下部に縄文を施している。



第65図 土坑出土土器拓影図(1)



0 10 cm

第66図 土坑出土土器拓影図(2)

第24号土坑（25）

25は数条の懸垂文が施されており、地文は縄文である。

第27号土坑（26・27）

26は横位の太い沈線で文様帯を区画し、上部は無文、下部は縄文が施されている。27は懸垂文が施されている。

第34号土坑（28～30）

28は刺突文だけが施された口縁部片である。29は数本の沈線を施し、沈線間に刺突を加えている。30は糸線文が縦位に施されている。

第35号土坑（31～34）

31・32は口縁部に浅い沈線を施し、下部は縄文が施されている。33は弧状の隆・沈線が施されている。34は平行沈線が縦位に施され、地文は縄文である。

第36号土坑（35～38）

35・36は隆・沈線を弧状あるいは渦巻き状に施している。37は隆帶を四角形に貼り付け、隆帶上に刺突を加えている。38は貝殻腹縁文が施されている。

第39号土坑（39～43）

39は連続刺突文で口縁部文様帯を区画し、上部は無文である。40は口唇部に横位の沈線、下部に弧状の沈線を配している。41は平行する沈線を横位に施し、沈線間は梢円形の刺突文を充填している。42は極めて太い沈線を2本横位に施し、下部は縄文が施されている。43は沈線及び糸線文が施されている。

第40号土坑（44・45）

44は波状を呈する口縁部で、隆帶で文様帯を区画し、内部は連続刺突文・爪形文が充填されている。45は底部片で、木葉痕が見られる。

第42号土坑（46・47）

46は渦巻き状の沈線で文様を構成している。47は3～4本一組の平行沈線が斜位に施されている。

第62号土坑（48～51）

48・49は2本の沈線を横位に施し、沈線間は刺突文を充填している。50・51は縄文を施した後沈線を加えている。

*第67～76号土坑については、94ページを参照されたい。

土坑一覧表

番号	位 置	長径(軸)方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆 土	備 考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	Cld _s	N-20° E	長方形	2.46×1.60	65	外傾	平坦	A	粘土貼り 73点
2	Cld _s	N-74°-W	〃	2.10×1.33	68	〃	〃	〃	粘土貼り 41点
3	Clc _s	N-32° - W	橢円形	0.81×0.65	12	垂直	〃	N	5点
4	Clc _s	N-56°-W	方 形	1.07×1.00	13 20	外傾	〃	A	粘土貼り
5	Clc _s	N-20° - E	長方形	1.55×1.34	45	〃	〃	N (A)	粘土貼り
6	Clc _s	N-0°	〃	1.72×0.83	20	〃	〃		
7	Clc _s		円 形	1.79	17	〃	〃	A	27点
8	Cld _s	N-27°-E	橢円形	0.84×0.75	5	〃	圓状		1点
9	Clc _s							N	地下式坑 192点
10	Clc _s		円 形	1.15	15	外傾	平坦	〃	
11	Clc _s	(N-19°-E)	(方 形)	1.20×(?)	12	〃	〃		粘土貼り
12	Clc _s	N-13°-E	橢円形	0.63×0.55	11	〃	〃	N	
13	Clc _s		(方 形)	1.29×(0.55)	33	〃	〃		
14	Clc _s	N-58°-W	長方形	1.39×0.96	8	〃	〃		2点
15	Clb _s	N-21°-E	〃	1.73×0.68	48	垂直	〃	A	35点
16	Clc _s	N-25°-E	方 形	1.18×1.14	24	〃	〃	〃	粘土貼り

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規 模		縁面	底面	覆土	備 考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
17	C1b ₃	N-47°-E	不整方 形	0.94×0.93	4	平坦			1点
18	C2b ₁	N-29°-E	長方形	1.60×1.28	23	外傾	〃	N	23点
19	C2b ₁	N-56°-W	不整方 形	1.28×1.17	20	〃	〃	〃	
20	C1b ₆	N-73°-W	長方形	1.55×1.12	28	〃	〃		
21	C1b ₆	N-20° E	〃	1.85×1.31	53	垂直	〃	A	46点
22	C1b ₆	N-74°-W	不整長方形	2.00×1.55	110	〃	〃	N	121点
24	C2a ₁	N-80°-W	長方形	1.52×0.99	43	〃	〃	A	10点
25	C1a ₃	N-14°-W	橢円形	1.43×1.15	8	外傾	〃	N	9点
26	B2j ₃	N-11°-W	〃	1.42×1.15	32	〃	〃	A	5点
27	B2j ₁	N-29°-E	不整橢円形	2.65×1.40	65	〃	〃	N	46点
29	B2i ₁						〃	地下式坑	124点
30	B1j ₆	N-59°-W	長方形	2.03×1.25	22	外傾	平坦	A	43点
31	B1j ₆		不整円形	0.75	22	〃	〃		
32	B2j ₂	N-64° W	長方形	1.38×0.63	65	垂直	〃	A 挖方	40点
33	B2i ₁	N-31°-E	〃	1.76×1.42	79	外傾	〃	〃	53点
34	B2i ₂	N-6°-E	〃	2.23×1.29	20	〃	〃	〃	56点

番号	位 質	長径(軸)方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
35	B2h ₁		不 整 円 形	2.05	15	外傾	凹凸	N	64点
36	B1h ₃	N-20°-E	方 形	1.83×1.83	30	垂直	平坦	A	131点
39	B1h ₃		(橢円形)						掘方の切り合が多い。 113点
40	B1g ₃		円 形	1.21	29	垂直	平坦	N	53点
42	B1g ₃		不定形	1.86×1.58	58	外傾	皿状	〃	縄文期の土坑 47点
44	B2e ₂	N-32°-E	橢円形	2.18×1.92	24	垂直	平坦	〃	縄文期の土坑 10点
45	B2c ₂	N-90°	不定形	1.76×1.16	16	外傾	凹凸	A	13点
46	B2c ₂		(橢円形)					N	
47	B2d ₂	N-37°-E	方 形	1.48×1.36	43	外傾	平坦	A	83点
48	〃		円 形	1.10	10	〃	〃		1点
49	B2e ₁	N-19°-E	橢円形	1.26×1.10	74	〃	皿状		縄文期の土坑 18点
50	B1c ₃	N-62°-W	長方形	1.35×0.98	35	垂直	平坦	A	20点
52	B2c ₁	N-21°-W	不定形	2.21×1.58	32	外傾	〃	〃	121点
53	B2b ₂	N-7°-E	橢円形	1.71×1.34	17	〃	〃	N	33点
54	B1f ₇	N-8°-E	不 整 橢円形	1.25×0.88	35	〃	皿状	〃	77点

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
55	B2c ₁		円 形	1.63	14	外傾	凹凸	N	6点
56	B2b ₃	N-68°-W	不 整 長方形	2.00×1.25	13	〃	〃	A	粘土貼り 11点
57	B2c ₄	N-66°-W	長方形	1.63×0.75	24	〃	〃	〃	2点
58	B2c ₁	N-32°-E	〃	2.43×0.88	12	〃	平坦		粘土貼り 9点
59	B1j ₉	N-45°-W	橢円形	1.09×0.94	53	〃	〃	A	掘方 3点
60	B2b ₃	N-44°-E	長方形	1.77×1.04	50	垂直	凹凸	N	17点
62	B1h ₄	N-75°-E	不定形	1.03×0.67		〃			掘方 65点
63	B1h ₄	N-15°-E	橢円形	0.83×0.51	82	外傾	平坦		掘方 10点
65	C1b ₉	N-20°-E	方 形	1.70×1.62	45	〃	〃	A	粘土貼り 13点
67	C1b ₉	N-21°-E	長方形	1.02×1.02	28	〃	〃		76点
68	C1a ₉	(N-21°-E)	(橢円形)	1.16×(1.00)	20	〃	圓状	N	30点
69	C1b ₉	N-20°-E	方 形	1.32×1.22	40	〃	平坦		
71	B1f ₈	N-33°-E	〃	2.60×2.40	55	〃	〃	A	粘土貼り 86点
72	C2d ₁	(N-19°-E)	(方 形)	1.36	18	〃	〃		
73	B1h ₉	(N-84°-W)	(橢円形)	0.72×(0.55)	44	〃	凹凸	(A)	掘方 3点
74	B1h ₇		円 形	2.32	51	〃	平坦	(N)	南壁はオーバーハングしている。縄文期の土坑 93点

番号	位 置	長径(軸)方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
76	B1a	(N-26°-W)	円 形	1.65×1.49	46	外傾	平坦	N	縄文期の土坑 181点
77	B1g	(N-27° W)	(長方形)	(1.65)×1.49	41	〃	〃		

第5節 掘立柱建物跡

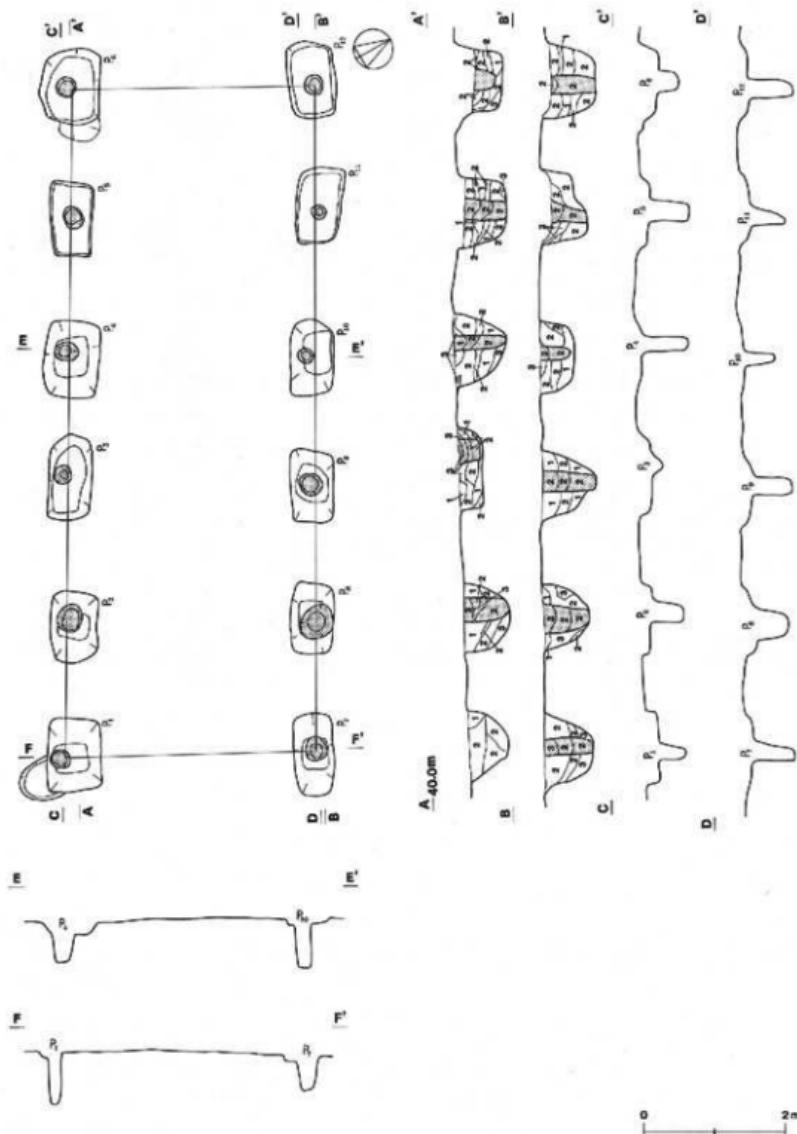
第1号掘立柱建物跡 (第67図 PL 2)

本跡はB1e₂区を中心に確認され、5間(9.52m)×1間(3.47m)の東西棟の建物である。本跡は、他の遺構との重複はみられず、単独で確認された。なお、棟通りが東西方向になる遺構は本跡の他に第6号掘立柱建物跡がある。柱間寸法は桁行が1.85mであるのに対して、梁行は3.45mであるが、東妻が3.65mとやや広くなっている。柱掘方は、長軸1.0~1.1m、短軸0.6~0.8mの長方形で、深さは65~70cmである。P₁₀は例外で、深さは32cmしかない。壁は外傾して立ち上がっている。底面は、平坦なものとU字状を呈するものがある。P₂・P₄・P₅は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は、各柱掘方で確認され、径20~35cm、深さ34~78cmである。柱掘方内覆土は、ハードロームブロックを多量に含む黄褐色土と褐色土が互層を成しており、おおむね硬く締まっているが、P₃・P₆・P₈・P₉は中間に軟らかな層が認められる。

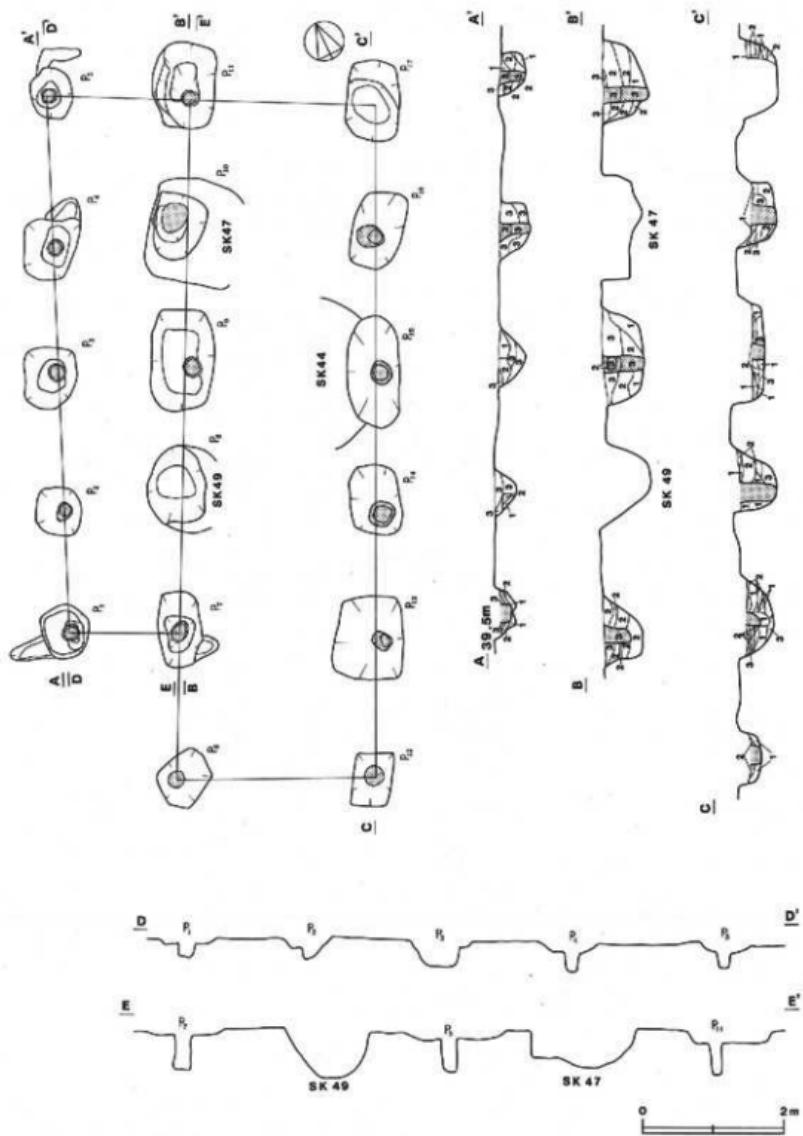
第2号掘立柱建物跡 (第68図 PL 3)

本跡はB2e₂区を中心に確認され、5間(9.65m)×2間(4.5m)の南北棟の建物で、西側に北妻から4間(7.14m)の廊がついている。本跡は、第18号住居跡、第44・47・49号土坑、及び第6号掘立柱建物跡と重複している。各遺構のうち、新旧関係が明確に観察できたのは第47号土坑で、その覆土を切って本跡の柱掘方が掘り込まれている。

柱間寸法は、桁行が1.7~2.16m、梁行が北妻で2.58m、南妻で2.91mで、南側ほど広くなっている。廊の柱間寸法は、1.75~2.16mで、北1間が2.16mと最も広い。柱掘方は、P₁₃が最も大きくて1.2×0.97mの不整形を示すが、他は0.75×1.1mの隅丸長方形である。深さは23~86cmである。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、平坦なものが多いため、P₁₃・P₁₄はU字状である。柱痕跡は、P₄・P₁₀を除き確認され、径25~30cm・深さ45~65cmである。柱痕の底面は柱掘方底面と一致するものが多いが、P₁・P₁₃のように柱掘方の底面に黄褐色土を埋め戻し、その上に柱を立



第67図 第1号掘立柱建物跡実測図



第68図 第2号掘立柱建物跡実測図

てる場合や、逆に柱掘方底面より数cm掘り凹め、そこに柱を立てたと思われる $P_4 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{12}$ のような例もみられる。柱掘方内覆土は、ハードロームブロックを多量に含む黄褐色土、褐色土、暗褐色土が10cm内外の厚さで互層を成しており、硬く締まっている。

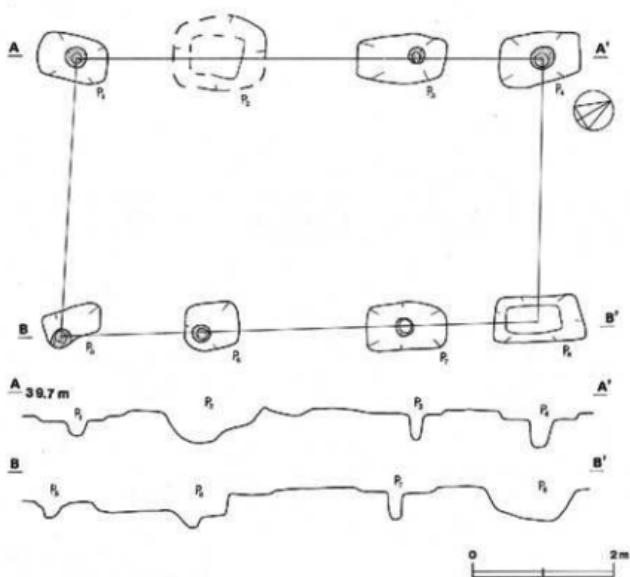
柱掘方内側の地山の表面は他の地点よりも明らかに硬く、意図的につき固めたことが推定できる。

第3号掘立柱建物跡（第69図 PL3）

本跡は Blg.区を中心に確認され、3間(6.64m)×1間(3.95m)の南北棟の建物である。本跡は、第39・40・62・63・73号の各土坑と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。なお、棟通りが平行する構造として、第5号掘立柱建物跡が東側5mの地点に確認されている。

柱間寸法は、桁行が南北の1間が1.81~2.01mで、中央の1間はやや広く2.92mである。梁行は、北妻が3.74m、南妻が3.95mで南がやや広くなっている。このように、各柱を南北に寄せ、中央の1間を広くとった構造であったことがわかる。柱掘方は、0.7×1.15m内外の隅丸長方形である。 $P_2 \cdot P_8$ は土坑として調査したため、柱掘方としての規模は不明である。柱痕跡は、 $P_2 \cdot P_8$ を除く柱掘方で確認され、径25~30cm、深さ41~52cmである。各柱痕跡は柱掘方のほぼ中央に確

認されたが、 P_8 は南東の壁に寄って確認されている。柱掘方内覆土は、黒褐色土とハードロームブロックの混入した層が観察され、かつ硬く締まっていることから、簡単な版築がなされていることが推定できる。



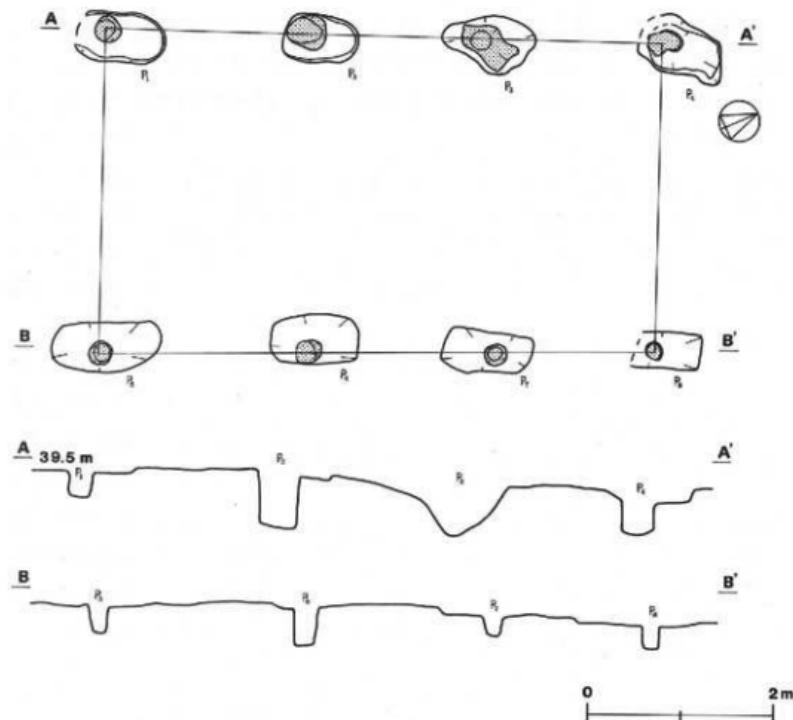
第69図 第3号掘立柱建物跡実測図

第4号掘立柱建物跡（第70図 P L 4）

本跡はB1b₀区を中心に確認され、3間(5.98m)×1間(3.32m)の南北棟の建物である。本跡は、第3号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡に軒を接して建てられているが、柱掘方の重複は認められない。なお、本跡の北5.5mには棟通りを一直線にする第2号掘立柱建物跡がある。

柱間寸法は、桁行西側は1.93～2.05m、同東側は北1間が1.72mで、他は2m強である。梁行は、北妻が3.32m、南妻が3.49mで南が広くなり、他の遺構と同じ傾向をもっている。柱掘方は、0.55×0.95m内外の隅丸長方形である。柱痕跡は、全ての柱掘方で確認され、径15～25cm・深さ25～65cmである。 P_3 ・ P_4 ・ P_6 の柱痕跡は、柱掘方の壁に寄って確認された。柱掘方内覆土は、黒色土とハードロームブロックの混入した層が互層をなして硬く縮まっており、版築がなされていると思われる。

柱掘方の内・外側のローム表面も硬く縮まっていることが観察できた。他の地点のローム表面



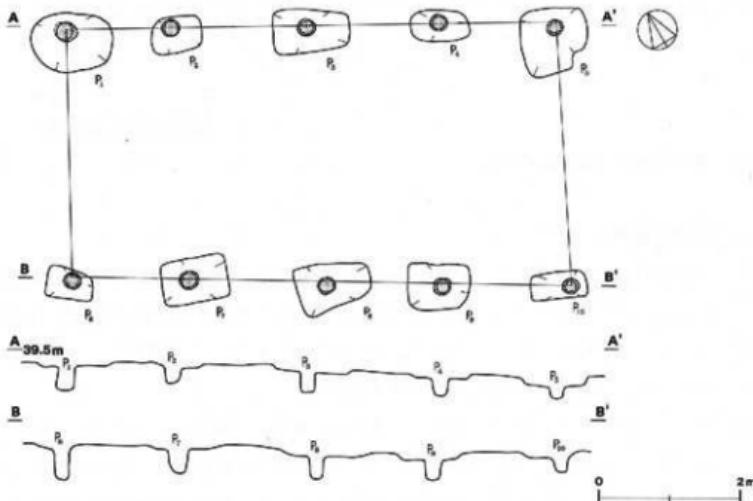
第70図 第4号掘立柱建物跡実測図

は比較的軟らかいことから、建築を始める前の段階で、地山をつき固めて、整地したことが考えられる。

第5号掘立柱建物跡（第71図 P L 4）

本跡はB2b₁区を中心に確認され、4間(7.1m)×1間(3.6m)の南北棟の建物である。本跡は、第34・35号土坑、第18号住居跡と重複しており、第18号住居跡よりは明らかに新しいが、2基の土坑との新旧関係は明確でない。なお、本跡の棟通りと平行する建物として、第3・7号掘立柱建物跡がある。

柱間寸法は、梁行は3.6mであるが、桁行は不規則で、1.50~1.94mの巾がある。柱掘方は、1.1×0.6mのものと、0.7×0.5mのものとの2種がみられ、各々長方形である。P₁は、別の柱掘方が重複している。柱痕跡は、全ての柱掘方で確認され、径25cm・深さ21~41cmである。各柱痕跡は、柱掘方のほぼ中央に位置し、かつ一直線上に並んでいる。柱掘方内覆土は明確にはできなかったが、版築がなされた様子は認められた。



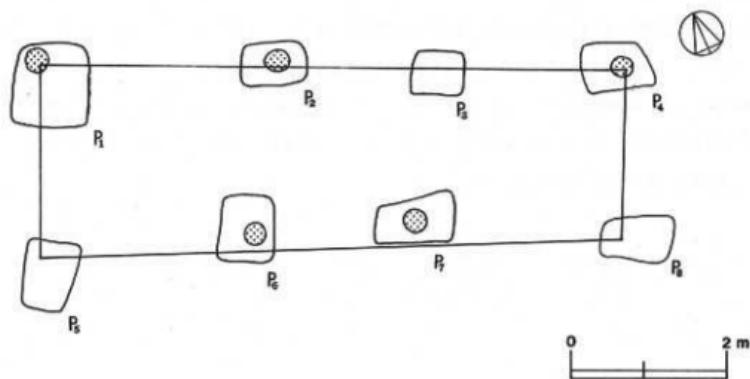
第71図 第5号掘立柱建物跡実測図

第6号掘立柱建物跡（第72図）

本跡はB2c₁区を中心に確認され、3間(7.4m)×1間(2.2m)の東西棟の建物である。本跡は、

第52号土坑及び第2号掘立柱建物跡と重複している。P₁が第52号土坑を切っていることは観察できたが、第2号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。なお、本跡の棟通りと平行な建物として、第1号掘立柱建物跡がある。

柱間寸法は、桁行が中央の1間だけ2mで、他は2.4~2.8mである。梁行は、1.9~2.2mである。柱掘方は、0.9×0.5m内外の長方形で、P₅・P₆の2か所は長軸方向が棟通りと直交している。柱痕跡は、P₁・P₂・P₄・P₆・P₇の柱掘方で確認された。柱掘方内覆土は、硬く締まっている。

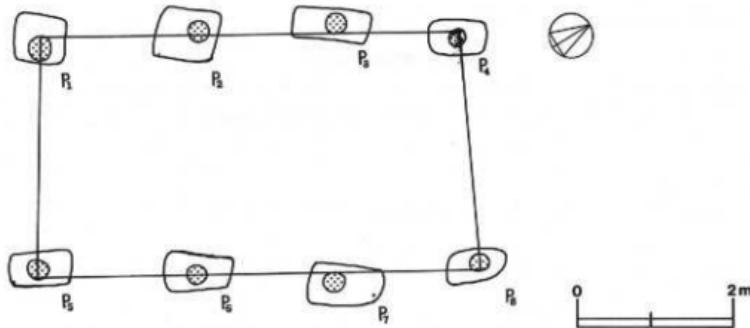


第72図 第6号掘立柱建物跡実測図

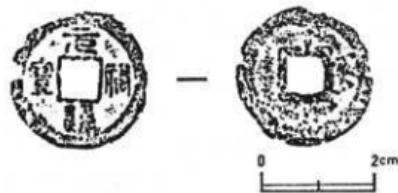
第7号掘立柱建物跡（第73図）

本跡はB2b₃区を中心に確認され、3間(5.4m)×1間(2.9m)の南北棟の建物である。当遺跡では、最も北に位置する遺構である。本跡は、第56・60号土坑と重複している。第56号土坑は粘土貼りの土坑で、この粘土が残っていたことから、土坑の方が新しいことが判明した。なお本跡の南2mには棟通りを直交する第6号掘立柱建物跡がある。

柱間寸法は、桁行が中央の1間は、1.8mで、南・北の妻側は2mである。梁行は、2.8~3.3mと不規則である。柱掘方は、0.8×0.5m内外の長方形であるが、P₇は1.3×0.5mと、南北に長く掘り込まれている。柱痕跡は、全ての柱掘方で確認されている。柱掘方内側のローム表面は、つき面めたように硬く締まっている。



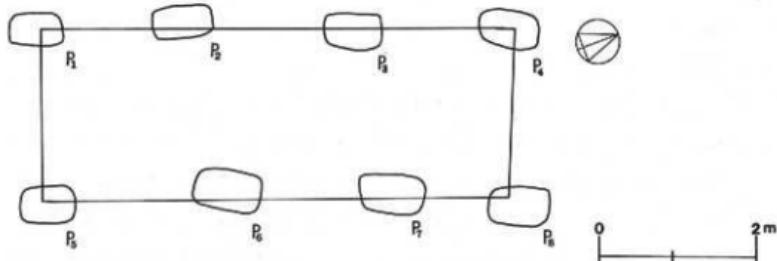
第73図 第7号掘立柱建物跡実測図



第74図 第7号掘立柱建物跡出土貨幣拓影図

第8号掘立柱建物跡（第75図）

本跡はB2j区を中心に確認され、3間(6.1m)×1間(2.2m)の南北棟の建物である。本跡の棟通りは、第2号掘立柱建物跡のそれとほぼ平行である。



第75図 第8号掘立柱建物跡実測図

柱間寸法は、桁行、梁行とも 2 m 等間である。柱掘方は、 0.7×0.5 m 内外の隅丸長方形である。柱掘方内覆土や柱痕跡等については明らかでない。

掘立柱建物跡一覧表

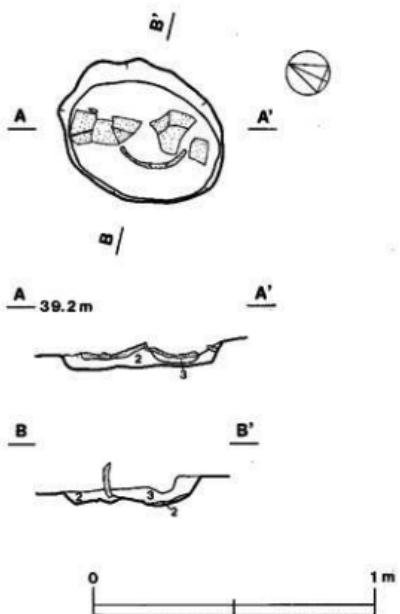
番号	桁×梁(間)	桁行長×妻通長(m)	長方形度	床面積(m ²)	主軸方向	備考
1	5 × 1	9.52 × 3.47	2.7	33.03	N-59°W	
2	5 × 2	9.65 × 4.50	2.1	43.43	N-26°E	S B-6と重複
3	3 × 1	6.64 × 3.95	1.7	26.23	N 33°E	
4	3 × 1	5.98 × 3.32	1.8	19.85	N-25°E	S A-1と重複
5	4 × 1	7.10 × 3.60	2.0	25.56	N-35°E	S A-1と重複
6	3 × 1	7.40 × 2.20	3.4	16.28	N-63°W	S B-2と重複
7	3 × 1	5.40 × 2.90	1.9	15.66	N-33°E	
8	3 × 1	6.10 × 2.20	2.8	13.42	N 20°E	

第6節 その他の遺構と遺物

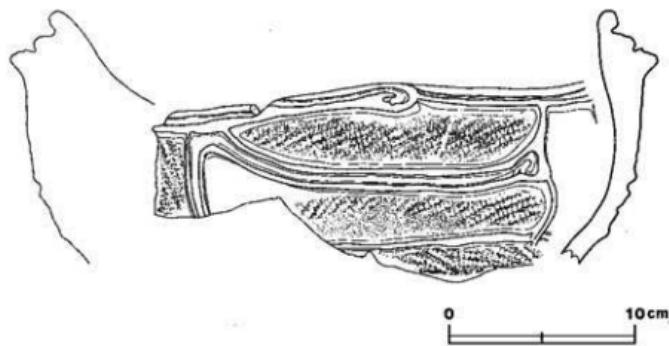
1 埋甕

第1号埋甕 (第76図 P L 18)

本遺構は B2i 区に確認され、第34号土坑の東 1 m に位置している。出土状況は、口縁部を上にする正位で検出された。口縁部は約 2 分の 1 が欠損し、小破片が散乱した状態で出土した。掘方は、長径 61cm・短径 48cm の梢円形でやや南北に長く、確認面から 10~20cm の深さに掘り込まれている。底面・壁ともロームで、底面はやや凹凸がみられる。土器は、掘方の中央部に埋設されていた。埋甕内の覆土は、焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土である。掘方内の覆土は、ロームブロックを含む褐色土であり、軟らかい。



第76図 第1号埋葬実測図



第77図 出土土器実測図

埋蔵観察表 (第77図)

出土番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
	深鉢形土器 縄文式土器	A (29.8) B (13.6)	キャリバー形の口縁部片で、山形把手が2か所につき。横位の隆帯で口縁部文様帯を区画し、内部に平行する2本の隆帯を強調して文様を構成する。地文は縦文。		灰褐色 砂粒・雲母 普通	15% P51 B2h ₄ PL22

2 溝

第1号溝 (第78図 PL18)

本跡は C1b₃区から C1e₈区にかけて確認され、第1号住居跡、第7・9号土坑と重複している。これらの遺構の中では、本跡が最も新しい。

本跡は C1b₃区から西に1.5mほど延び、C1c₈区内ではほぼ直角に南南西に向きを変え、その後わずかな屈曲をみせながら、C1e₈区に達している。全長は13.5mである。溝の幅は、C1b₃区内で0.7m、C1c₈区内で0.55m、C1e₈区内で0.45mであり、それぞれの地点での深さは、4cm、20cm、9cmである。底面のレベルは北端部で38.77m、中央部で38.6m、南端部で38.79mであり、中央部が深くなっている。断面は、逆台形状を呈している。覆土は2層に分けられ、上位はローム粒子・焼土粒子を含む褐色土、下位はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土で軟らかい。

本跡の位置する地点は、全体的に東に傾斜している関係で黒色土が厚く堆積しており、表土除去の際に遺構の一部が消失したことも考えられる。本来は、C1b₃区から東に、そして C1e₈区から南に、それぞれ延びていた可能性がある。

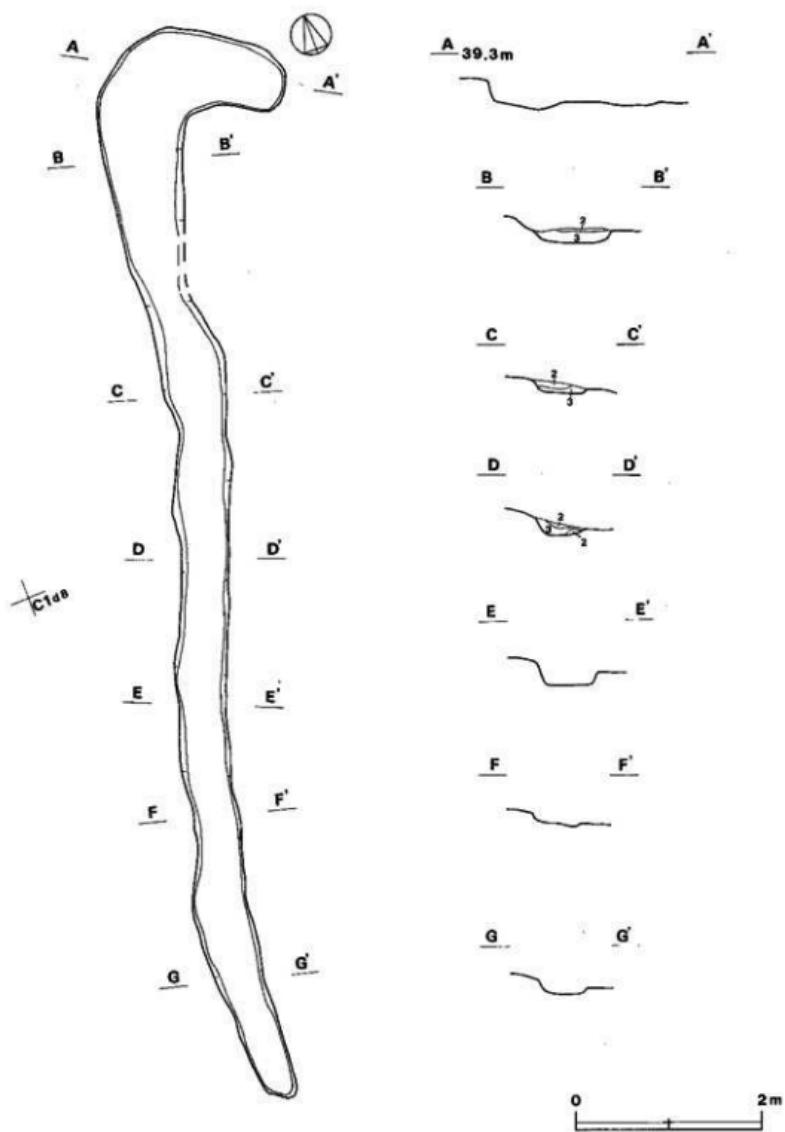
遺物は、縄文式土器片、土師器片が少量出土しているが、本跡に伴うものは出土していない。

3 棚列跡

当遺跡で検出された棚列跡は、4か所である。各棚列跡は平行、もしくは直交するように柱穴が並んでいることから、計画的に配置されたことがうかがえる。また、掘立柱建物跡の桁行方向と棚列の方向がほぼおなじことから、これらの遺構は同時期に建てられたと思われる。しかし、互いに重複している部分もあり、2期以上に分けることが可能であるが、新旧関係は不明である。

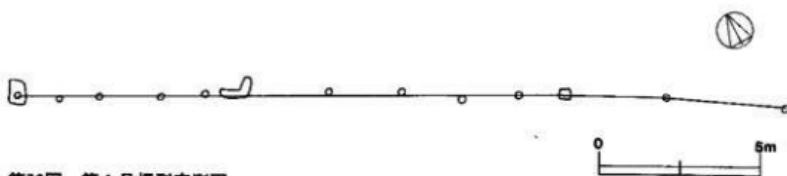
第1号棚列跡 (第79図)

本跡は B1e₃区から B2h₃区にかけて確認され、東西に直線的にのびる棚列跡である。本跡の東側で、第4・5号掘立柱建物跡と重複し、さらに東端で、第2号棚列跡と直交している。第4号掘立柱建物跡の P₅が本跡の P₁₁を切っていることは確認できるが、他の遺構との新旧は不明である。



第78図 第1号溝査測図

柱穴は13か所検出され、全長23.55mである。方向は、N-62°-Wで、第1号掘立柱建物跡の平行方向と平行である。連続して検出された柱穴間の距離は、1.0~2.2mで、平均すると1.55mである。柱穴は径15~20cmの円形である。 $P_1 \cdot P_6 \cdot P_{11}$ は、長軸60cm前後、短軸50cm前後の長方形を呈する掘方である。



第79図 第1号柵列実測図

第2号柵列跡（第80図）

本跡はB2c₄区から南に直線的にのび、C2a₁区に至る間で確認された柵列跡である。本跡の中央部で、第1号柵列跡と直交する形で重複している。

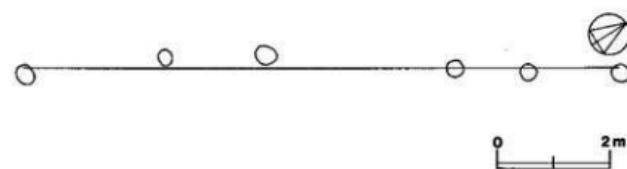
柱穴は、13か所検出され、北端部は一辺60cmの方形を呈する掘方である。全長は31.9mで、方向はN-26°-Eである。本跡は、各柱穴が連続して検出されたわけではなく、北から11m地点、及び24m地点では、柱穴間の距離が7mほどあいている。本来はこの間に数本の柱穴があったものと思われる。連続して検出された柱穴間の距離は、1.1~3.5mで、平均柱間距離は1.94mである。柱穴は径15~30cmの円形である。



第80図 第2号柵列実測図

第3号柵列跡（第81図）

本跡はC2a₁区からC1d₆区にかけて直線的に確認された柵列跡である。数基の土坑と重複して



第81図 第3号柵列実測図

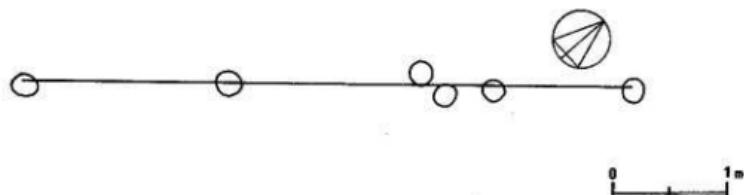
いるが、新旧関係は明確でない。第2号柵列跡の南側に位置している。

柱穴は、6か所検出され、南端部の1か所だけ中軸線から東にズレている。全長は11.4mで、方向はN-29°-Eである。各柱穴間の距離は1.4~2.7mで、平均柱間距離は1.92mである。柱穴は径30~40cmの円形である。本跡は、第2号柵列跡とつながるかと思われたが、方向で約3°のズレが認められたことから、単独遺構として記述した。

第4号柵列跡（第82図）

本跡はB2b₄からB2c₅区にかけて直線的に確認された柵列跡である。本跡の西1.5mには、第7号掘立柱建物跡が存在しており、本跡の位置や規模等から判断して、第7号掘立柱建物跡に付随して建てられたものと思われる。

柱穴は、6か所検出されているが、北側から2~4番目までの3か所は密集しており、柵列としてはこの中の1か所だけが使われたものと推定される。全長は5.8mで、方向はN-38°-Eである。柱穴間は等間で、ほぼ1.9mである。本跡の全長及び柱穴間隔は、第7号掘立柱建物跡と同一である。柱穴は、径20~25cmの円形を呈している。



第82図 第4号柵列実測図

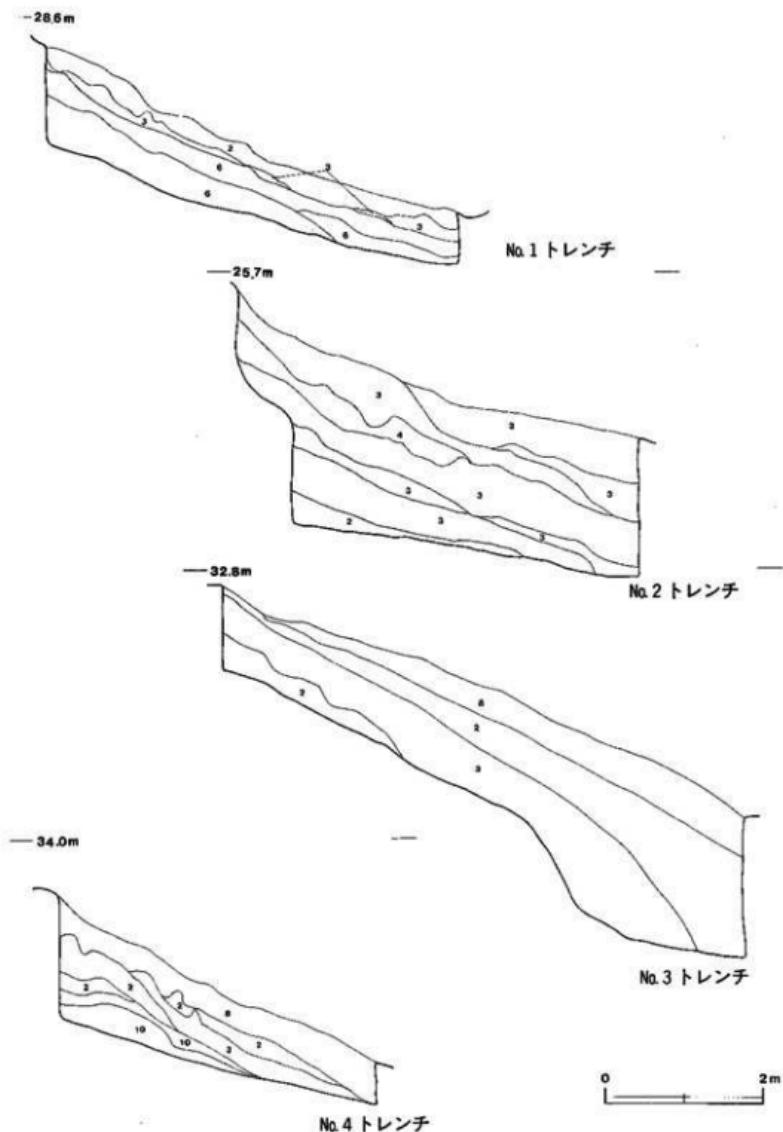
4 斜面部トレンチ（第83図 PL18）

遺跡北側は急な崖になっており、この地点も調査エリアであったので、崖の中段に4か所のトレンチを設定し調査を実施した。

その結果、人工的に構築された遺構等は検出されず、70~100cm程掘り下げる砂層や粘土層の自然堆積層に達することが判明した。なお、トレンチ内からは台地上から流れ込んだとみられる繩文式土器片等が出土している。

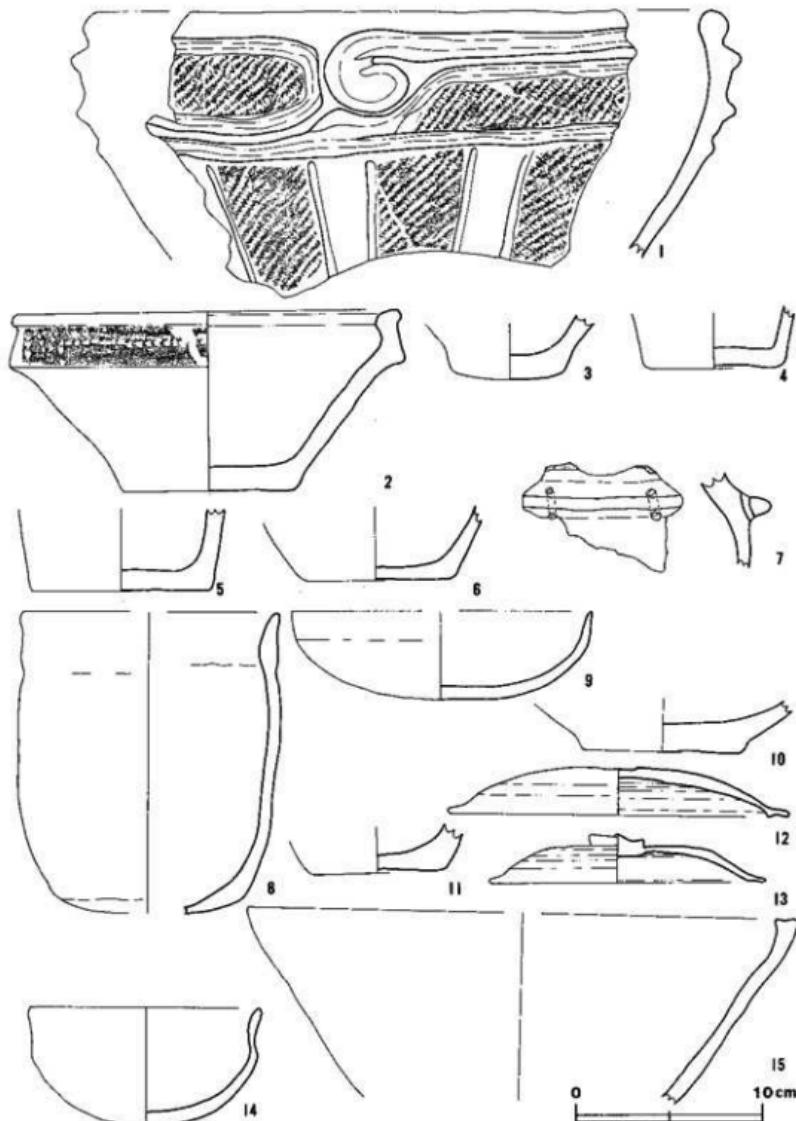
5 貝類（PL19）

当遺跡西側の斜面部に、塙貝塚の中心部にあたると思われる貝層が認められた。サンプリングした貝類のうち、主なものを写真で掲示した。



第83図 トレンチ土層断面実測図

遺構外出土土器



第84図 遺構外出土土器実測図

造構外出土土器観察表（第84回）

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
1	深鉢形土器 縄文式土器	A (33.6) B (13.3)	口縁部は陸・沈線により稍円弧 面及び渦巻文を施し、胴部との 境に横走る太い沈線を配して 口縁部文様帶を区画している。 胴部は2本の平行沈線を1単位 として級位に施文し、沈線間は 磨り消している。地文は縄文。		橙色 砂粒 普通	10% P 43 PL21
2	浅鉢形土器 縄文式土器	A 20.4 B 9.7 C 9.3	胴部は直線的に大きく外傾し、 上位で「>」状に屈曲して口縁部 に続く。底部は平底で厚い。口 縁部に棒状工具による連続網突 文が施文されている。胴部以下 は無文。	内外面ともナデ。	にぶい橙色 長石・雲母 砂粒 普通	85% P 49 No.3 トレンチ
3	不　明 縄文式土器	B (3.0) C 6.0	偏平な丸底を呈する底部片であ る。	内外面ともヘラ状工 具によるケズリ。	橙色 砂粒・スコリア 普通	5% P 61 A 2区
4	不　明 縄文式土器	B (3.3) C (7.6)	平底の底部片である。垂下する 隆帯の末端部が残っている。		にぶい橙色 砂粒・石英 雲母 普通	5% P 62 A 2区
5	不　明 縄文式土器	B (4.4) C (9.6)	平底の底片で、直線的に立ち 上がって胴部に続く。	外面横方向のケズ リ、内面横方向のナ ダ、底面雜なケズリ。	にぶい赤褐色 砂粒・雲母 長石 普通	3% P 48 No.3 トレンチ
6	不　明 縄文式土器	B (3.9) C 8.3	平底の底片で、わずかに内湾 しながら胴部に続く。	内外面ケズリ、底面 ナダ。	にぶい橙色 砂粒 普通	5% P 47 No.3 トレンチ PL22

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
7	有孔鈎付土器 繩文式土器	B(5.0)	有孔鈎付土器の破片である。器表から約1.5cmほど突出した鈎の基部に、径4mmの孔が5.5cmの間隔をおいて穿たれている。		にぶい橙色 雲母・砂粒	5 % P64
8	甕 土 筒 器	A(13.8) B 16.2 C 9.9	偏平な丸底で、胴部は円筒形状を呈する。底部と胴部の境には棱をもつ。口縁部はほぼ直立し、内側下位はやや肥厚している。底部は極めて薄く、最薄部は1.5mm程である。口縁部下位の内・外面に輪積痕が残る。	口縁部ヨコナデ、外 面縱方向のヘラケズ リ、内面ヘラケズリ。 内外面とも荒れが目立つ。	赤褐色 砂粒・長石	60% P52 A1区 PL22
9	壺 土 筒 器	A(16.2) B 4.8	体部は内湾しながら大きく外側に開き、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部と体部の境に棱をもつ。	口縁部ヨコナデ。器 全体が荒れてザラザラしている。	橙色 砂粒	50% P58 B1区 PL22
10	(甕) 土 筒 器	B(2.9) C(8.6)	平底の底部片である。	外面ヘラケズリ、内 面ナデ。	にぶい赤褐色 石英・長石 雲母・陳・普通	5 % P60 A1区 PL22
11	(甕) 土 筒 器	B(2.5) C 7.0	平底の底部片で、中央部がわずかに上がる。	内・外面とも荒いケズリ。	橙色 砂粒 普通	5 % P65 C1区 PL22
12	蓋 須恵器	A 18.4 B(2.6)	天井部は丸みを帯び、中央につまみのとれた痕跡が残る。口縁部内側にかえりをもつ。	水挽き成形。天井部 は回転ヘラケズリ。	黄灰色 砂粒	90% P50
13	蓋 須恵器	A 14.9 B 2.7	天井中央部に偏平な宝珠形のつまみがつく。天井中央部はやや凹み、口縁部との境には明瞭な棱をもつ。口縁部内側にはかえりの痕跡が残る。	水挽き成形で、天井 部は回転ヘラケズ リ。	灰白色 砂粒 良好	60% P59 A1区 PL22

図中番号	器種	法量cm	器形の特徴及び文様	整形技法	色調・胎土・焼成	備考
14	环	A 12.4	体部は球状で、口縁部との境に	口縁部ヨコナデ。	明赤褐色	55%
	土 郡 器	B 6.4	明瞭な稜をもつ。口縁部は外反 ぎみに立ち上がる。	内・外面ヘラケズリ。	砂粒	P53
15	内耳土器	A (29.8)	側部は直線的に外上方に立ち上	内・外面ともヨコ方	黒褐色	5%
	中世	B (10.1)	がり、口縁部に至る。口唇部は 平坦である。	向のナデ。	砂粒・雲母	P63
					普通	Cldk

第67号土坑（第66図・52）

52は懸垂文が3条施されている。

第69号土坑（第66図・53・54）

53は沈線で方形に区画し、内部に繩文を充填している。54は荒い繩文が施されている。

第76号土坑（第66図・55）

55は弧状の隆・沈線と繩文が施されている。

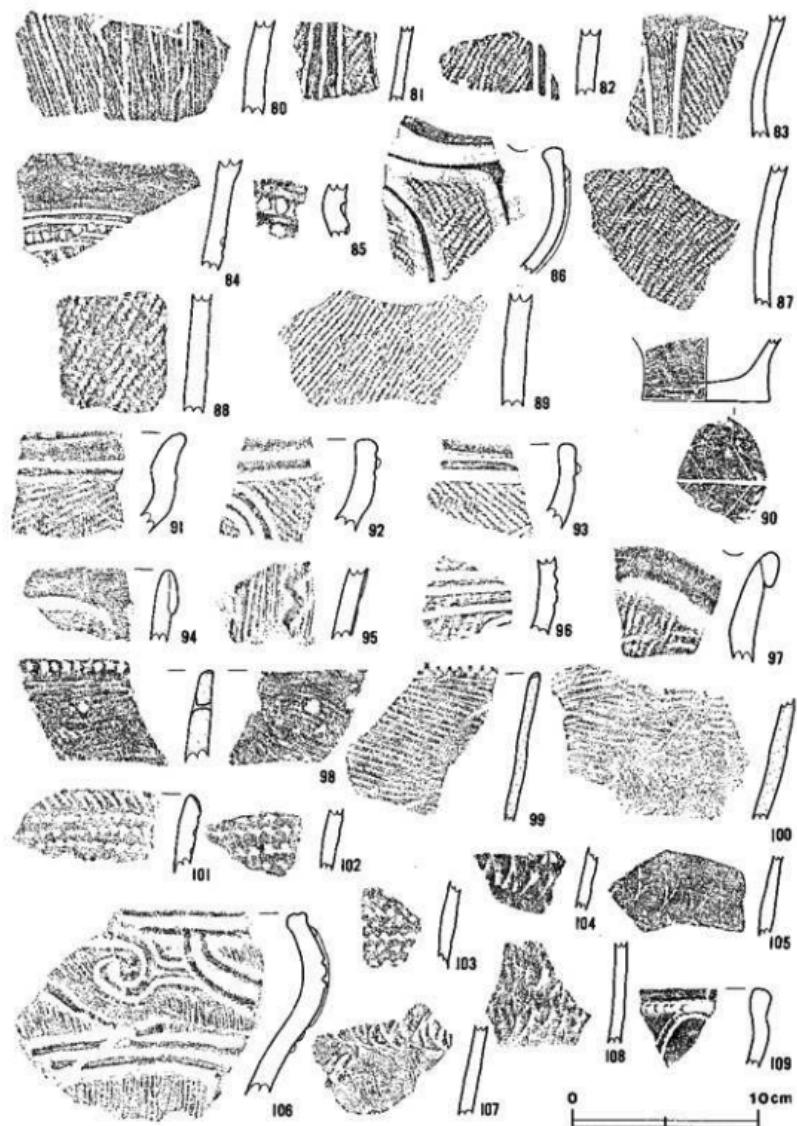
6 その他の出土遺物（第85・86・87・88図）

（1）繩文式土器

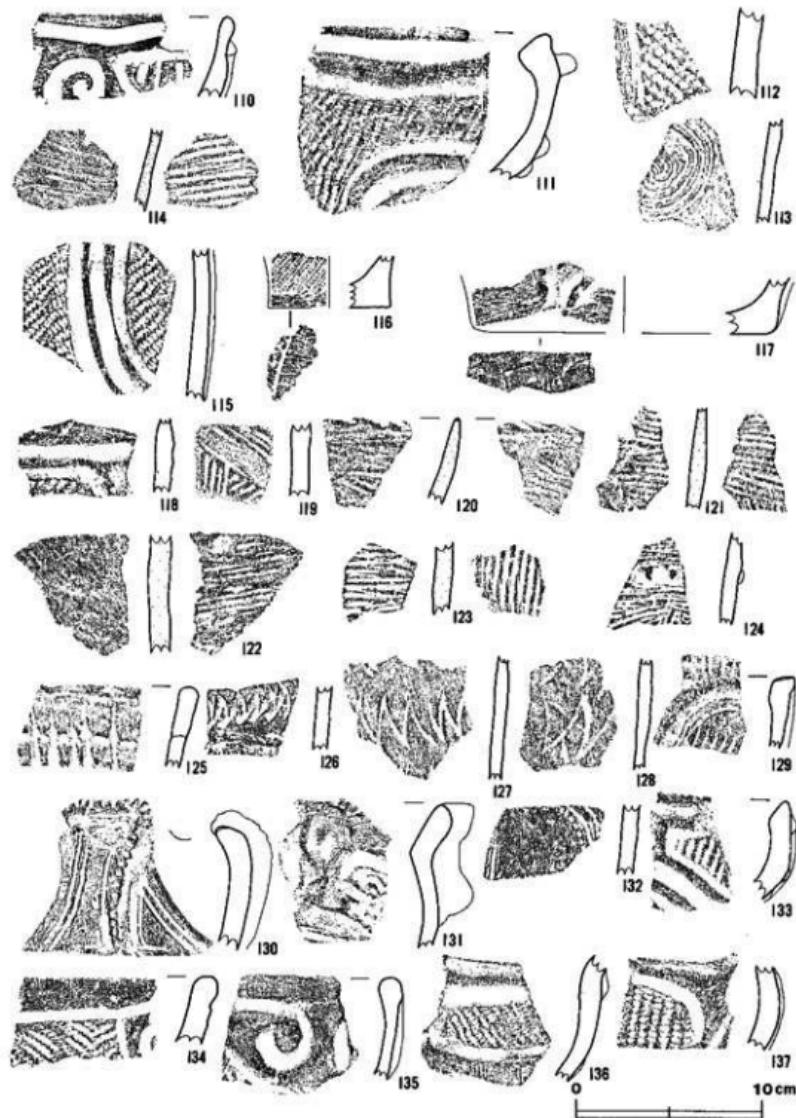
56は条痕文系の土器片で、微隆起線文が数条貼り付けられている。胎土に纖維を含んでいる。57～61は連続刺突文が施された土器片である。62～65は沈線あるいは低い隆帯で渦巻文を構成している。66～68は太目の沈線を横位に施している。69・70は条線が縦位に引かれている。71・72・101～103は三角形の連続刺突文が施されている。73～76・109・129～132・145～148は隆帯と沈線、及び連続刺突文で文様が構成されている。77～79・81～83は横位の沈線、あるいは懸垂文が施されている。80は条線文が斜位に施されている。84・85は横位の沈線と円形刺突文が施されている。86は細い隆帯を弧状に貼り付け、内部に繩文を充填している。87～89は繩文だけがみられる土器片である。90は底部片で、木葉痕が残っている。91～93は口縁部に平行な沈線が施されている。94・97は太い沈線で文様帶を区画し、内部に繩文を充填している。95は縦位の平行沈線間に蛇行する隆帯を貼り付けている。96は繩文を施した後、沈線を横位に施文している。98～100・114・120～123は条痕文系の土器で、胎土に纖維を含んでいる。98・99・120は口唇部に刻み目が入っている。104・105・107・108・126～128は貝殻腹縁文が施されている。106は沈線を弧状や渦巻状に配し、内部は条線が充填されている。110・135・149・156は太目の沈線で渦巻状の文様を構成している。111・115・118・133・134・136・137・139は太目の沈線を弧状に配して文様帶を構成し



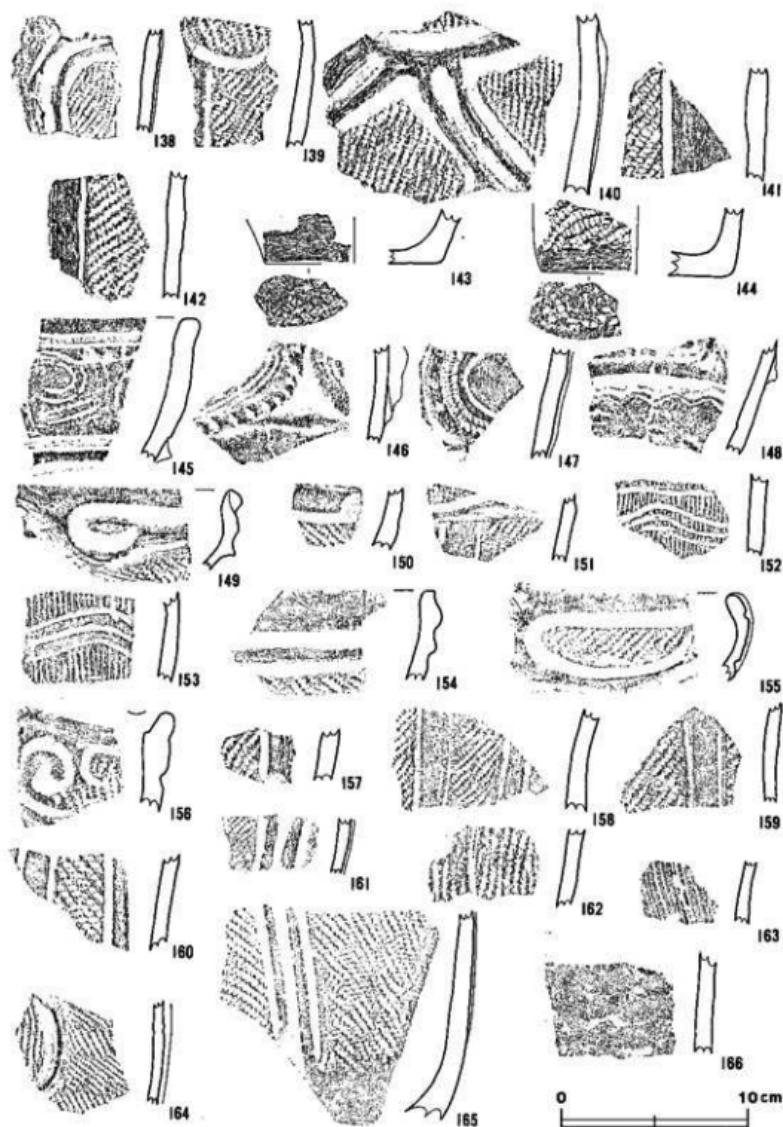
第85図 遺構外出土土器拓影図(1)



第86図 遺構外出土土器拓影図(2)



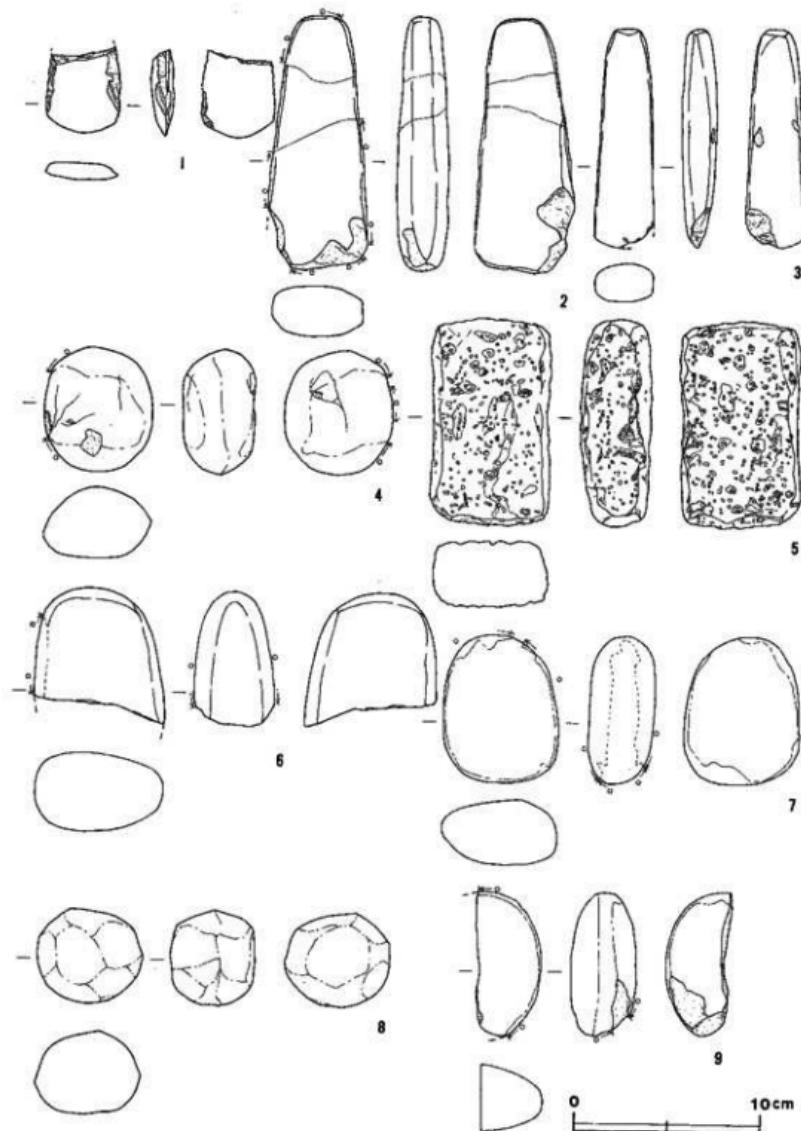
第87図 遺構外出土土器拓影図(3)



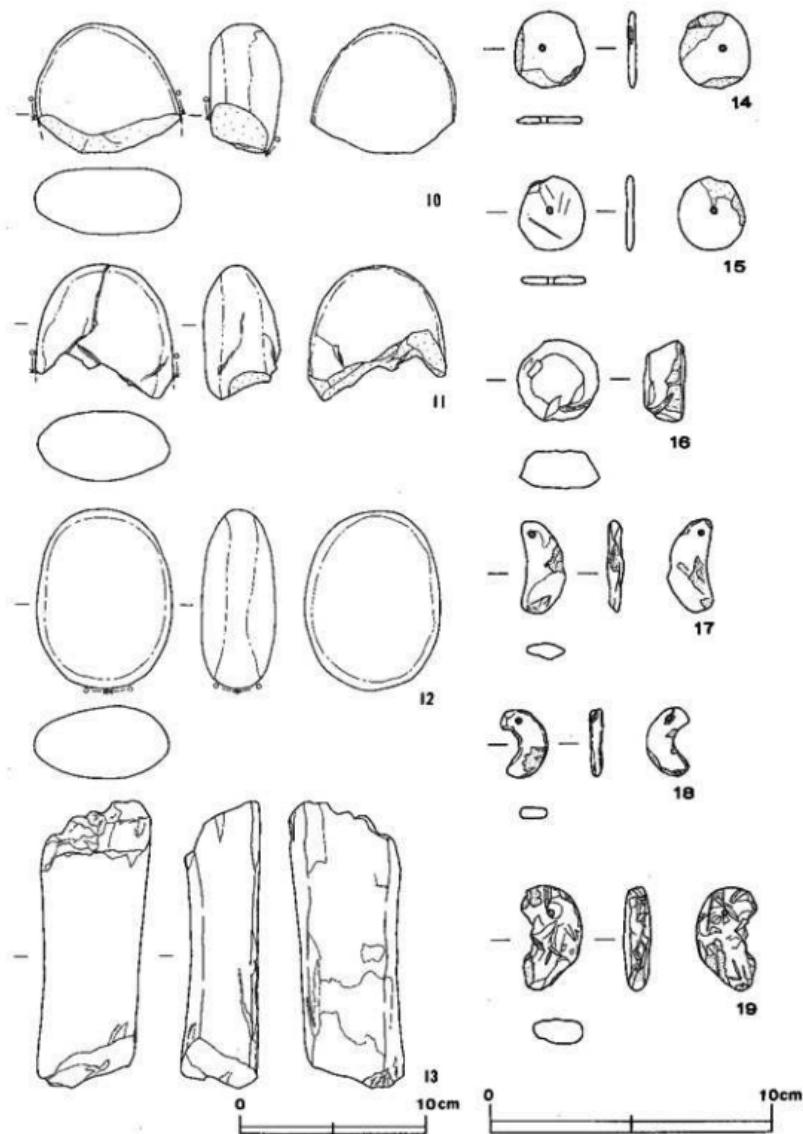
第88図 造構外出土土器拓影図(4)

ている。地文は全て縄文である。112・141・142・157～161は懸垂文が施されている。113は沈線により渦巻文が施されている。116・117は底部片で、前者の底面には木葉痕が、後者の底面にはヘラケズリの痕跡が、それぞれ見られる。119・124は集合沈線が施され、124にはボタン状の貼付文がみられる。125は意図的に残したとみられる輪積痕が残り、その上から縦位の沈線を施している。138は太日の平行沈線を弧状に配し、沈線間は磨消している。140は隆・沈線が弧状に施されている。143・144は底部片で、143の底面には網代痕が見られる。150は横位の沈線を境に、上部は無文、下部は縄文が施されている。151は斜位の沈線が數本施されている。152・153は波状の平行沈線を横位に施し、沈線間には縦位の沈線が充填されている。154は横走する平行沈線で口縁部文様帯を区画し、上部は無文で、下部は縄文が施されている。155は沈線で橢円形の区画を描き、内部に縄文を充填している。162は縄文を施した後、縦位の沈線をまばらに施している。163は条線文が施されている。164は細い隆線を弧状に貼り付けている。165は懸垂文が施されている。166は無文の土器片で、輪積痕が見られる。

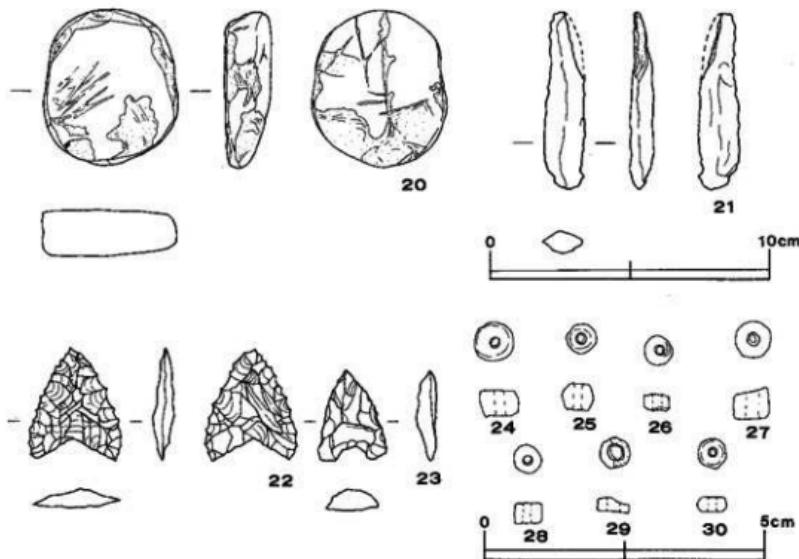
(2) 石器・石製品



第89図 石器実測図(1)



第90図 石器実測図（2）



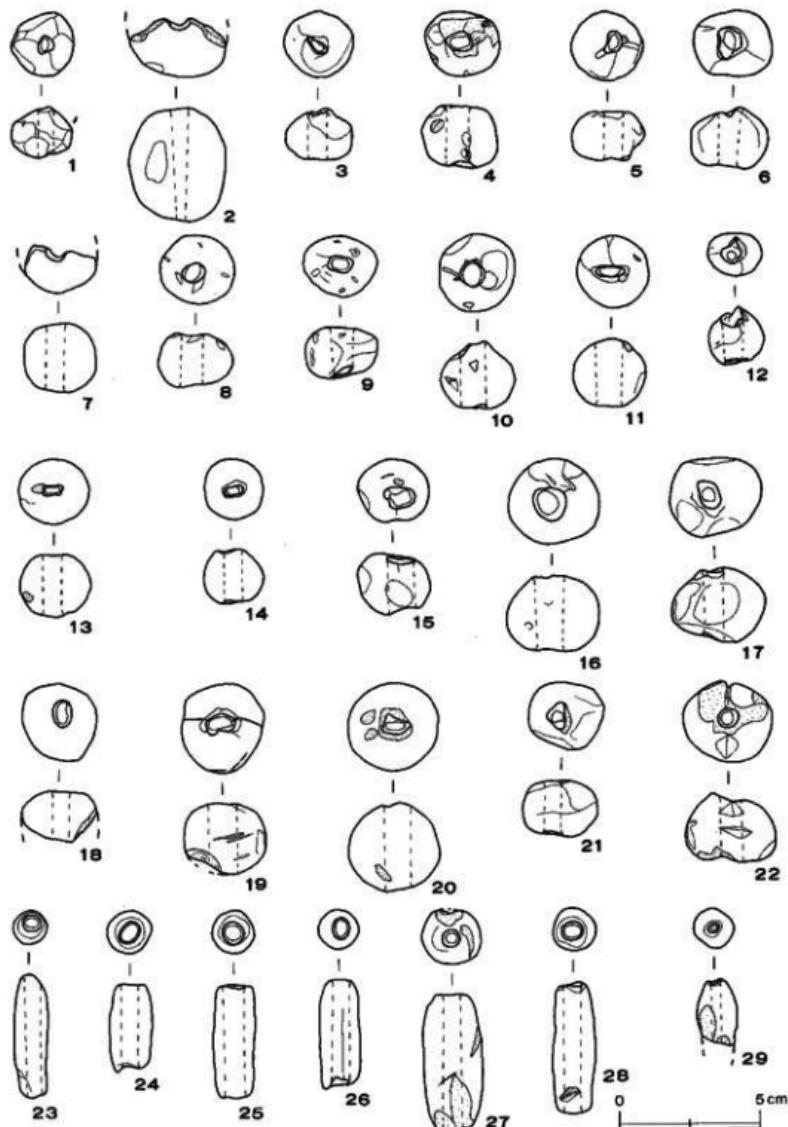
第91図 石器実測図（3）

石器・石製品等一覧表（第89・90・91図）

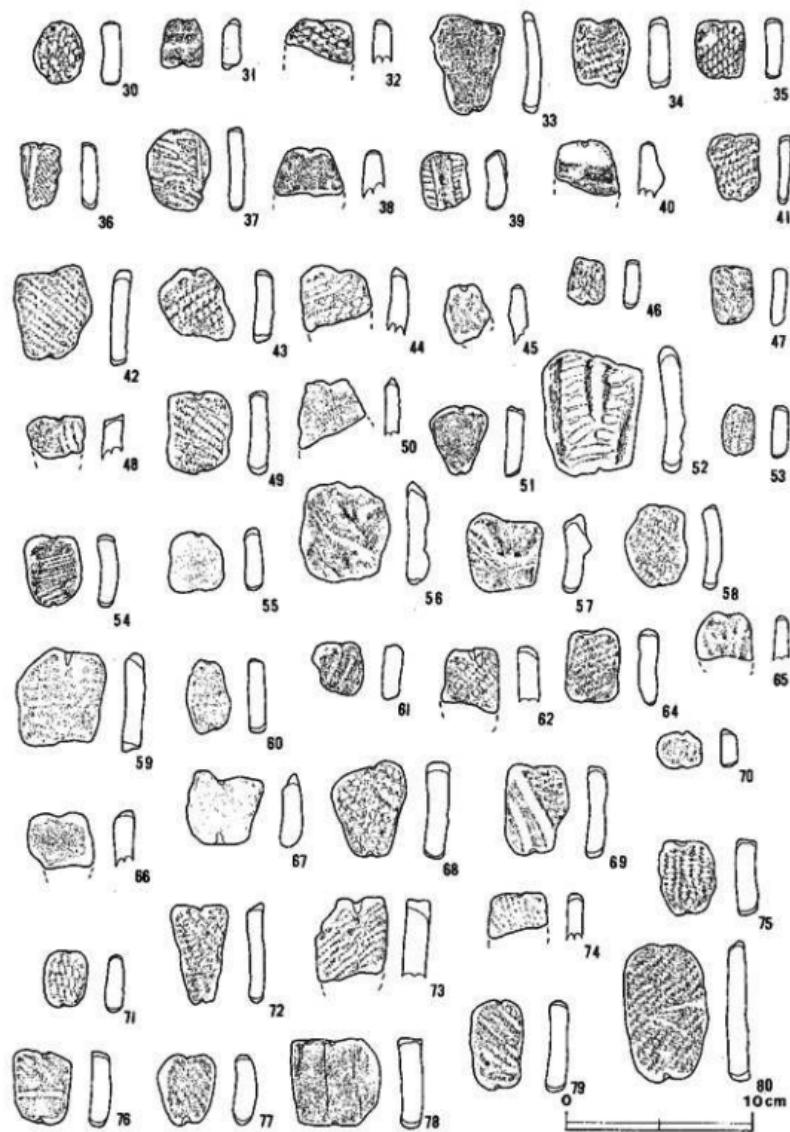
測定番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重量(g)	石質	備考
			全長	幅	厚さ			
1	磨製石斧	S I - 5	(4.6)	4.0	1.0	(35.0)	綠泥片岩	40%, Q 1, 表裏面磨り
2	〃	S I - 15	13.7	5.3	2.8	(318.4)	砂岩	95%, Q 7, 刃磨滅, 裝着痕あり
3	〃	S K - 42	11.8	3.2	2.1	(119.2)	綠泥片岩	95%, Q 12, 縦方向の磨り
4	磨石	S I - 5	6.7	5.9	3.9	(218.8)	石英	100%, Q 2, 側縁部の磨り
5	〃	S I - 10	11.1	6.5	3.9	258.5	安山岩	100%, Q 4, 兩側面の磨り
6	〃	S I - 18	(7.2)	7.0	4.3	(299.4)	砂岩	50%, Q 9, 側縁部磨滅
7	〃	A 2 区	8.0	6.3	3.6	282.5	〃	100%, Q 18, 側縁部に敲きあり
8	〃	S K - 26	5.7	5.1	4.6	184.8	石英	100%, Q 11, 側縁部に棱あり
9	〃	S K - 22	7.2	(3.6)	3.5	(120.5)	砂岩	15%, Q 10

図中番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重量(g)	石質	備考
			全長	幅	厚さ			
10	磨石	S K-42	(7.0)	(7.9)	3.7	(288.9)	安山岩	50%, Q13, 側縁部の磨り
11	#	S K-74	(7.2)	7.5	4.2	(233.3)	#	50%, Q14, 側縁部きれいな磨り
12	#	No.2トレンチ	9.7	7.3	4.1	396.4	アブライト	100%, Q15, 側縁部の磨り
13	砥石	A 1区	(15.4)	6.2	4.3	(526.9)	凝灰岩	60%, Q17, 6面使用
14	有孔円板	S I-17	2.7	2.5	0.3	3.3	滑石	100%, Q8, 孔径1.5mm
15	#	B 1区	2.7	2.3	0.3	3.1	#	100%, Q19, 孔径2.0mm
16	纺錐車	C 1区	上部深 1.9	下部深 2.9	1.5	17.8	#	100%, Q21, 表面キズ多し, 未製品
17	勾玉	S I-8	3.2	1.6	0.6	3.1	#	100%, Q3
18	#	A 3区	2.4	1.6	0.6	2.4	#	100%, Q20
19	#	表採	3.7	2.1	0.9	9.2	#	100%, Q16
20	円板	S I-15	5.6	4.8	1.7	72.6	#	100%, Q6
21	石槍	S I-12	6.3	1.5	0.9	(7.2)	頁岩	90%, Q5
22	石鏃	S I-2	2.6	1.7	0.4	0.8	黒曜石	100%, Q22, 凹基無茎鏃
23	#	S I-7	1.6	1.3	0.4	0.6	チャート	100%, Q23, 凹基無茎鏃
24	白玉	S I-2	0.7	—	0.5	0.4	滑石	100%, Q24, 孔径1.5cm
25	#	#	0.6	—	0.5	0.2	#	100%, Q25, 孔深2.0mm
26	#	#	0.5	—	0.4	0.1	#	100%, Q26, 孔径1.5mm
27	#	S I-8	0.7	—	0.6	0.3	#	100%, Q27, 孔径2.0mm
28	#	#	0.5	—	0.4	0.1	#	100%, Q28, 孔径1.5mm
29	#	#	0.6	—	0.3	0.1	#	100%, Q29, 孔径2.0mm
30	#	S I-15	0.5	—	0.3	0.1	#	100%, Q30, 孔径1.5mm

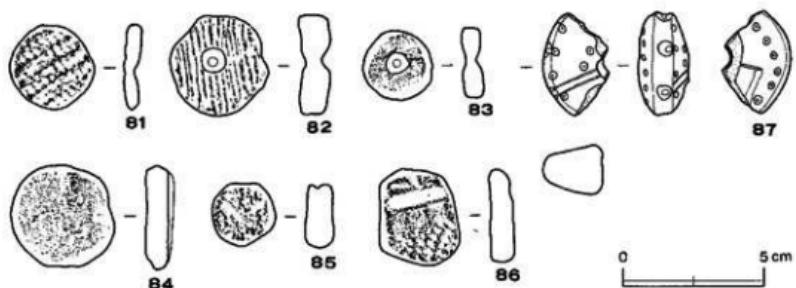
(3) 土 製 品



第92図 土製品実測図



第93図 土器片錐実測図



第94図 土製品実測図

土製品等一覧表 (第92・93・94図)

図中番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重量	土器片 利用部位	備考
			たて	よこ	厚さ			
1	球状土器	S I-2	2.2	1.8		6.5	孔径0.6cm DP2	
2	〃	〃	(3.4)	4.0		(24.1)	一部欠損、孔径0.6cm DP1	
3	〃	S I-3	2.5	1.8		7.5	孔径0.5cm DP4	
4	〃	〃	2.3	2.2		11.2	孔径0.7cm(長方形) DP3	
5	〃	〃	2.6	2.7		8.4	孔径0.6cm DP37	
6	〃	〃	2.4	2.1		10.4	孔径0.6cm DP39	
7	〃	〃	(2.5)	2.4		(8.0)	一部欠損、孔径0.6cm DP38	
8	〃	S I-4	2.7	2.0		10.7	孔径0.7cm DP5	
9	〃	S I-8	2.2	1.9		7.6	孔径0.6cm(長方形) DP6	
10	〃	S I-17	2.8	2.4		15.1	孔径0.6cm DP40	
11	〃	S I-18	2.6	2.4		12.6	孔径0.7cm(長方形) DP9	
12	〃	〃	1.5	2.1		3.8	孔径0.3cm DP7	
13	〃	〃	1.8	2.2		10.7	孔径0.5cm(長方形) DP8	
14	〃	S K-22	2.2	2.0		7.2	孔径0.4cm(長方形) DP11	
15	〃	S K-19	2.2	2.2		9.2	孔径0.7cm(長方形) DP10	
16	〃	S K-22	3.3	2.7		20.0	孔径0.8cm DP12	
17	〃	S K-75	2.8	2.7		20.3	孔径0.5cm DP13	
18	〃	No4トレンチ	(2.7)	(1.8)		(8.9)	一部欠損、孔径0.6cm DP41	
19	〃	表採	3.1	(2.6)		(16.1)	一部欠損、孔径0.8cm(長方形) DP83	
20	〃	〃	3.1	3.2		28.0	孔径0.7cm DP82	

図中番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重量	土器片 利用部位	備考
			たて	よこ	厚さ			
21	球状土錐	表 振	2.4	2.0		10.0		孔径0.4cm DP42
22	#	E 3 区	3.2	2.5		(15.4)		一部欠損。孔径0.5cm DP14
23	管状土錐	S K - 1	1.2	4.5		(5.3)		一部欠損。孔径0.5cm DP15
24	#	S K - 9	1.6	3.1		(5.0)		一部欠損。孔径0.7cm DP16
25	#	C 1 区	1.6	4.0		10.2		孔径0.6cm DP19
26	#	#	1.5	3.4		10.0		孔径0.5cm DP20
27	#	No5グリッド	2.0	4.8		(20.3)		一部欠損。孔径0.4cm DP18
28	#	#	1.6	4.7		11.3		孔径0.6cm DP17
29	#	#	1.4	(2.4)		(3.0)		一部欠損。孔径0.2cm DP43
30	土器片錐	S I - 2	3.3	2.7	1.1	11.7	胴 部	抉り間3.2cm DP47
31	#	#	2.7	2.3	1.0	7.2	#	抉り間2.9cm DP46
32	#	S I - 3	(2.4)	3.8	1.1	(9.6)	#	一部欠損 DP48
33	#	S I - 6	5.4	4.0	0.7	17.5	#	抉り間4.9cm DP49
34	#	S I - 8	3.8	3.1	1.1	17.2	#	抉り間3.2cm DP25
35	#	#	3.2	2.7	1.0	11.7	#	抉り間2.9cm DP50
36	#	#	3.6	2.1	0.9	7.1	#	抉り間3.2cm DP51
37	#	#	4.5	3.5	0.8	17.1	#	抉り間4.2cm DP55
38	#	#	(2.6)	3.8	1.2	(10.8)	#	一部欠損 DP52
39	#	#	3.2	2.6	1.1	9.9	#	抉り間2.9cm DP53
40	#	#	(3.0)	3.5	1.1	(13.0)	#	一部欠損 DP54
41	#	#	3.7	2.9	0.7	8.0	#	抉り間3.3cm DP26
42	#	#	5.2	4.3	1.0	23.1	#	抉り間4.5cm DP27
43	#	#	3.9	4.6	0.8	16.4	#	抉り間3.3cm DP28
44	#	S I - 10	(3.6)	3.9	1.1	(14.6)	#	-一部欠損 DP60
45	#	#	(3.2)	2.5	1.1	(7.9)	#	一部欠損 DP59
46	#	#	2.6	1.9	0.9	5.2	#	抉り間2.3cm DP58
47	#	#	3.1	2.2	0.8	7.8	#	抉り間3.0cm DP57
48	#	#	(2.3)	3.1	1.0	(8.6)	#	一部欠損 DP56
49	#	#	4.4	3.5	1.1	23.7	#	抉り間4.1cm DP29
50	#	S I - 13	(3.7)	3.7	0.8	(10.3)	#	一部欠損 DP61

図中番号	類 別	出土地点	大きさ(cm)			重量	土 器 片 利用部位	備 考
			たて	よこ	厚さ			
51	土器片類	S I -16	3.7	3.2	0.9	12.9	胴 部	挟り間3.5cm DP62
52	〃	SK-17	6.8	5.5	1.1	56.7	〃	挟り間5.9cm DP64
53	〃	S I -18	2.8	1.8	0.9	5.6	〃	挟り間2.5cm DP63
54	〃	表 探	3.9	3.1	0.9	12.9	〃	挟り間3.4cm DP33
55	〃	〃	3.3	3.0	1.0	13.1	〃	挟り間2.9cm DP34
56	〃	〃	5.4	4.8	1.2	34.8	〃	挟り間4.6cm DP36
57	〃	〃	4.3	4.2	0.9	21.1	口 緹 部	挟り間3.6cm DP87
58	〃	〃	4.5	3.4	0.8	16.7	胴 部	挟り間4.2cm DP86
59	〃	SK-19	5.3	4.8	1.0	31.8	〃	挟り間4.7cm DP65
60	〃	SK-22	3.9	2.4	0.9	11.4	〃	挟り間3.5cm DP66
61	〃	SK-22	2.9	2.8	1.0	9.4	〃	挟り間2.6cm DP67
62	〃	SK-25	(3.6)	3.1	1.1	(15.8)	〃	一部欠損 DP68
63	欠	—	—	—	—	—	—	—
64	土器片類	SK-27	4.0	3.0	1.0	16.0	胴 部	挟り間3.7cm DP30
65	〃	SK-29	(2.6)	3.1	0.8	(9.5)	〃	一部欠損 DP70
66	〃	SK-35	(3.0)	3.6	1.2	(13.3)	〃	〃 DP71
67	〃	SK-36	4.0	4.1	1.2	20.3	〃	挟り間3.4cm DP72
68	〃	SK-39	5.1	4.0	1.2	28.2	〃	挟り間4.6cm DP73
69	〃	SK-42	4.8	3.5	0.9	21.4	〃	挟り間4.4cm DP31
70	〃	SK-44	2.0	2.5	1.0	5.3	〃	挟り間1.7cm DP84
71	〃	SK-52	3.0	2.4	1.0	8.8	〃	挟り間2.7cm DP74
72	〃	SK-62	5.3	3.1	0.9	16.2	〃	挟り間4.9cm DP75
73	〃	A 2 区	(4.7)	3.9	1.3	(26.2)	〃	一部欠損 DP78
74	〃	A 3 区	(2.6)	3.3	1.0	(9.4)	〃	〃 DP79
75	〃	〃	4.0	3.1	1.1	17.9	〃	挟り間3.7cm DP35
76	〃	C 2 区	4.0	3.1	1.0	17.1	〃	挟り間3.6cm DP80
77	〃	No1トレンチ	3.8	3.1	1.1	15.5	〃	挟り間3.3cm DP76
78	〃	No3トレンチ	4.7	4.8	1.2	41.4	〃	挟り間4.4cm DP77
79	〃	〃	4.8	2.9	1.1	20.7	〃	挟り間4.5cm DP85
80	〃	〃	7.5	4.6	1.2	43.9	〃	挟り間7.1cm DP32

図中番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重量	土器片 利用部位	備考
			たて	よこ	厚さ			
81	土製円板	S I - 5	3.0		0.6	6.3	胴部	裏面に穿孔痕あり、未貫通 DP22
82	〃	S I - 8	3.5		1.1	14.5	〃	両面に穿孔痕あり、未貫通 DP44
83	〃	〃	2.5		0.8	5.9	〃	〃 DP24
84	〃	S I - 1	3.7		1.0	15.4	〃	DP21
85	〃	S I - 6	2.3		1.1	6.2	〃	DP23
86	〃	S K 74	3.5	2.9	0.9	10.5	〃	DP45
87	筋縫車	S I - 8	(3.7)		1.8	(12.2)		表面及び側面に刻文あり DP81

第4章　まとめ

第1節　遺構について

1 住居跡

当遺跡は県道のバイパス用地内であるため、調査範囲はほぼ南北に長く、東西の幅は最も広いところで25m程である。地形的には、舌状に張り出した台地の北東端部にあたり、遺跡中央部が最も高く標高39mで、北側はゆるやかに傾斜しながら崖につながり、南側は南東方向に傾斜している。その結果、遺跡内の表土層は北側と南側で厚く堆積することになったものと思われる。特に南側一帯は厚く、80~100cm程である。いずれにしても、高い地点の土砂が低い地点に流れ込んだものと思われる。また、遺跡付近は昔から畑として利用されており、40~50cmの深さまで耕作による擾乱を受けていたことがわかる。さらに、縄文時代から中世までの遺構が検出されたことから、古い時代の表土が新しい時代の遺構構築時に擾乱を受けたことも推定される。

当遺跡で検出された住居跡のほとんどで規模の確認が困難であったのは、前述のような様々な要因が重なり、壁が消失していたからだと思われる。壁が明確に検出できたのは2~3軒で、他は遺構確認面まで表土を除去すると、床面が露出してしまう状況であった。

今回の調査で検出された住居跡は、一部推定のものを含め16軒で、その内訳は、弥生時代1軒（第9号住居跡）、古墳時代8軒（第1・2・3・5・8・10・15・17号住居跡）、奈良時代5軒（第4・11・13・16・18号住居跡）、時期不明2軒（第6・7号住居跡）である。

(1) 弥生時代の住居跡

この時期の住居跡は1軒だけで、古墳時代の住居跡にそのほとんどを切られているため、詳細は不明である。出土した遺物は縄文式土器片及び土師器片が多く、床に近い覆土から小形壺が1点出土したことから、後期の住居跡であることが確認できた。

(2) 古墳時代の住居跡

8軒検出されているが、出土遺物等から2期に分けることができる。

和泉期……第5・10・15号住居跡

鬼高期……第1・2・3・8・17号住居跡

和泉期の住居跡は遺跡中央部に検出され、第5号住居跡と第10号住居跡は重複している。第15号住居跡はこれら2軒の住居跡の西側4mの地点に位置し、半分以上がエリア外にかかっている。平面形は方形を呈していたと思われるが、コーナー部はやや丸みを帯びているようである。柱穴は第10号住居跡で4か所検出されたが、第5号住居跡では検出できなかった。この2軒はほぼ同

一レベルで床が構築されているが、第5号住居跡の柱穴が検出できなかったことから、第10号住居跡の方が新しいものと思われる。床は、第5・10号住居跡では炉の周辺が硬く締まり、壁近くは軟弱であった。第15号住居跡は、締まった部分はみられず、全体に軟らかである。炉は、第5・10号住居跡で検出され、いずれも床を浅く掘り凹めた地床炉である。炉の内部には焼土が堆積していたが、炉床はあまり焼けていなかった。壁については不明である。

第15号住居跡は大部分がエリア外のため、柱穴が1か所検出できただけである。しかし、床面及び覆土中から多量の滑石片や臼玉の未製品が出土したことから、玉類を製作する工房跡であったと思われる。出土した滑石片の総重量は約800gで、未調査の部分にも相当の滑石片が埋まっているものと考えられる。

鬼高窓の住居跡は、遺跡中央部西側に集中して検出された。5軒の住居跡のうち、4軒が重複しており、切り合い状況からみて第2号住居跡が最も古いものと考えられる。第1号住居跡及び第8号住居跡は第2号住居跡を切って構築されており、さらに第3号住居跡は第8号住居跡を切って構築している。次にわかりやすく新旧関係を図示すると次の通りである。

S I - 2
S I - 1 S I - 8 → S I - 3 第17号住居跡は、和泉期及び時期不明の住居跡と重複しているが、鬼高窓の住居跡としては単独で検出されている。ここで時期不明とした住居跡は、時期を決定できるだけの遺物が出土していないわけであるが、覆土から出土した遺物、あるいは平面プランや内部構造等から鬼高窓を考えることができないわけでもない。そうなると、第17号住居跡は和泉期の住居跡を含めて5軒と重複していることになるが、これはあくまで推定であり、ここでは該期の住居跡どうしの重複はないものと考えておきたい。

さて、各住居跡の平面形は、5軒とも全て方形と考えられる。規模は第8号住居跡が最も大きく、 $7.03 \times 6.65m$ であり、最小のものは第3号住居跡で、 $4.75 \times 4.33m$ である。柱穴は第2号住居跡で1か所、第1・3号住居跡で2か所、第8・17号住居跡で3か所検出されている。比較的柱穴数が少ないが、これは住居跡の一部がエリア外であったり、重複が多く検出が困難であったことなどもその一因であると思われる。第8号住居跡の柱穴は、径・深さとも大きく、良好な検出状況であった。硬く締まった床が確認できたのは第8号住居跡だけで、カマド前面及び柱穴に開まれた内側が踏み固められた状況を呈していた。カマド、あるいはその痕跡が第2号住居跡を除いて検出された。袖部が残っていたのは第8号住居跡だけで、他は北西側の壁中央部に炉床部とみられる浅い掘り込みや、砂質粘土の分布が認められただけである。貯蔵穴や壁溝等の内部施設は検出できず、元來なかったものと思われる。

以上古墳時代の住居跡についてみてきたが、遺跡中央部から西側にかけての狭い地点に密集して検出されたことと、重複が極めて多いことが特徴としてあげられよう。他遺跡の調査結果をみ

ても、鬼高窓の住居跡は重複して検出される傾向があり、当遺跡もその例に漏れないようである。

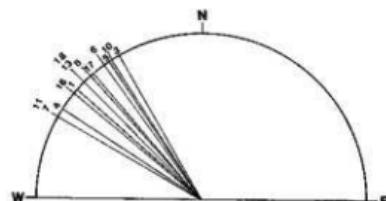
(3) 奈良時代の住居跡

奈良時代の住居跡としては、第4・11・13・16・18号住居跡の5軒が検出されている。しかし、出土遺物から明確に時期を決定できたのは第18号住居跡1軒だけで、他は平面形や内部構造等から推定したものである。全ての住居跡が同一時期に構築されていたとは考え難く、2期以上にわたるものと思われるが、前述のように分類できるだけの遺物が出土していないことから、一応同時期として記述していく。

5軒の住居跡は遺跡中央部に検出され、半円形に並ぶように分布している。重複する住居跡は1軒もない。したがって、住居跡で囲まれた径15~20mの区域ができ、ここを庭や広場としての性格をもつ区域と考えることも可能である。しかし、この時期の住居跡が円形に配置される例はあまりみられないことから、当遺跡の住居跡が意図的に配置されたと考えることは無理があり、遺跡の状況からたまたま今回のような結果になった可能性の方が強いと思われる。平面形をみると大形の住居跡は方形、小形のものは長方形を呈している。大形の住居跡は第4・18号住居跡のように4か所の柱穴をもつが、第11・13号住居跡のように小形のものは明確な柱穴が検出できず、第11号住居跡はカマドの反対側に浅い柱穴が1か所検出されたのみである。床は各住居跡とも残存状態が悪く、第11・16号住居跡の一部に硬い部分が認められただけである。第4号住居跡では、床の2分の1以上が消失していた。カマドはすべての住居跡の北西壁中央部に付設されていたと思われる。しかし、袖部は全く検出できず、わずかに燃焼部の掘り込みや砂質粘土の一部が確認できただけである。

一般的に歴史時代になると住居跡の小形化がみられるようになるが、当遺跡でも第11・13・16号住居跡などはその範囲に入るものと思われる。それに比して、第18号住居跡は一辺が6mとやや大形で、古墳時代の住居跡と同様の規模を有している。

検出された住居跡を時代毎にみてきたが、限られた範囲内での調査であるため、各時期の集落構成等を述べることはできない。しかし、検出された住居跡の配置と、遺跡付近の地形の2点から推察して、今回調査した地域の西側一帯に遺跡が広がっていることは確かだと思われる。また遺跡の所在する台地の西側傾斜地には、縄文時代中期の土器を伴う貝塚が認められることから、この地域が将米調査された時には縄



第95図 住居跡主軸方向

文時代から歴史時代まで継続的に人々の生活が営まれていたことが解明されるのではないだろうか。

2 土 坑

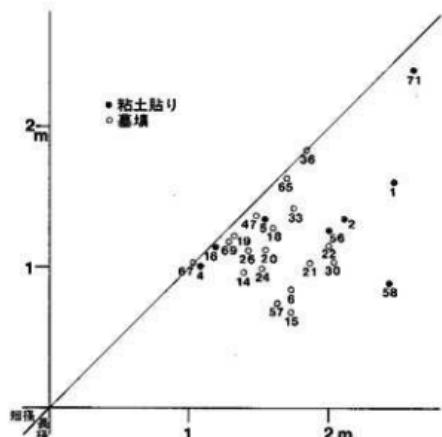
検出された土坑は65基であった。遺跡の概要で述べたとおり、縄文時代の土坑5基、粘土貼り土坑10基、地下式坑2基、その他の土坑48基である。これらの土坑の分布状況をみると、縄文時代の土坑は遺跡中央より北側に分布しており、粘土貼り土坑は南側に集中する傾向がみられる。その他の土坑としたものも、過半数は南側に検出され、粘土貼り土坑と同様の傾向が指摘できる。地下式坑も粘土貼り土坑の分布する周辺に検出されている。このように土坑の大半は遺跡の南側に密集して分布していることがわかる。平面形をみると、方形・長方形・楕円形・円形を呈するものが大半で、密集地域の土坑は方形・長方形を呈するものがほとんどである。楕円形や円形の土坑は遺跡全体からまばらに検出されており、特定の地域に集中することはない。縄文時代の土坑は楕円形が多いが、第74号土坑は開口部が円形のラスコ状土坑である。

(1) 粘土貼りを有する土坑

粘土貼りが認められた土坑は10基（土坑一覧表参照）で、第71号土坑が最も大きく 2.60×2.40 mである。他は一辺1~2m前後である。この種の土坑の平面形は方形、あるいは長方形であり、円形や楕円形のものは1基もない。10基のうち7基までがC2c₁区を中心に、円形に分布していた。C2c₁区付近は遺跡内でも最も低く、土中の水分が比較的多い地点である。当教育財団が昭和61年度に調査を実施した南三島遺跡4区（茨城県竜ヶ崎市）においても、遺跡南端の低地部から粘土

貼りを有する土坑が検出されている。形状や規模は当遺跡の土坑と極めて類似している。また南三島遺跡の東側に位置する屋代B遺跡（昭和59年度より調査が開始され、同62年3月に終了する予定である）は主に中世の城館跡が確認されている遺跡であるが、やはり粘土貼りを有する土坑が検出されている。

この種の土坑の性格や時期についての定説は、今のところ明確になっていないようである。土坑からはほとんど遺物が出土しないことがその一因であ



第96図 土坑(粘土貼り・墓塙)規模

ると思われ、当遺跡においても、土坑構築時の土砂を埋めもどす際、流入したとみられる土師器片などが出土しただけである。ただ、中世の墓壙ではないかという考えが、通説的にあるようである。屋代B遺跡においては、堀跡の時期と関連させてとらえ、中世（13～15世紀）という推定をしている。当遺跡の場合は、奈良時代の住居跡を切って掘り込まれていることが判明している。第11号住居跡と第71号土坑がそれで、住居跡の床を切って掘り込まれていることが、明確に認められている。したがって、上限は明らかにできるが、下限については時期の判明する遺構との切り合いがなく、不明とせざるを得ない。また、掘立柱建物跡の掘方とも重複しているが、この場合は互いに切ったり切られたりしていることから、ほぼ同時期と考えられる。しかし、掘立柱建物跡の時期が不明であるため、明確な時期は判明しない。

このように粘土貼りを有する土坑の時期や性格については、今のところ明確ではなく、当遺跡の土坑についても前述したように決め手を欠いており、奈良時代以降という点しか判明しなかった。しかし、第7号掘立柱建物跡の遺構確認面から、「元祐通宝」とみられる朱銭が1点出土しており、その初鑄年は1086年である。この古錢が土中に埋没していた年代はもちろん不明であるが、日本に渡来し、その後流通していた期間等を考慮すれば、12世紀以降と考えるのが妥当ではないだろうか。さらに、屋代B遺跡の例とも考え合わせれば、おそらく鎌倉時代以降と思われる。土坑の性格については、通説に従い墓壙の可能性があるとしておきたい。

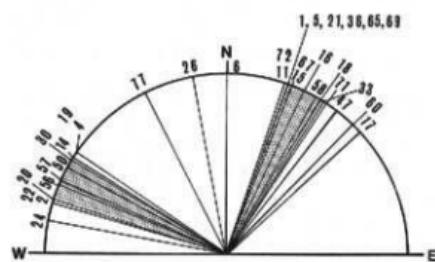
粘土貼りを有する土坑の時期や性格については、今のところ前述のような状況であり、不明な点が多い。今後、調査例の増加を待つて検討をしていくべき問題であろう。

(2) その他の土坑

縄文時代の土坑5基、粘土貼りを有する土坑10基、地下式坑2基を除く48基を一括した。しかし48基中、5基は掘立柱建物跡の掘方と推定されるものである。

これらの土坑の中で、平面形が方形あるいは長方形を呈するものは、分布や規模等が粘土貼りを有する土坑と極めて似かよっており、しかも互いに切り合っていることからみて、やや時間差

はあるが、粘土貼りを有する土坑と同時期・同性格ではなかったかと思われる。主な土坑として、第6・18・24・47・50・57・69号土坑等があり、第57号土坑は粘土貼りを有する第58号土坑に切られ、第69号土坑は逆に第65号土坑を切っている。遺跡内の分布をみても、粘土貼りを有する土坑と同様に、遺跡南側の低地部に



第97図 土坑長径(軸)方向

集中する傾向を示している。以上の点から、粘土貼りを有する土坑と同時期・同性格と推定したわけであるが、それぞれの長軸方向を図示してみると(第97図)、その関係がより明確になってくる。

これをみると、各長軸はN-20°~30°-E、あるいは約90°西に傾いてN-60°~70°-Wの間におさまることがわかる。つまり、土坑構築の際は前述のいずれかの方位にそって掘り込まれたことが推定できるのである。

このように、分布地点や重複関係、さらに長軸方向の一致などから、その他の土坑の中で平面形が方形あるいは長方形を呈するものは、粘土貼りを有する土坑と同じ時期に、同じ性格をもつ土坑として掘られたのではないかと推定することができる。

3 挖立柱建物跡・柵列

掘立柱建物跡は遺跡中央部から北側にかけて8棟検出され、柵列は掘立柱建物跡に沿って4条検出されている。各遺構からの出土遺物はほとんどなく、わずかに第7号掘立柱建物跡の遺構確認面から「元祐通宝」(祐の文字は明確ではない)とみられる古銭が1点出土しただけである。

(1) 挖立柱建物跡

8棟の建物跡の規模をみると、5間×1間が1棟、5間×2間が1棟、4間×1間が1棟、3間×1間が5棟である。最も大きい規模を有するのは第2号掘立柱建物跡で、面積は43.4m²である。次に、第1号掘立柱建物跡で、33.0m²である。最小の建物跡は第8号掘立柱建物跡で、13.4m²であり、第2号掘立柱建物跡と比較すると、3分の1以下である。他の建物跡は、10~20m²代の数値を示している。

次に長軸方向についてみると、東西棟の建物跡と南北棟の建物跡の2種に大別できる。東西棟のものは第1・6号掘立柱建物跡の2棟で、南北棟のものは第2・3・4・5・7・8号掘立柱建物跡の6棟である。磁北とのズレをみると、東西棟のものは59°~63°程西に向いており、南北棟のものは20°~35°の範囲で東に向いていることがわかる。

柱掘方の規模や配置をみると、第1号掘立柱建物跡が最も整然と並んでおり、長軸長1~1.1mである。第2号掘立柱建物跡の柱掘方も比較的大きく、長軸長1~1.1mである。これに対して、第7・8号掘立柱建物跡などは柱掘方の並びがやや乱れ、その規模も長軸長0.7~0.8m程度である。柱掘方の規模は、建物の面積にほぼ正比例するようである。

柱痕跡は第8号掘立柱建物跡だけ検出できず、他はほとんど検出されている。柱痕跡の直径は建物の規模にもよるが、およそ20~35cm程度であり、深さは柱掘方の底面と一致するものが大部分である。第3・4号掘立柱建物跡の柱痕跡は、柱掘方の隅の方に片寄って検出されているものが数か所あるが、各柱痕跡を直線で結んでみると、一直線上にのってくることがわかる。なお、第

2号掘立柱建物跡においては、柱の抜取り痕が認められている。

各建物の配置をみると、第2号掘立柱建物跡と第6号掘立柱建物跡が直交する状態で重複している。また、第3・4・5号掘立柱建物跡は柱掘方の重複はないが、極めて接近して検出されていることから、時期が異なるものと思われるが、新旧関係は不明である。

ここで、それぞれの建物の計画尺と1尺の平均長をまとめておく。計画尺は各掘立柱建物跡の北側あるいは西側の桁行長から算出した。

番号	計画尺	桁行長(m)	1尺平均長(cm)	番号	計画尺	桁行長(m)	1尺平均長(cm)
S B 1	67676	9.52	29.8	S B 5	5665	7.10	32.3
S B 2	66767	9.65	29.3	S B 6	1078	7.40	29.6
S B 3	6106	6.64	30.2	S B 7	567	5.40	30.0
S B 4	776	5.98	29.9	S B 8	677	6.10	30.5

計画尺は、1間をおよそ6~7尺にとっている。第6号掘立柱建物跡では8~10尺とややバラツキがみられる。第3号掘立柱建物跡も6~10尺と教値に開きがみられるが、中央が10尺で左右が6尺となり、それなりの規格性が認められる。1尺の平均長は、29.3~32.3cmである。20cm代が4棟、30cm代が4棟で、最も短いのは第2号掘立柱建物跡の29.3cmで、長いのは第5号掘立柱建物跡で32.3cmである。8棟の平均値は、30.2cmである。

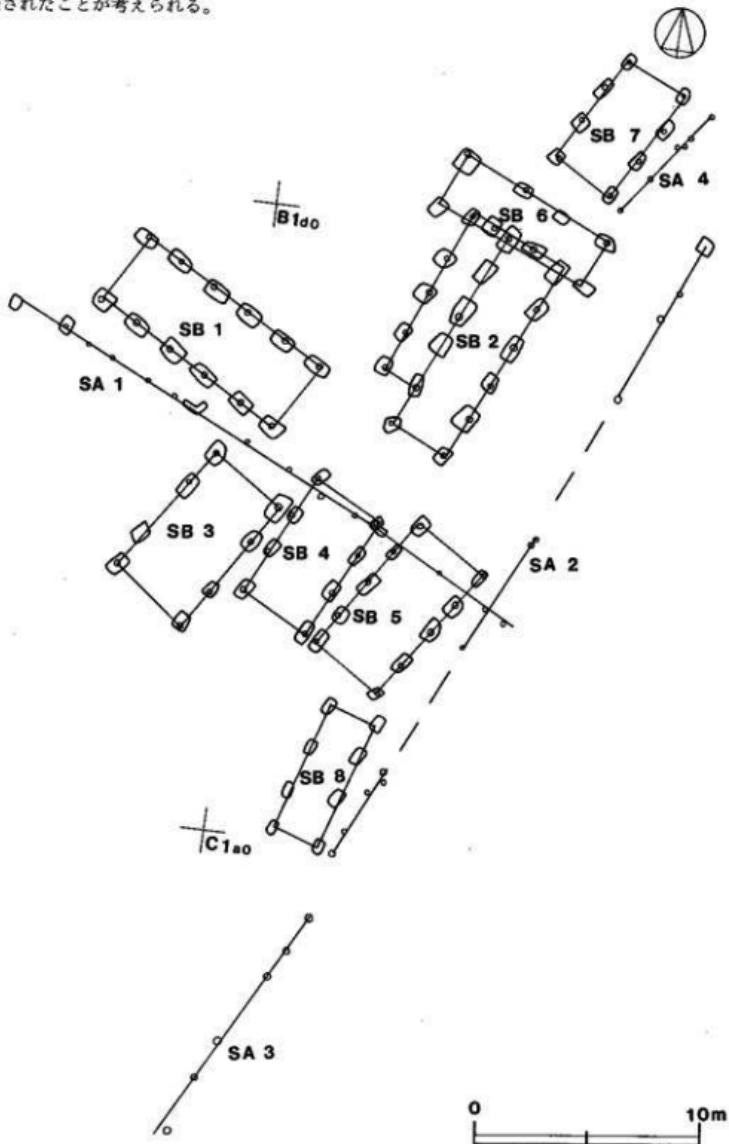
ところで、掘立柱建物跡の時期や性格についてであるが、時期については土坑の項で触れているので再度詳述はないが、土坑との重複関係から鎌倉時代以降と推定される。また、性格については城館跡に伴う建築物の一部ではないかと思われたが、これを裏付ける遺物や資料がなく、同時に検出された柵列も防御的性格が弱いことから、城館跡とするよりも有力者の館跡ないしは倉庫と考えた方がよいと思われる。

建物の重複関係から、8棟全てが同時に建てられていなかったことは明らかであり、建物の配置等から2期以上に分類できると思われる。例えば、第1・2・7号掘立柱建物跡は同時期と考えてもおかしくない。また、第3・5・6号掘立柱建物跡の組合せも考えられる。あるいは、第2・3・5号掘立柱建物跡の組合せ也可能であろう。しかし、それぞれの時期が不明であるため、推定グループ間の新旧関係はわからない。いずれにしても、同時に数棟が建てられ、その後、建て替え等が何度も繰り返された結果、8棟の建物跡として検出されたものであろう。

(2) 柵列

柵列は4条検出されている。第1号柵列と第2号柵列は、ほぼ直角に交わっている。第3・4号柵列は単独で検出された。なお、第1号柵列は第4・5号掘立柱建物と重複している。これらの柵列は、掘立柱建物跡に付随して構築されたものと思われ、中でも第4号柵列は第7号掘立柱建物跡に沿っており、その全長も桁行長と同じであることから、第7号掘立柱建物跡のために構

築されたことが考えられる。



第98図 柱立柱建物跡・格子配置図

当遺跡で検出された柵列は、柱穴が連続して認められたものは少なく、柱穴間のあいているものが多い。また柱穴も、径15~25cm程のものが多く、いわゆる城館跡に伴い敵を防ぐ機能をもつた柵列とは考え難い。建物を取り囲むように検出されていることから、垣根あるいは土地の境界としての性格が強いのではないかと思われる。

第2節 遺物について

1 土器類

当遺跡の出土遺物は、縄文式土器片と土師器片が主で、遺物収納箱に35箱であった。遺物の大部分は表土層から出土しており、遺構から出土した遺物は極めて少量である。

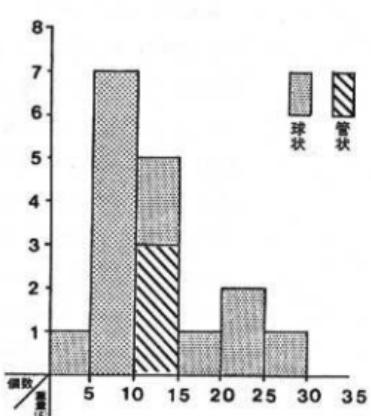
縄文式土器としては、中期前葉から中葉にかけてのものが最も多く出土している。器形が明確にわかるものとしては、第44号土坑出土の深鉢形土器と、No.3トレンチ出土の浅鉢形土器の2点だけである。深鉢形土器は口縁部が大きく外反して開くもので、全面に縄文が施されている。浅鉢形土器は算盤玉に似た器形で、口縁部文様帶に刺突文が施され、他は無文である。前者は加曾利E式期、後者は阿玉台式期に比定されるものである。他の土器片も、時期的には阿玉台式期～加曾利E式期に比定されるものが多い。阿玉台式期（第87図の130）の土器は平縁のものは少なく、波状あるいは把手をもつ口縁部が目立っている。文様は、隆帶と刺突文で構成され、縄文が施されるものは比較的少量である。加曾利E式期（第84図の1）の土器も波状口縁を呈し、キャリバ一形のものが多い。口縁部文様帶は隆帶を弧状に配し、胴部は懸垂文を施すものが主である。このように中期の土器が最も多いが、他に早期後葉に位置づけられる土器として野島式・鶴ヶ島台式等の条痕文系の土器が出土している。前期の土器としては浮島式の土器が比較的多く出土しており、貝殻腹縁文・刺突による三角文が施されている。後期以降の土器は出土していない。

古墳時代～奈良時代の土器としては土師器が主で、わずかに須恵器がみられる。土師器の器種としては壺が最も多く、甕・高壺は少量である。古墳時代中期に比定されるものは第15号住居跡出土の高壺脚部がある。壺底部から直線的に裾部にのび、裾部は大きく外下方に開くもので、外面はヘラミガキが施されている。

古墳時代後期に比定される遺物は最も多く出土している。壺は口縁部と体部の境に稜を有するものと、稜がないものの2種類に大別できる。両者とも底部は全て丸底で、体部は内彎しながら立ち上っている。整形技法は、口縁部内外面はヨコナデ、その他の内面はヘラミガキ、外面はヘラミガキあるいはヘラケズリが施されるのが一般的である。

須恵器は蓋だけが出土しており、口縁部内側に低いかえりをもっている。この須恵器は8世紀前半に比定されるものである。

2 土錐類

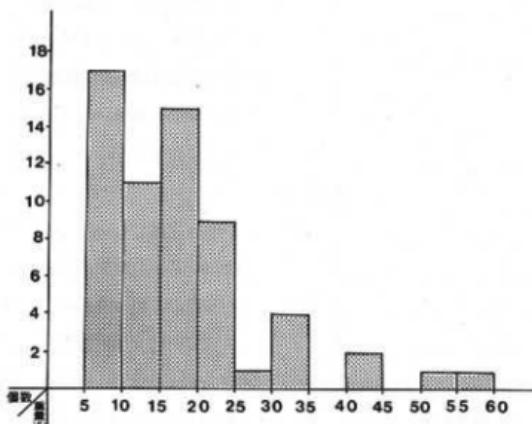


第99図 球状・管状土錐の重量分布

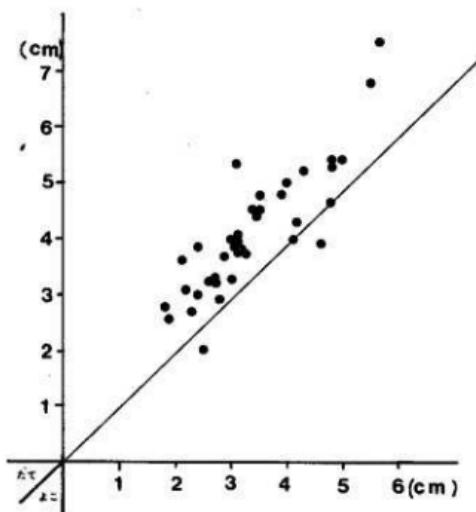
土錐類は比較的多く出土しており、球状土錐22点・管状土錐7点・土器片錐50点の総数79点である。遺跡の北側が北浦に面しており、昔から漁業が盛行していたことを物語る出土遺物であろう。

球状土錐は、3.8g～28gまでの重量が計測されているが、重量分布図をみると、5～15gまでの範囲に集中することがわかる。管状土錐は10～15gの範囲に集中している。

土器片錐は、5～60gの広い範囲に渡っているが、量的に多数を占めているのは5～20gのもので、1点当たりの平均重量は18gである。これは、球・管状土錐の重量と比較しても、非常に似た傾向を示している。ところで、県内各地域で出土した土器片錐の平均重量、あるいは集中する範囲を図示すると第102図のようになる。(土器片錐はもっと多くの遺跡で出土しているが、拓影図だけのものが多く、重量計算の不可能なものが多かった。)最も大形のものは竜ヶ崎市仲根台B遺跡(注1)の土器片錐で、30～60gの範囲に集中し平均重



第100図 土器片錐の重量分布



第101図 土器片錐の大きさ

遺跡名	重量(g)	10	20	30	40	50	60	70
大谷津A(中)		—	—	●	—	—	—	—
下広岡(中)		●	—	—	—	—	—	—
三反田(中)		—	—	●	—	—	—	—
境松(中)		—	—	—	—	—	—	—
境貝塚(中)		—	—	—	—	—	—	—
赤松(中)		—	—	—	—	—	—	—
沼尾原(中～後)		—	—	—	—	—	—	—
廻り地A(中～後)		—	—	—	●	—	—	—
仲根台B(中)		—	—	—	—	—	—	●
南三島1・2(中)		—	—	—	—	—	—	—
小場(後～晩)		—	—	—	—	—	—	—

第102図 土器片錐平均重量(——は最多範囲)

土器片錐を漁網用錐と考えた場合、内湾的水域で使われた可能性を残しながら、主に狭い河川や入り込んだ樹枝状の水域で使用されたと結んでいます。この推定は主に立地条件を考えているわけで、当遺跡も北浦に面し、かつ北浦から入り込む小支谷が発達した地形に立地している等、人見

量は48gである。鹿島町沼尾原遺跡(注2)と竜ヶ崎市南三島遺跡1・2区(注3)のものは20~35gの間が多く、両遺跡とも極めて似た状況を示している。勝田市三反田遺跡(注4)、竜ヶ崎市廻り地A遺跡(注5)は平均重量が34gと同一である。谷和原村大谷津A遺跡(注6)では、10~30gに集中し、平均重量は21.5gである。桜村下広岡遺跡(注7)・谷田部町境松遺跡(注8)・竜ヶ崎市赤松遺跡(注9)等の土器片錐は軽量のものが多く、10~20gの範囲に集中し、下広岡遺跡では平均重量14gである。このようみてみると当遺跡出土の土器片錐は軽量の部類に属し、仲根台B遺跡の3分の1程度の重量しかないことがわかる。

土器片錐については、人見暁朗が詳細なデータをもとに比較検討を行っている(茨城県教育財團文化財調査報告第27集南三島遺跡1・2区昭和59年8月)。それによると、

氏の推定に一致する点が多い。

では、遺跡によって土器片錐の大きさ（重量）に差があるのは、何に起因するのだろうか。やはり遺跡の立地条件が大きく影響することは確かだと思われる。しかし、よく似た環境下（当遺跡と鹿島町沼尾原遺跡は、ともに北浦に面した台地上に位置している）における遺跡間でも差異が認められることから、必ずしも立地条件の違いだけではないことがわかる。他の要因として考えられることは、水深・流速の差異、魚の種類、捕獲方法等がある。ところで、土器片錐が出土している遺跡の時期をみると、中期～後期にかけての時期であることがわかる。沼尾原遺跡は称名寺式期～堀之内式期、仲根台B遺跡は主に加曾利E IV式期、南三島遺跡は加曾利E III～IV式期、三反田遺跡は加曾利E式期、廻り地A遺跡は称名寺式期～堀之内式期であり、これらの遺跡は比較的大形の土器片錐が出土している。これに対して、大谷津A遺跡は阿玉台式期、境松遺跡は阿玉台式期～加曾利E式期、下広岡遺跡は阿玉台式期～加曾利E式期、当遺跡も阿玉台式期～加曾利E II式期であり、出土している土器片錐は全般に小形である。このようにみてくると、同じ中期でも前葉に位置づけられる阿玉台式期の遺構・遺物がみられる遺跡の土器片錐は小形であり、加曾利E式期以降になるとやや大形化する傾向がみられる。

以上の点から、土器片錐の大きさの違いについては立地条件等の他に、時期差を考える必要がある。大まかではあるが、茨城県内の各遺跡において土器片錐が大形化する傾向をみせるのは、加曾利E式期以降ではないかという推定が可能である。もちろん、この点については資料の増加を待って、さらに検討をしていかなければならない。最後に、千葉県市原市の草刈遺跡（千葉県文化財センター「千原台ニュータウンIII」昭和61年3月）の興味あるデータを提示しておきたい。草刈遺跡は縄文時代中期の遺跡で、阿玉台式期～加曾利E式期の遺物が出土している。さらに、多量の（2403点）土器片錐が出土しており、これを時期毎に分類し、平均重量を出している。

(時期)	(平均重量)
阿玉台式期	30.5g
加曾利E I式期	38.0g
加曾利E II式期	34.9g

注

- 1 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9」 茨城県教育財団 昭和58年
- 2 「鹿島町の文化財第11集 沼尾原遺跡」 沼尾原遺跡発掘調査会 昭和55年
- 3 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10」 茨城県教育財団 昭和59年
- 4 「三反田廻り地貝塚発掘調査報告書」 勝田市教育委員会 昭和57年

- 5 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7」 茨城県教育財團 昭和56年
- 6 「水海道都市計画事業・小網土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書3」 茨城県教育財團 昭和59年
- 7 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2」 茨城県教育財團 昭和55年
- 8 昭和60年度に茨城県教育財團により調査された遺跡で、報告書は昭和62年3月に刊行される予定である。
- 9 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4」 茨城県教育財團 昭和54年

3 石器・石製品について

石器類は非常に少なく、磨製石斧3点・磨石9点・砥石1点・石鎌2点・石槍1点の計16点である。この中で砥石は古墳時代以降のものと考えられる。石器の石質をみると、緑泥片岩・砂岩・

安山岩・石英等の岩石が利用されている。No.4と8(第89図)の磨石はやや特異な形状を呈している。2点とも石英質の岩石で、球状の原石の周囲を両側から磨って用いたもので、明確な棱が側面に認められる。

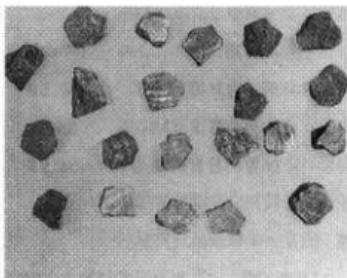
石製品としては、有孔円板2点・勾玉3点・紡錘車1点・臼玉7点が出土している。石質は全て滑石である。紡錘車は中央部に貫通孔がなく、未製品である。臼玉は7点とも住居跡の床面から出



滑石片



原石・板状片



加工前的小片

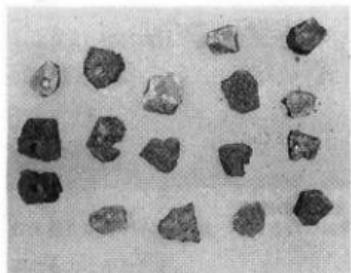
土したもので、臼玉の工房跡とみられる第15号住居跡からも1点出土している。

ところで、第15号住居跡からは臼玉の未製品及び滑石片が多量に出土したことはすでにみてき

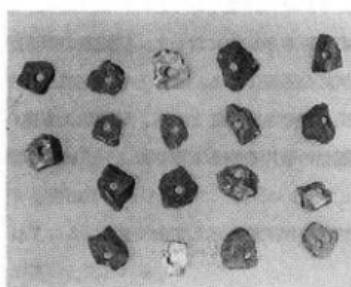
たとおりである。この出土遺物を検討してみると、白玉の製作過程を推察できる破片が認められた。次に、その製作過程を順を追ってみていくこととする。

① 原石の入手

遺跡周辺で滑石を産出する地域がないことから、他地域から搬入されたものと考えられる。



未貫通の小片



貫通孔のある小片

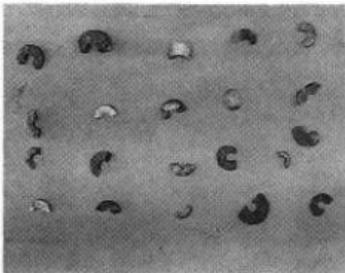
は製作途中の中片をみても両方向からあけられた痕跡は認められず、完成品も同様に片面の孔だけがやや広がっていることから推定される。出土品の中には貫通孔のあるものと未貫通のものがあり、またそれぞれの破損品も多数出土している。破損品の大部分は穿孔部から半分に割れており、貫通孔のあるものとないものの比率はほぼ同じである。いずれにしても、孔をあける工程で破損する割合はかなり高率であったことがわかる。未貫通孔の断面をみると、「U」状あるいは「L」状を呈するものが多く、「J」状のものはみられない。この断面形状から推定すると、丸棒状で先端の尖っていない工具を使用したと思われる。

⑤ 側面を磨いて円形に整形する（完成）。

⑤の段階が終了して、初めて1個の完成品となる。本跡は工房跡という性格からか、完成品は1点しか出土せず、完成品の破片も21点しか出土していない。整形する段階では、孔をあける時と違い、無理な力が加わらないため破損する割合も低かったものと思われる。側面の整形状態は、断面が「L」状を呈するものが多いが、側面に稜を有し断面が「D」状を呈するもの



孔未貫通の破片



完成品の破片

も數点検出されている。

以上、白玉の製作過程を第15号住居跡出土遺物をもとに推定してきた。①～⑤までの過程については、それを裏付ける資料が出土していることから、それほど問題ないと思われる。しかし、②以後の過程で扱われる小片の厚さをみると、2～3mmのものが多いのに対して、完成品の厚さが3～6mmあり、加工途中の小片よりやや厚くなるのが気になる点である。もっとも、完成品は古墳時代後期の住居跡から出土しており、工房跡は同中期と推定されることから、時期による違いではないかと思われる。なお、工房跡から出土した完成品の破片をみると厚さは2～3mmで、未製品の厚さとほぼ一致している。

最後に、滑石片及び未製品の重量等をまとめ、加工状況の模式図を示しておく。

滑石片+未製品等の総重量………801.2g

	加工状況	模式図	個数	純重量(g)	1個当たりの平均重量(g)
完成品	破片	Ⓐ	21	0.8	0.04
未製品	未加工の完形	Ⓑ	63	7.9	0.13
	貫通孔のある完形	Ⓒ	18	2.0	0.11
	貫通孔のある破片	Ⓓ	186	13.2	0.07
	未貫通の完形	Ⓔ	16	2.2	0.14
	未貫通の破片	Ⓕ	225	17.3	0.08
	(合計)		529	43.4	

終章 むすび

茨城県潮来町大賀地区を通る一般県道矢幡・潮来線の改良工事に先立ち、予定地内に所在する塙貝塚の発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代から中世に至る遺構・遺物を確認することができた。

縄文時代の遺構としては、土坑5基・埋甕1基が検出された。住居跡は検出できなかったが、これは後世のかく乱等により消失したものと思われる。遺物は、縄文時代早期から中期にかけての土器片が認められたが、特に多いのは阿玉台式期から加曾利E式期の土器片で、土坑もこの時期のものと思われる。

弥生時代の住居跡は1軒だけ検出したが、重複のため詳細は不明である。

古墳時代中期から奈良時代になると検出される住居跡も多くなり、互いに重複しながら15軒の住居跡が確認された。この中の1軒は石製品の工房跡とみられ、白玉の米製品や滑石片が多量に出土したことから、白玉の製作過程を推察することができた。

中世の遺構としては、掘立柱建物跡が8棟検出されている。これは前代までのいわゆる竪穴住居跡ではなく、高床式の建物跡で、今回調査されたものは有力者の館跡ではないかと思われる。また建物跡を囲むように、柵列が4条検出された。さらに、同時期と思われる土坑も多数確認されている。土坑の性格については不明であるが、内面に粘土を貼った例もみられ、墓壙の可能性が高いと思われる。

このように今回の発掘調査からは、縄文時代から中世に至るまで、古代の人々がこの地で生活を営んできたことが判明した。遺跡は北浦を見下ろす台地縁辺部に位置しており、当時の人々が生活していく上で、極めて良好な環境であったと思われる。

いずれにしても、塙貝塚の調査成果が潮来町の歴史を解明する上でさきやかな一助となれば幸いである。

最後に、本報告書を作成する上で、関係各位の御指導、御協力をいただいたことに対し、心から感謝の意を表したい。

写 真 図 版



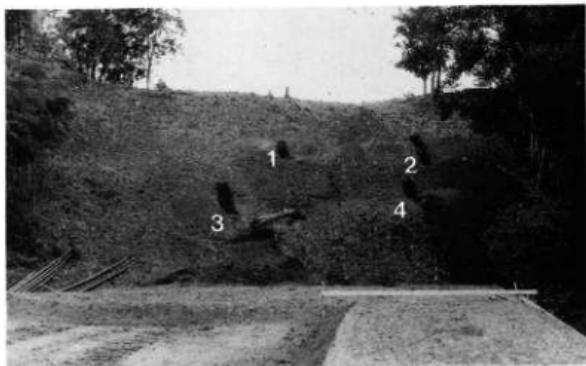
遺構確認状況



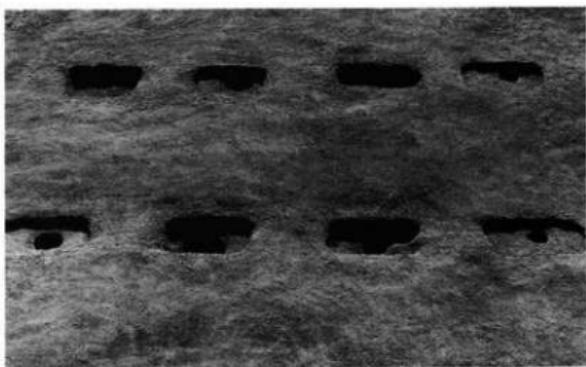
遺跡全景



遺跡全景



トレンチ発掘全景（北より）



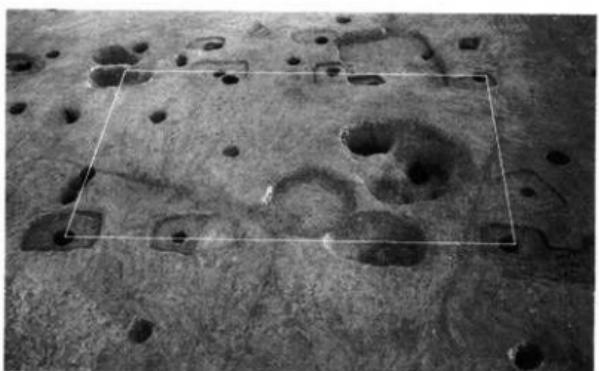
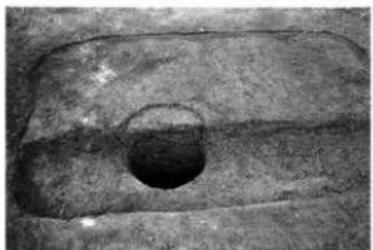
第1号掘立柱建物跡



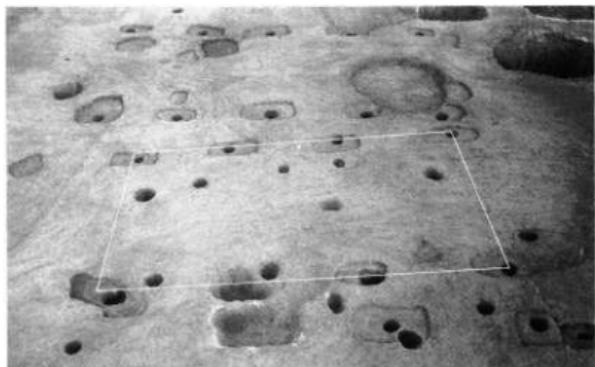
第1号掘立柱建物跡(P₁)



第1号掘立柱建物跡(P₂)



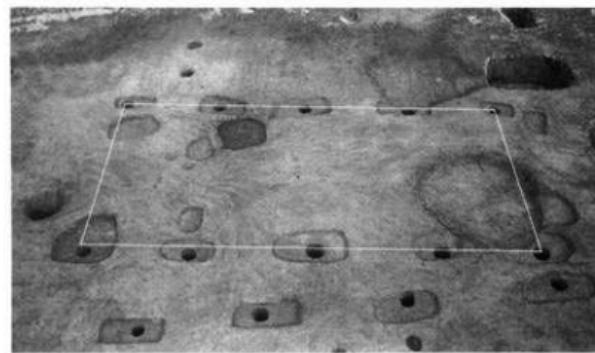
PL4



第4号掘立柱建物跡



第4・5号
掘立柱建物跡



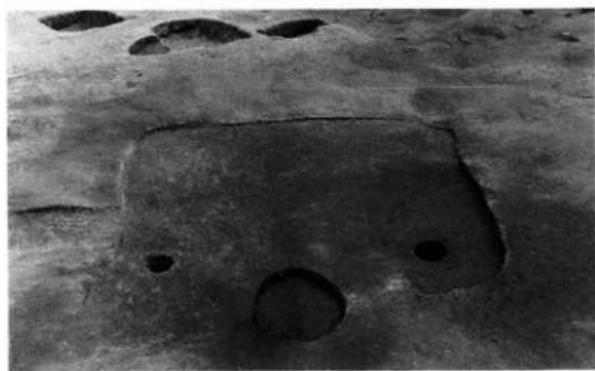
第5号掘立柱建物跡



第1号住居跡



第2号住居跡



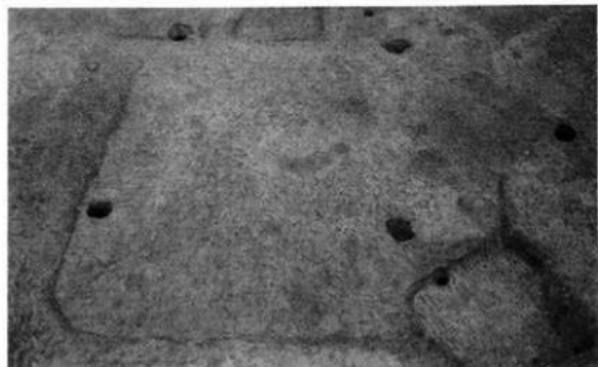
第3号住居跡



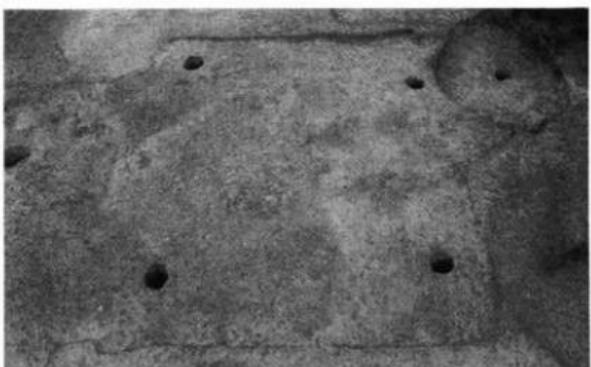
第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡



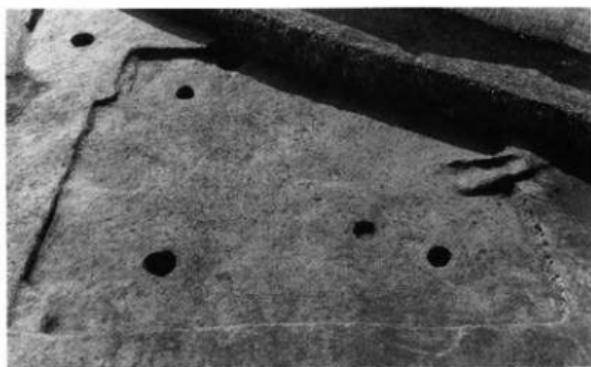
第5号住居跡



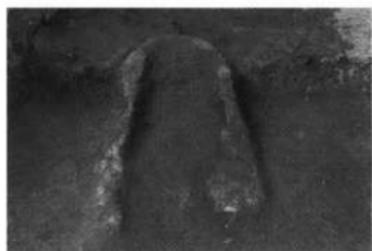
第6号住居跡



第7号住居跡



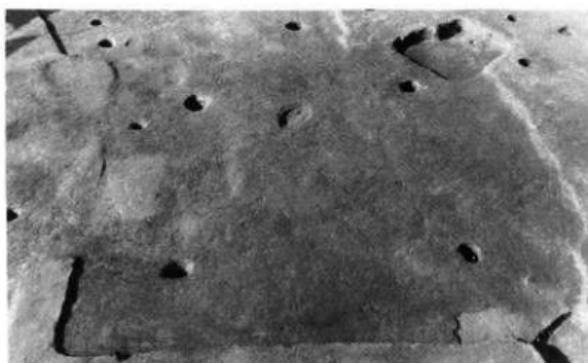
第8号住居跡



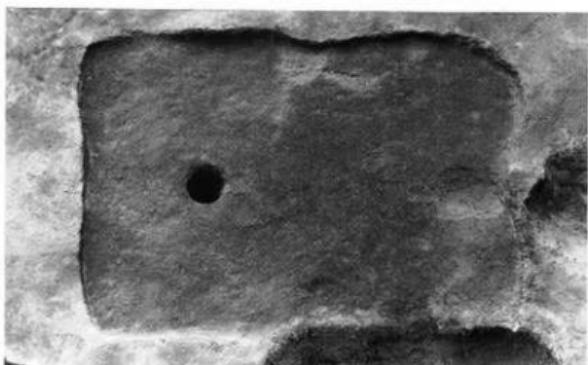
第8号住居跡カマド全景



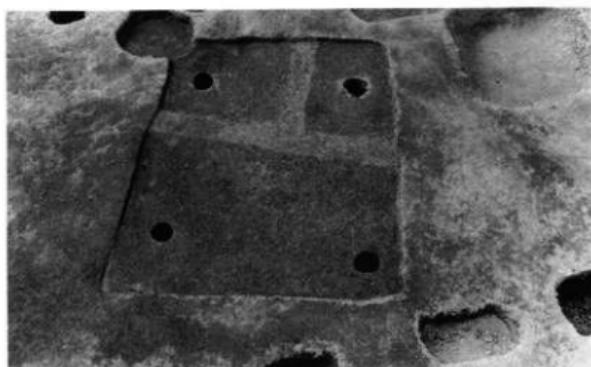
第8号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡



第11号住居跡



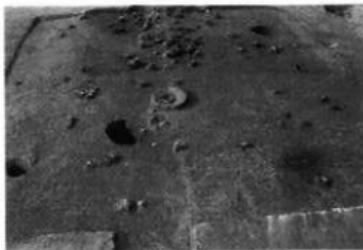
第13号住居跡



第15号住居跡



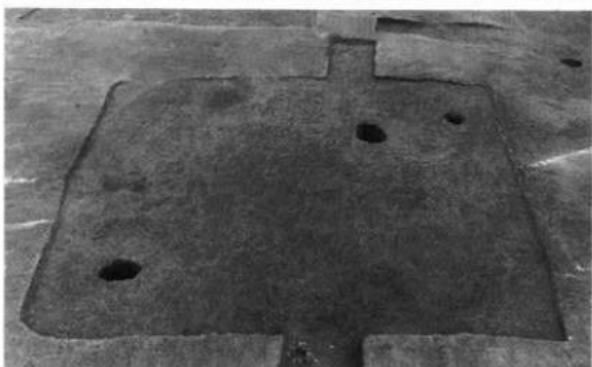
滑石片包含層



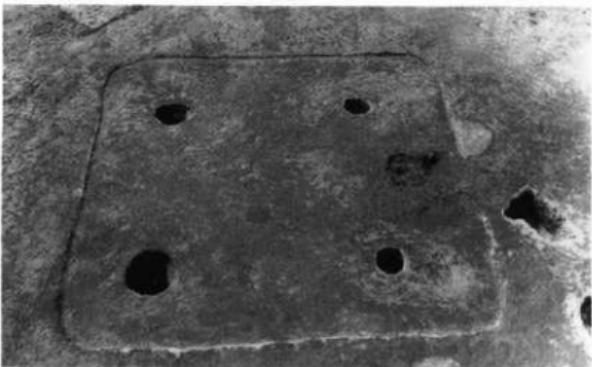
第17号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡



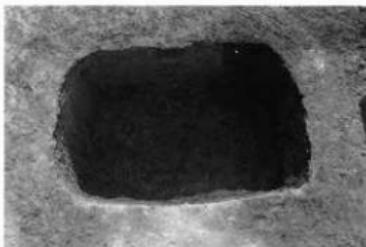
第17号住居跡



第18号住居跡



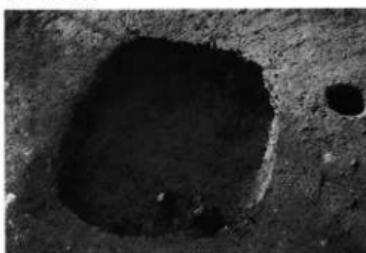
第1・13・72号土坑



第2号土坑



第3号土坑



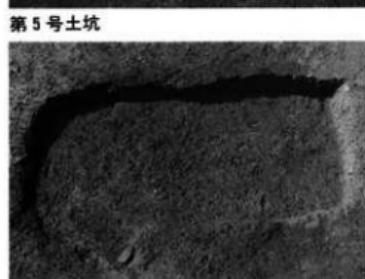
第4号土坑



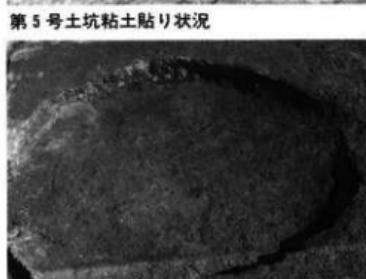
第5号土坑



第5号土坑粘土貼り状況



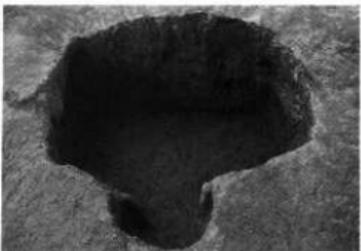
第6号土坑



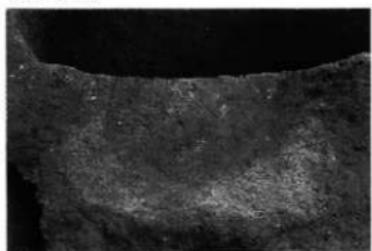
第7号土坑



第8号土坑



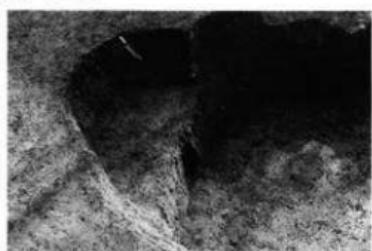
第9号土坑



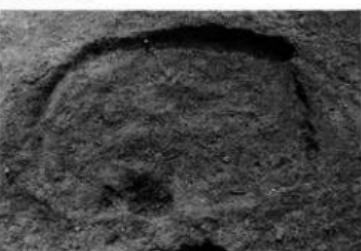
第11号土坑



第12号土坑



第13号土坑



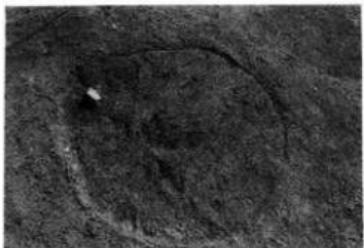
第14号土坑



第15号土坑



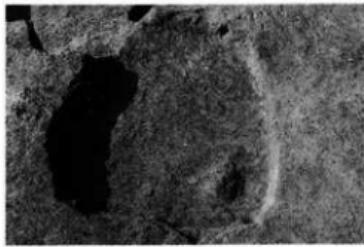
第16号土坑



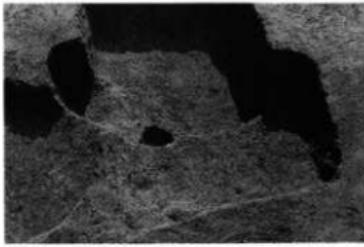
第17号土坑



第18号土坑



第19号土坑



第20号土坑



第21号土坑



第22号土坑



第23号土坑



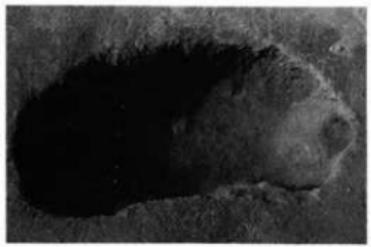
第24号土坑



第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



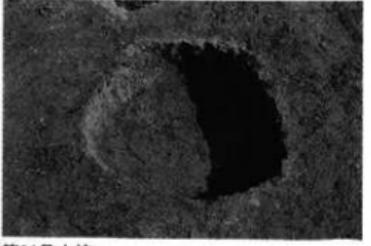
第29号土坑



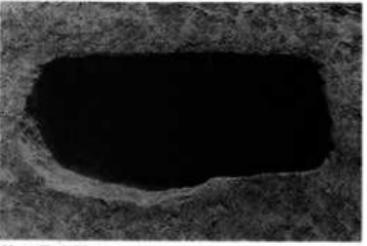
第29号土坑土层断面



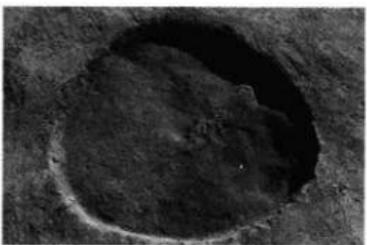
第30号土坑



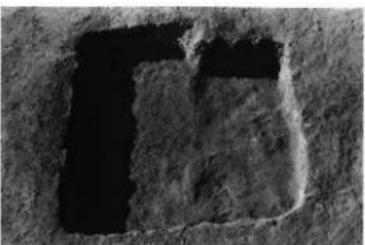
第31号土坑



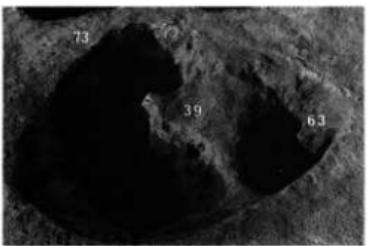
第32号土坑



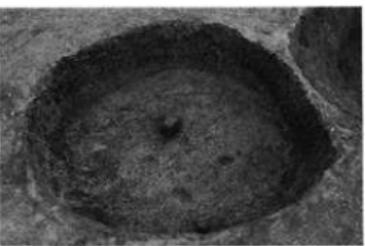
第35号土坑



第36号土坑



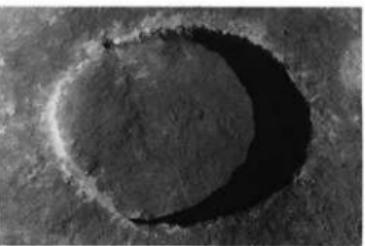
第39·62·63·73号土坑



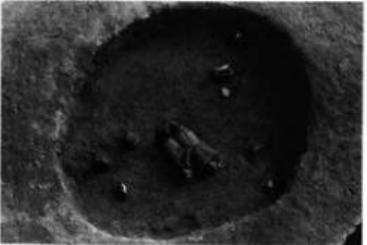
第40号土坑



第42号土坑



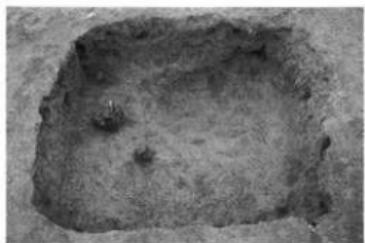
第44号土坑



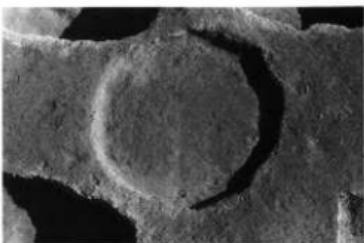
第44号土坑遗物出土状况



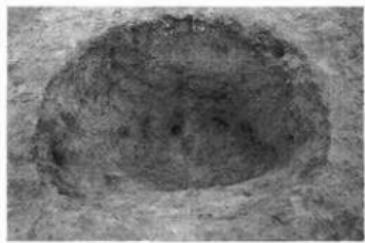
第45·46号土坑



第47号土坑



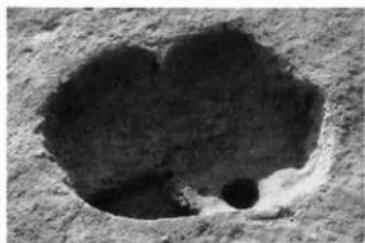
第48号土坑



第49号土坑



第50号土坑



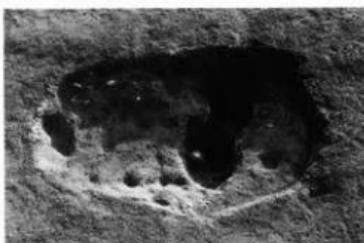
第52号土坑



第53号土坑



第55号土坑



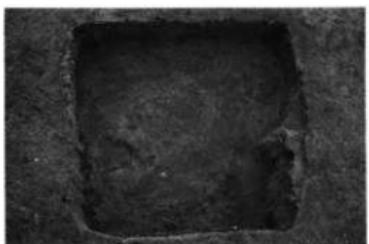
第56号土坑



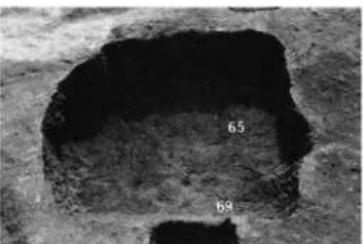
第58号土坑



第60号土坑



第63号土坑



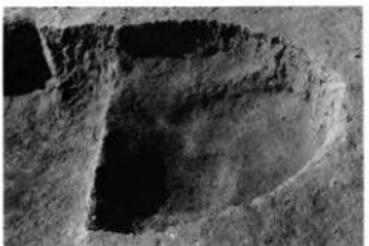
第65·69号土坑



第66号土坑



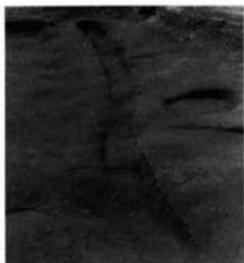
第67号土坑



第68号土坑



第76号土坑



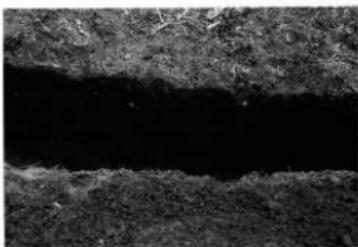
第1号溝



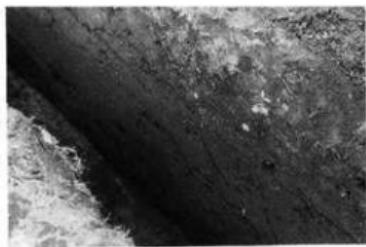
埋甕



埋甕出土状況



No.1 トレンチ



No.2 トレンチ



No.4 トレンチ



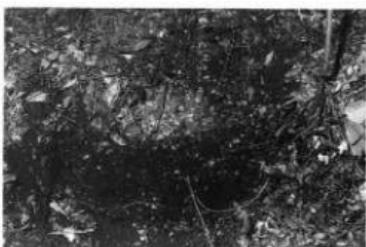
調査風景



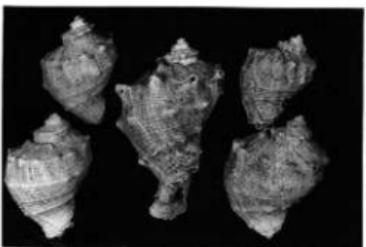
調査風景



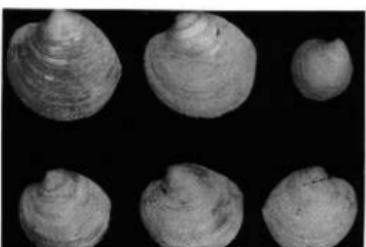
遺跡下の井戸



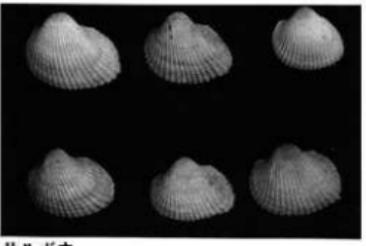
埴貝塚中心部貝層



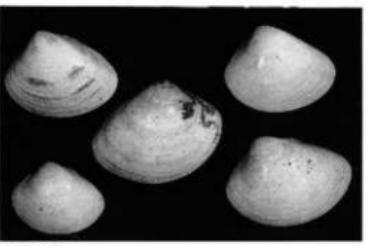
アカニシ



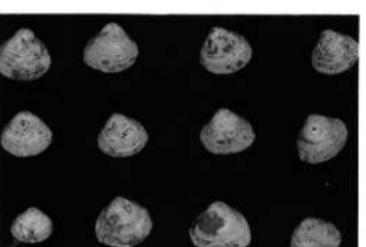
カガミガイ・オキシジミ(右上)



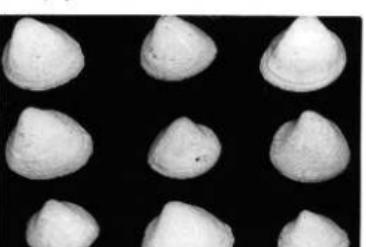
サルボウ



ハマグリ

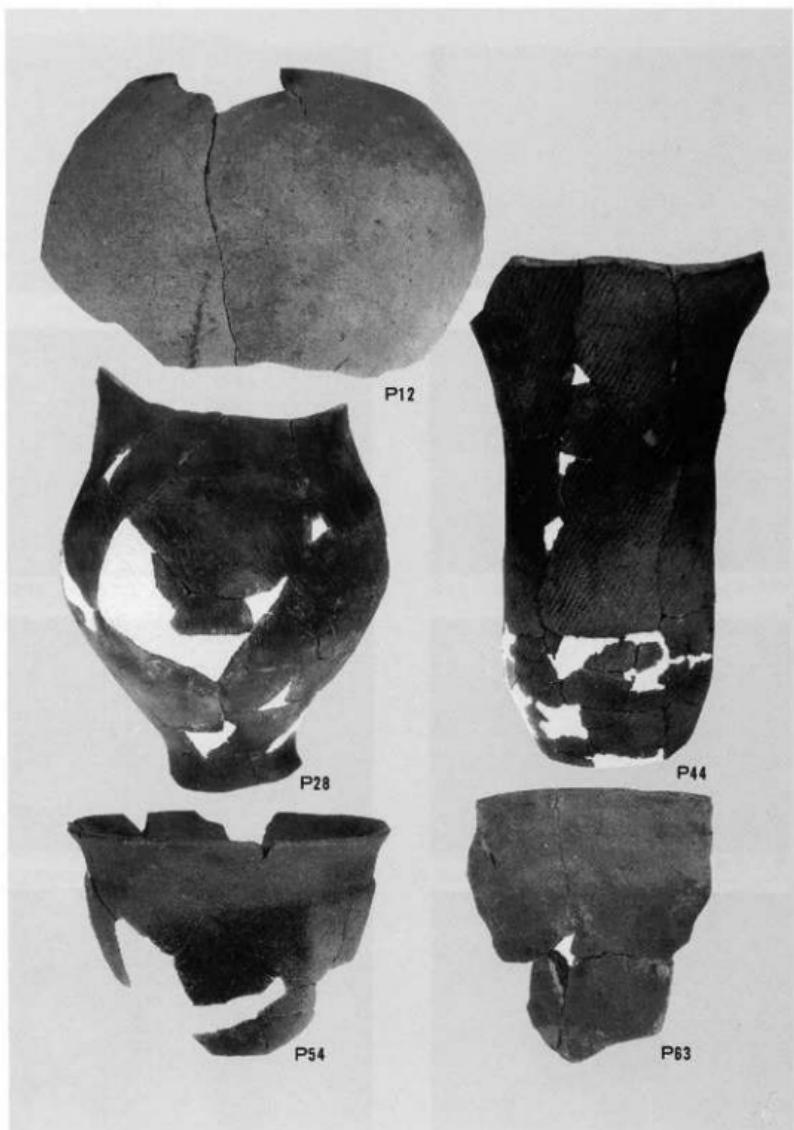


ヤマトシジミ

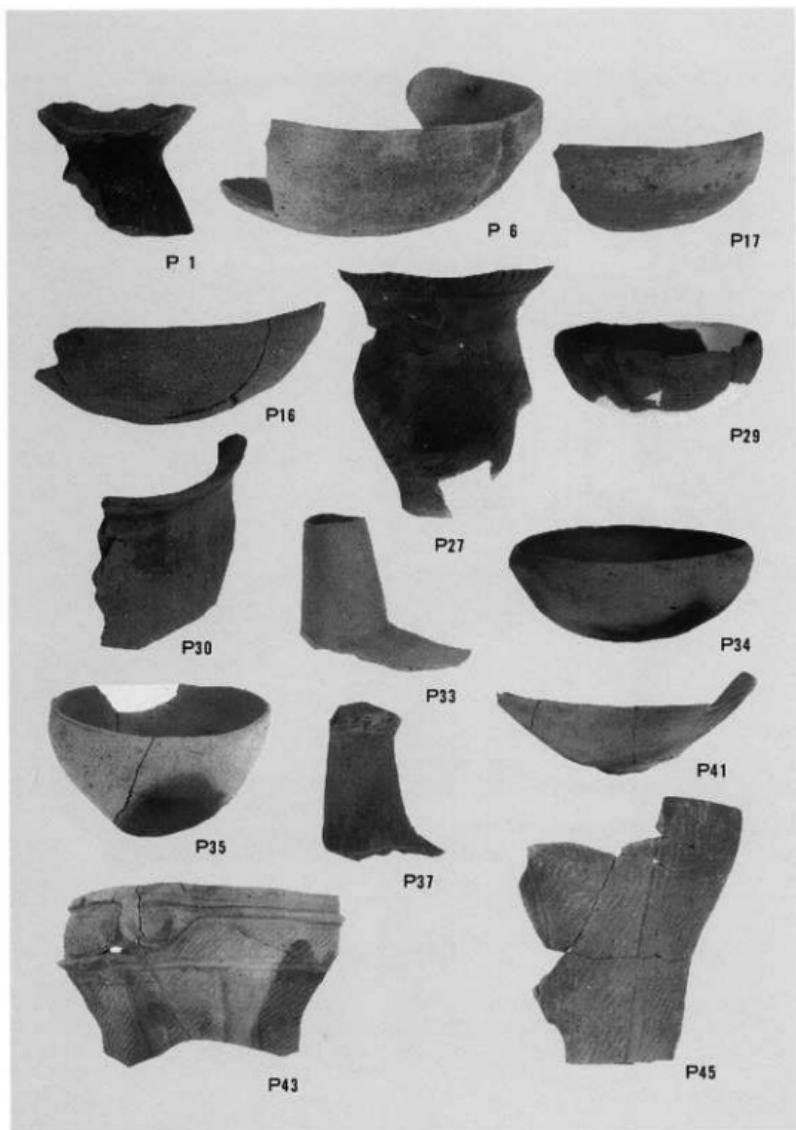


シオフキ

PL20



出土土器(1) S=1/3



出土土器(2) S=1/2



P46



P47



P50



P51



P52



P53



P55



P56



P58



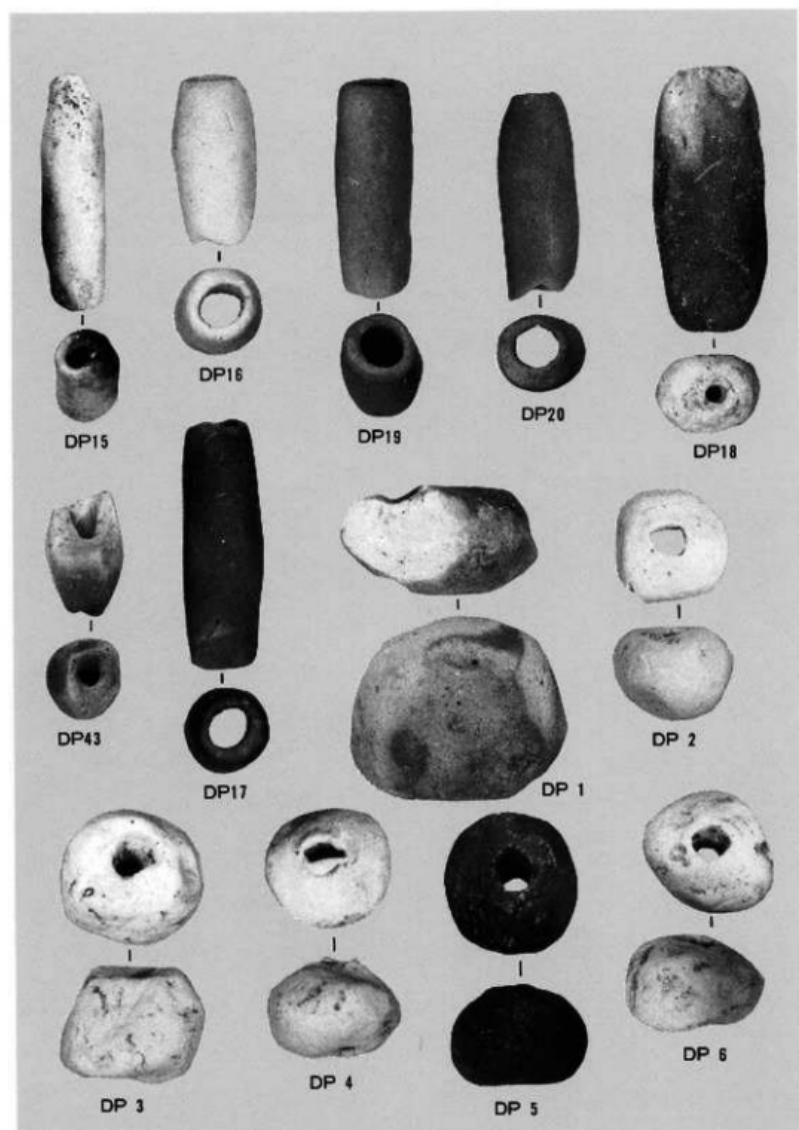
P59



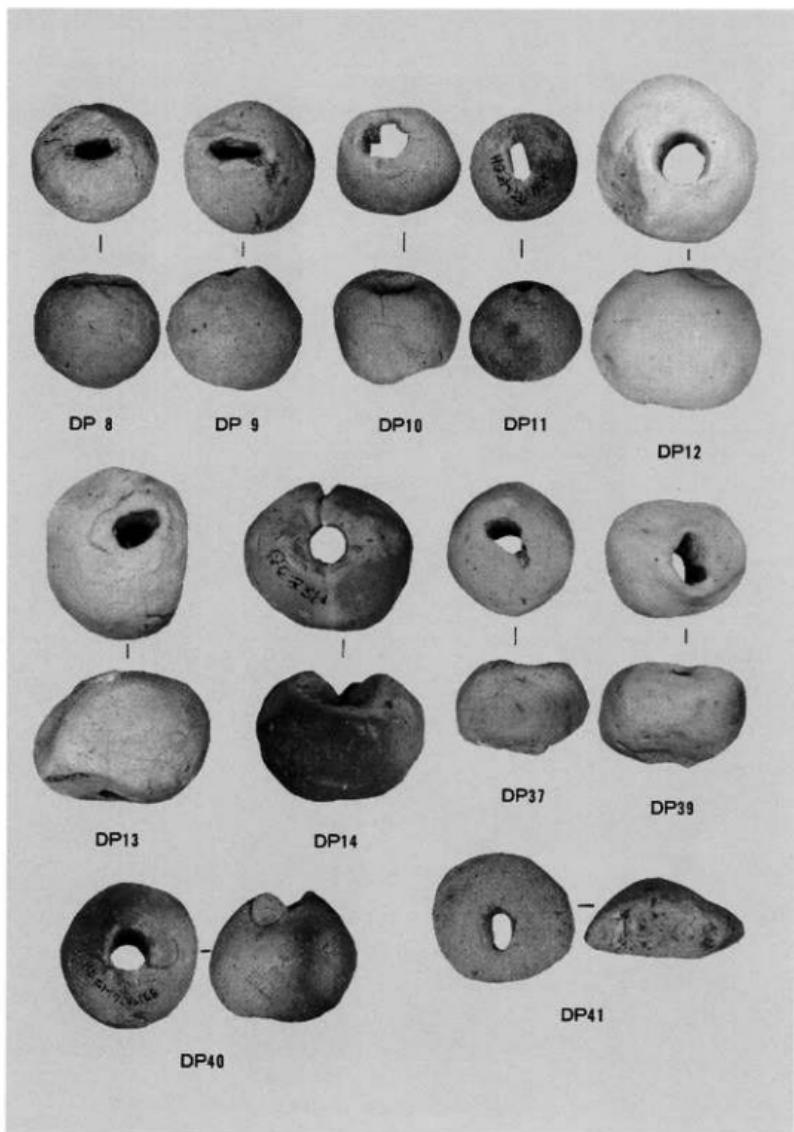
P64

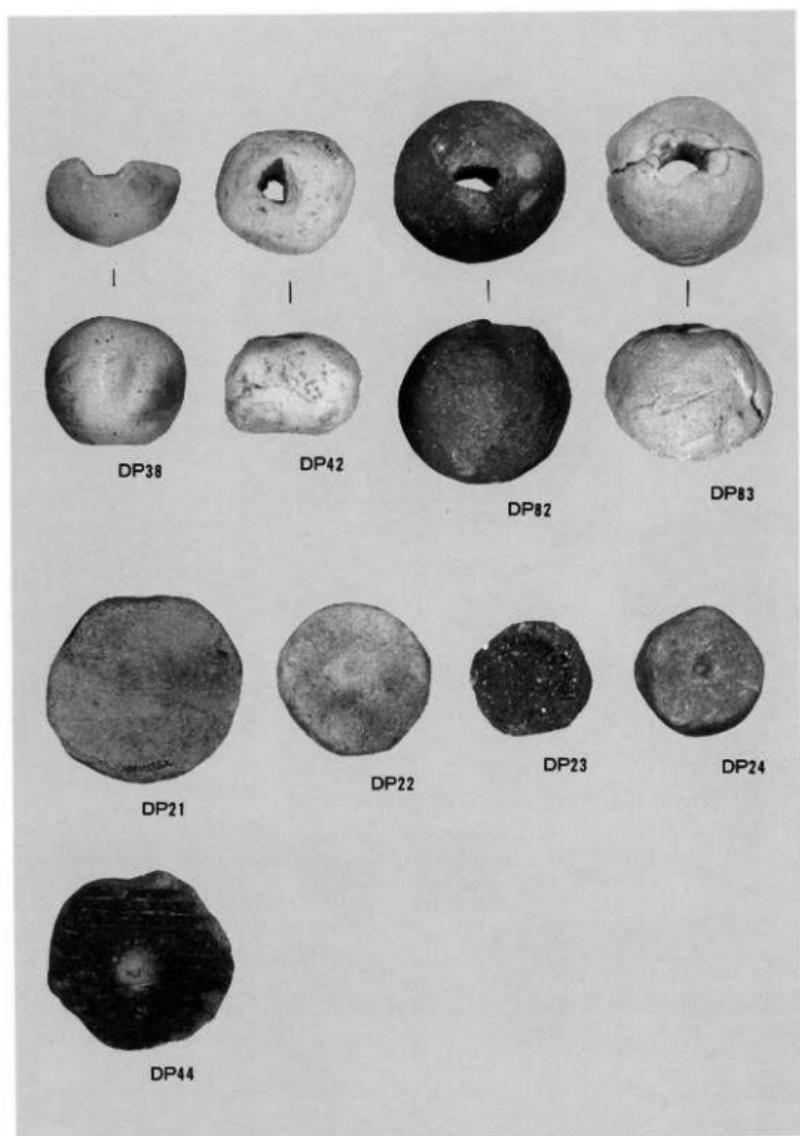


P65

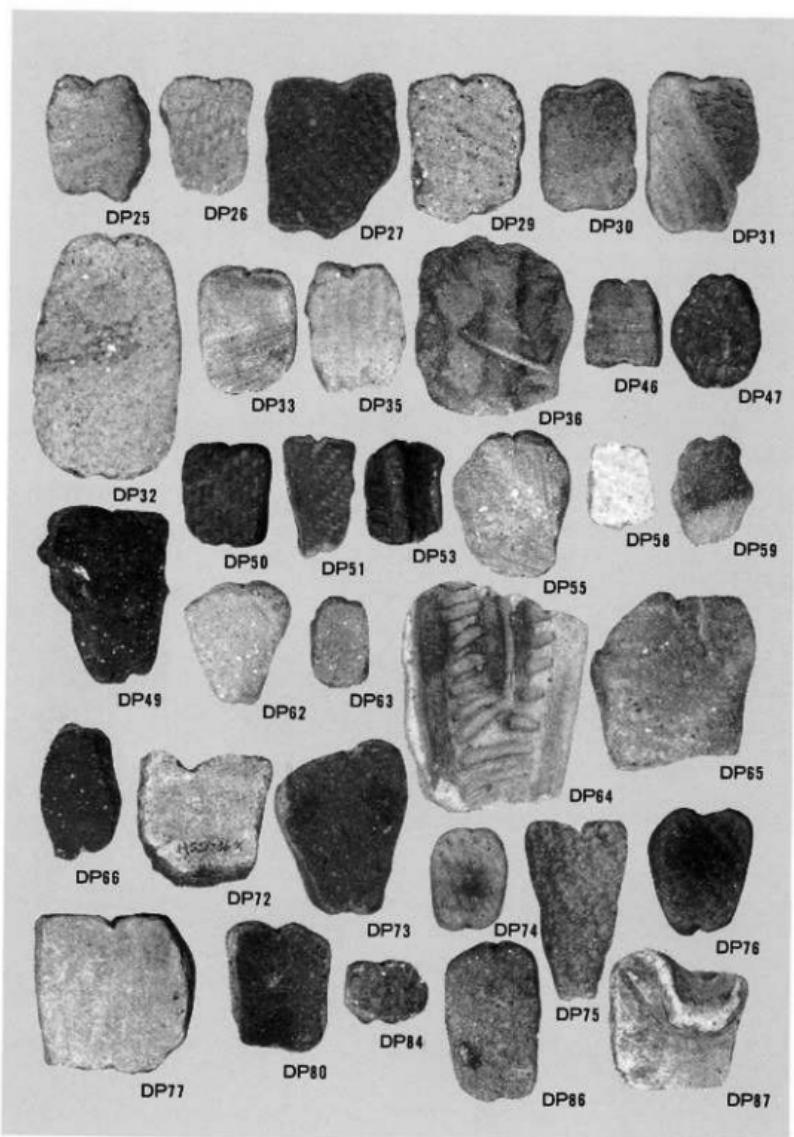


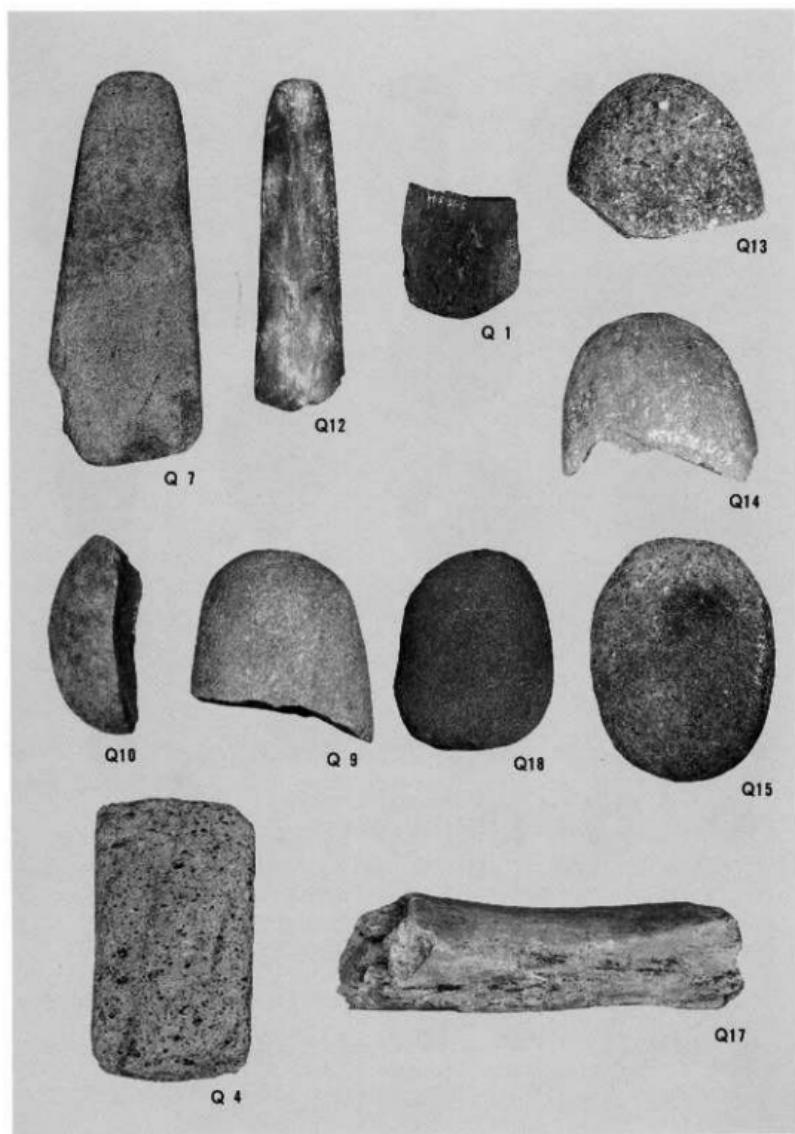
土製品(1) S=1/1



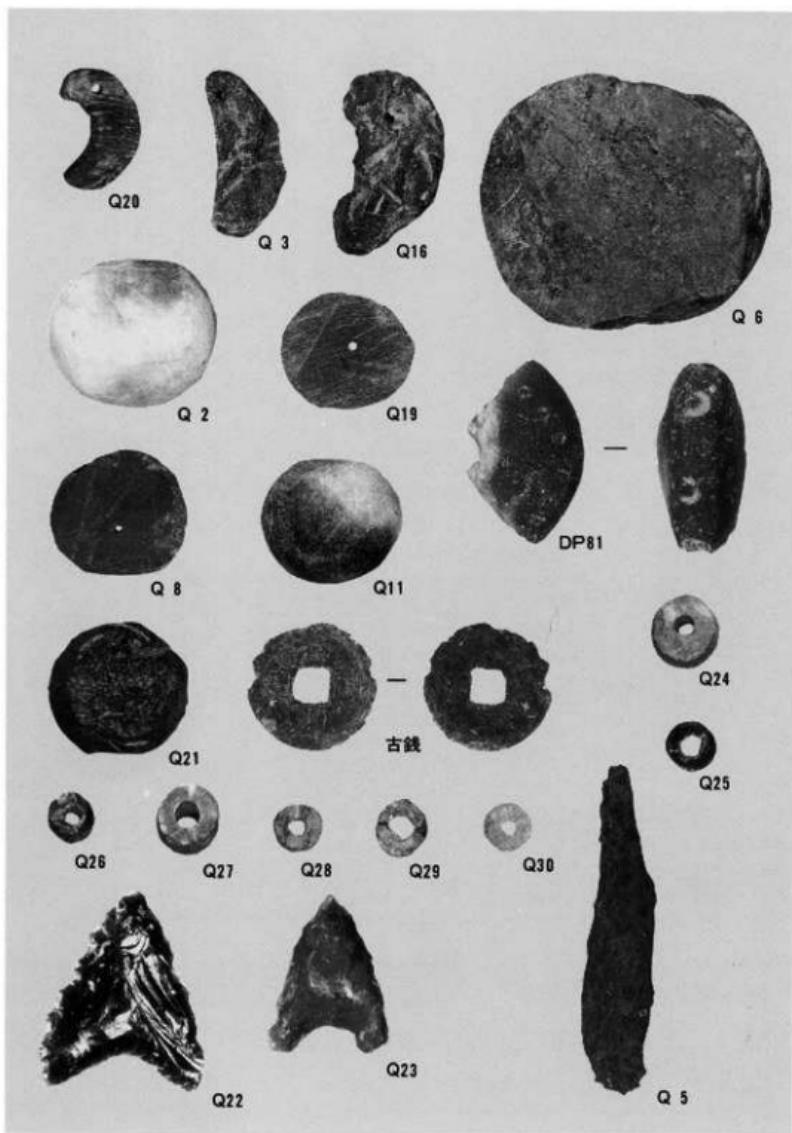


土製品(3) S=1/1





石器・石製品(1) S=1/2



石器・石製品(2) 古銭 S=1/1 (Q22~30は×2)

茨城県教育財団文化財調査報告第42集

一般県道矢幡潮来線道路改良工
事地内埋蔵文化財調査報告書

塙貝塚

昭和62年3月25日印刷

昭和62年3月31日発行

発行 財團法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

水戸市松が丘2-6-24

